九　林桐葉

林桐葉、後臨高と改む、一に元竹と號す、通稱は七左衛門、熱田市場町に住せり、俳諧を好みて、松尾芭蕉の門下たり、貞享元年芭蕉行脚して尾張に至り桐葉が家に寓す。

旅亭桐葉のぬしこゝろさし淺からさりけれは

暫とゝまらんとせし程に　芭蕉

この海に草鞋すてん笠しくれ　桐葉

むくも佗しき波のから蠣　東藤

風に多瓜ふらりとふら付て　工山

これ當時の俳諧なり、十二月十九日次の歌仙を催しぬ。

尾張の國熱田にまかりける頃人々師走の海見んとて船さしけるに

海暮て鴨のこゑほのかに白し　芭蕉

串に鯨をあふる艤　桐葉

二百年我此山に斧とりて　東藤

樫の種まく秋は來にけり　工山

入月に鵲(イスカ)の鳥のわたる空　桐葉

駕なき國の露負れ行　芭蕉

以下略

翌年三月、芭蕉湖南より水口を經て、再び桐葉が家に至り、二十七日又歌仙を催せり、其發句は、芭蕉の

何とはなしに何やら床しすみれ草（後に初句を山路來てに改む）と

桐葉の彳々と榎の花の袖にちる、にして前年の歌仙を合せて之を熱田三歌仙と稱し、冬の日の五歌仙と共に正風俳諧の金玉と爲す。

已にして芭蕉の江戸に下らんとする時

再ひ熱田に草鞋を解て林氏桐葉子の家をあるじとせしに又おもひたちて

あつまにくだるとて

牡丹葉分て這出る蜂の名殘かな　芭蕉

と書きて與へければ、桐葉答ふるに一句を以てす。

うきは藥の葉をつみし跡の獨かな　桐葉

又、桐葉が芭蕉を送る、次の二句あり。

翁みの路へうち越んと聞えければ　桐葉
檜笠雪をいのちの舍りかな　芭蕉

稿一つかね足つゝみゆく
翁膳所へのぼり給ふ時八橋のはし株
炭のことく埋れたるをわかち餞すとて　桐葉
霜の袖はし株つゝむ別かな

以て如何に師弟の情の遲かりしかを見るべし、正德二年五月十三日歿す、熱田白鳥山法持寺に葬る。（熱田三歌仙、幽蘭集、俳諧年表、尾張名所圖繪、芭蕉全集）

一〇　澤　露　川

澤露川、通稱は藤屋市郎右衛門、月空庵と號す、伊賀國阿拜郡（今阿山郡）友生村澤氏の子なり、名古屋に出でて渡邊氏の女に配し一家を起す。

露川性溫順柔和にして滑稽を好む、初め俳諧を眞珠庵如泉に學び、元祿四年の冬松尾芭蕉の名古屋に來れる時其門に入る、金城（金澤）に北枝あり、護城に露川ありと稱せられて、蕉門一方の雄鎭たり。

元祿七年五月、芭蕉江戸を出でて、東海道を上り、名古屋を經、伊賀を越えて洛に赴く、露川が徒送りて佐屋に至り、隱士山田氏の亭に投ず、彼の水鷄啼くと人のいへばや佐屋泊、の句は當時の吟なり、芭蕉歿後、露川佐屋の吟士と謀り、碑を樹てて、此句を刻し銘を選びて水鷄塚を起す（碑銘に元祿八つの年とせるは誤なる事明白なり）

享保の初露川の名大に鳴る、露川常に諸州に出遊し、至る所其風を慕ひ教を乞ふ者千を以て算するに至る、濃の支考、露川が私說を唱へ、師風に違ふを詰りて書を送る之を露川責といふ、露川亦書を作りて其嘲を解く、名けて合相楔といふ、著す所流川集、紀行、月次十萬句、四季の遊覽等あり、門下白梵庵馬州最も著る、寛保三年八月二十三日歿す、享年八十三、法應寺（中區白川町）に葬る。（墓碑、月空庵塚碑、芭蕉全集、金鱗九十九之塵、俳諧年表、まにふんで、俳家奇人談、張州年中行事抄、水雞塚集）

一一　僧　丈　草

僧丈草、俗姓は內藤、幼名は林之助、後林右衛門と稱す、犬山成瀨氏の家士源左衛門本守の長子なり、本守、隼人正、正虎、正親の二代に仕へ、祿百五十石を領し、延寶三年正月、正虎の子寺尾土佐守直龍の狂疾の故を以て、犬山に蟄居するに及び、之が附屬を命ぜらる。

丈草、歳十四、延寶三年召出されて切米十三石扶持二人分を給はり、父と共に直龍の附屬を命ぜらる。

丈草性至孝、幼より文武の材あり、穂積武平に從ひて詩文を學び、一風又懶窩と號す、九歳の時、發句して笑はれにけりけふの月」の句を作る、一年右指を傷け、乃ち刀柄握り難しといふを以て、元祿元年仕を辭して剃髪し、先聖寺玉堂和尚に參して禪を學ぶ、時に歳二十七なり、蓋し其意異母弟をして家を繼がしめ父及繼母の意を安んぜしめむが爲なりといふ。

遁世の偈に曰く

多年負屋一蝸牛、化做蛞蝓得自由、火宅最惶涎沫盡、追尋法雨入林丘

又「涼風にきゆるを雲のやとりかな」と後湖南、及深草に住し、曾て洛の史邦に伴れて芭蕉に見え其門に入る、所謂十哲と稱せらるゝ者の一なり、芭蕉の嵯峨日記に、廿五日（元祿四年四月）史邦丈艸被訪とありて、丈草の題落柿舍、尋小督墳、の詩二首及芽出しより二葉に茂る柿の實」の句、史邦の途中吟一句を載せたり、丈草の蕉門に入れるは蓋し此時か、是より去來、許六、木因、政秀等と交り吟會多く此人を缺かず、芭蕉謂ふ、此僧此道にすゝみ學ばゝ、人の上に立む事、月を越ゆべからずと、然れども性苦しみ學ぶ事を好まず、感ありて吟じ人ありて談ず、常は殆ど相忘れたるが如し、芭蕉深川に歸りて後、去來同人の句を送る、中に丈艸が

大原や蝶の出てまふおぼろ月

の句あり、芭蕉其風雅の進境を賞し、此僧なつかしといひ送る、芭蕉の大坂に病むや、門人看護に集る、病間各句を吟じて慰む、芭蕉獨丈艸の

うつくまる藥の下の寒さかな

の句を賞す。

芭蕉歿して後、義仲寺の山上に草庵を結び、佛幼庵と名け、芭蕉を開祖とし門を閉ぢて籠居すること三年、近傍の小流に小石を拾ひ、一石一字の法華經を書寫して、經塚を築き、以て芭蕉の冥福を祈る。

曾て舊里に歸りて

旅ころもけふきそ川の影あさみ染てやみにし昔をそ思ふ

又

精靈にもとりあはせつ十年ふり

共　蚊帳を出てまた障子あり夏の月

の句は魯九が剃髪せる時、道心の堅固ならん事を望みて贈れる所にして人口に膾炙す。

寶永元年二月廿四日寂す、年四十三、龍が岡の東林に葬る、著す所寂轉草、丈草句集あり、其詩集を聽鳴草といふ。

丈草世外の人となり、貧うして多病なり、庵中一の長物なし、曾て書を人に寄せて、剃刀と

傘とを借る、曰く

傘と剃刀をさへも持たぬ身の上かなと、よしなき貧乏自慢が嵩じて、明日ある人のもとへ齋によばれ候に、髭は汁を吸る邪魔になり、雨は衣の袖しぼらんことを思ふに、ひしと困り果て申候、まゝ御無心申入候よく〳〵磨ぎすまして一丁、たとへやぶれかゝりても一本御かし可被下候云々と、

以て其清操を窺ふべし。（内藤氏系譜、尾張名所圖會、蜻蛉日記、去來文集、文章文集、文章句集、嬰轉草、鳴草、好古類纂、俳家奇人談、近世畸人傳）

一二　太田巴靜

太田巴靜、六々庵と號す、美濃羽栗郡竹ケ鼻の人なり、出でて名古屋に住す、俳諧を松尾桃青に學び、後各務支考に從ふ、曾て夕暮も曙もなし雞頭花の句を作り、人口に膾炙す、世呼びて雞頭の巴靜といふ、門人諸國に徧く常に出遊して草庵を三十六所に作る、由りて六々庵の號あり、横井也有最も之を重んず、寛保三年芭蕉翁五十回忌を大須眞福寺に營み、三晝夜に渉りて五十韻五百卷の俳諧を行ひ、以て追福に資せんとす、是より先芭蕉の、三井寺の門たゝかばや今日の月、支考の、三日月や空に咲たは何の花、及び己の、名月や都のよるの花戻り、の句碑を眞福寺境内に建てゝ名けて月見塚といふ、延享元年二月十九日歿す、寶生院（中門前町）に葬る、著す所刷毛序集、吾妻揭、六々庵發句集等あり。（俳諧百一集、萩草、樂翁筆叢、俳諧年表）

一三　武藤巴雀

武藤巴雀、反喬舍と號す、通稱紙屋七兵衛、名古屋兩替町（一に石町住とあり）の賈人なり、俳諧を中川乙由に學び（一に谷木因門といふ）當時名古屋の宗匠として、六々庵巴靜と並べ稱せらる、横井也有數々其俳諧を稱揚す、寶曆二年六月廿二日、病みて歿す、享年六十七、也有文を作りて之を悼む、子に蓮阿坊白尼あり。（金鱗九十九之塵、大日本人名辭書俳諧系圖、鶉衣、松井鶴渓手記）

一四　五條坊木兒

五條坊木兒、氏は伊藤、通稱は御糸屋彦六、府下京町に住せる御目見町人なり、一に不之庵と號し、又三徑の號あり、美濃風の俳諧を善くし、曾て、朝顔の一夜は長き苔かなの句を作り、一時に喧傳す、人呼んで朝顔の三徑といふ、横井也有、木兒を愛重し、一年伴ひて江戸に下る、途中坊に戲れて、西行に居風呂たてむ柳蔭の句あり、木兒亦也有の俳畫の其纖巧に過ぐるを見て、正風に遠ふを規諫す、也有深く之を然りとし厚く謝して、贈五條房畫賛の一文あり、寛保三年十月十二日、木兒、芭蕉の句碑を大曾根成就院（後了義院となる）の境内に樹て名けて三日月塚といふ、寶曆十三年六月十七日歿す、享年七十五、極樂寺（中區門前町）に葬る、也有文を作りて

之を悼む、曰

六々庵に別れ、反喬舍世を去りし、其折々の傷は、さる事ながら、猶此五條坊の健なる、忍山かひなき其世のことゞもをも、かたみにいひ出て、老を慰むつまともなりしを、名に呼れし霧の、はかなき秋をだに待ず、此水無月の露と消し、惜むべし、悲むべし、松竹卒に齡を讓らず、桃李もとよりものいはず、そも我けふよりして、誰と共にか昔を語らむ、

なき友に泣くや心の羽ぬけ鳥

門人に八東齋木朶、南路坊默我あり。（金鱗九十九之塵、秋草、鶉衣、蘿葉集）

一五　丹羽以之

丹羽以之、名は幸胤、通稱は淺野屋治右衛門、後に醫となりて、丹羽少以と稱す、名屋古の人なり、俳諧を東花坊支考に學び、其正傳を受け、よく同志を導く。

以之、芭蕉の遊蹟を傳へんと欲し、其星崎の吟の眞蹟及鏡を石棺に納め、之を笠寺觀音堂の後方に埋め、上に石碣を建てゝ、其句を彫り、且銘を刻し、名けて千鳥塚といふ、事享保十四年に屬す、仍りて自ら千鳥庵と號す、

以之、極めて好事、書を能くし、茶を嗜み、又平曲を能くす、寶曆九年七月十三日歿す、寶泉院に葬る。（書畫一ノ一一一、碑叢三ノ四四、名府諸名家墓所一覽一一ノウラ）

一六　白梵庵馬州

白梵庵馬州、一に佛魔巢と號す、通稱は榎本權平、犬山成瀨氏の家士なり、其妻幼兒と共に木曾川に溺れて死す、馬州之を傷み、遁世して名古屋城北杉村に閑居し、一草庵を營みて之に居る、俳諧を澤露川に學び、其高足たり。

馬州容貌魁偉、膂力人に過ぐ、常に大斧二柄を携ふ、人と爲り剛放にして物に拘らず、一年南海に遊び、歸途海上暴風に遇ふ、船中の人皆生色なく、涙を垂れて佛を念ず、馬州自若として船頭に在り、一句を吟じて曰、我を呑んで尾張へおくれ初鰹と、須臾にして風浪止み、船全きを得たり、舟人海神の感應となし、馬州に酬いんとす、馬州辭すれども可かず、乃ち船中用ふる所の煙草盆を乞ひて携へ歸る。

一夕盜兒あり、草庵の窓を排して入る、馬州捕へて忽ち之を縛し、深く之を敎諭す、盜兒大に耻ぢて過を謝し罪に伏す、乃ち縛を解き、共に酒を飲み、錢二百文を與へて去らしむ、因て其窓に書して曰、盜人の外入るべからずと、石來清次郎は武人にして善く劍槍を用ひ、其名士林に喧し、一日馬州と相見る、馬州其姓名を稱するを聽き、卒然として曰、然れば君は太平の馬鹿者、亂世の明達かと、清次郎平生傲岸にして、敢て人に下らずと雖も、馬州に對しては、遂に一籌を輸せりといふ。

寶暦十三年十二月六日歿す、享年六十三、犬山妙感寺中に葬り、法號を白梵庵廣運居士といふ、著す所奥羽笠、上中下三卷　龍丘集等あり其句集をかたみ富士といふ、門人に萩陰齋大朝、四風居阿鄕、存古齋唯阿、露川門、白壺庵台界等あり。（杉村志草稿、秋草、尾藩老談錄、尾張名家誌二編、金鑑九十九之塵、碑義、村木氏文書、曉臺句集、月の前、俳諧年表）

一七　横井也有

横井也有、名は時敏、後並明又順寧と改む、字は伯懐、通稱は孫右衛門幼名長之丞後市郎平退隱の後暮水と稱す、蘿隱、紫江、遯窩、永言齋、蘆狂庵、半谷居、半掃庵、知雨亭、紫隱里等の諸號あり、也有初は野有の字を用ふは其俳號にして、狂歌には蟻丸の名を用ふ、尾張侯の世臣にして其系北條時行より出づ、祖父時英千石を領し藩の用人たり、病に依りて職を辭し、元祿六年名を係入と改め、領地藤ケ瀨今海部郡八開村に退隱し、享保元年歳八十にして歿す、時英野双と號して北村季吟に學ぶ、曾て季吟湖春の父子と兩吟三吟の二百韻を作る、性儉素を尚び、常に曰く我身後長物を遺さじと、其歿する時唯麻姑の手一本、かき團扇一本ありしのみ。

也有の父を時衡といふ、用人及大番頭たり、退隱して一水と稱し、享保十四年歳五十四にして歿す、也有元祿十五年九月四日を以て生れ、歳二十六にして家を繼ぎ、父の家領千石を襲ひ、普請組寄合となる、二十九用人と爲り、四十歳に至り大番頭を兼ぬ、延享元年祿二百石を增され、五年寺社奉行を兼ぬ、歳四十九病に依りて職を辭し、普請組寄合となり、寶暦四年歳五十三にして退隱す。

也有少にして文武の道を講じ、弓馬刀鎗の技、皆窮めざるはなし、儒は小出侗齋の門に學び、聖經賢傳、諸子百家より、野史家乘、稗官小說に至る迄、窺はざる所なく、詩を好みて大田宜春、松平君山と交る、二人屢々其才華を嘆稱す、又歌を思幽軒正之に學び、歳十七八にして既に作家の域に入る、又俳諧を好み、之を以て特に名を世に顯す、六々庵巴靜、反喬舍巴雀、五條坊木兒は、其先輩として交る所なり。

也有の俳諧は滑稽にして平易、詭秘に涉らず、淺陋に墜ちず、俗を轉じて雅となし、耳目の觸るゝ處忽ち其妙處を捕捉す、之れ蓋其天才に出づ、一日國老成瀨正太、也有を招き徐に謂ひて曰く、聞く子俳諧を好むと、夫れ俳諧は風流隱者の爲す所なり、子今壯にして國の重職たり、末技に耽りて心思を勞するは、職に忠なる所以に非ず、願はくは之を廢せよと、也有答へて曰ふ、小子俳諧を嗜むも敢て之に耽りて心思を勞し、爲めに職責を缺くが如き事あらず、請ふ意を安んぜよと、正太曰ふ果して子の言の如くならば即坐に之を贊せよと一紙を出す、也有披いて之を見るに美姫を畫く、尙ほ之を展ぶるに後に惡鬼を畫けり、即ち筆を下

して、嫩もありまた鬼もあり百合の花と書す、正太其敏才に感嘆して、復た諫止せず。

也有用人たる時、藩主宗春に扈從して江戸に至る、途大井川を越ゆるに際し、日暮雨來る、衆先を爭ひて騷擾す、宗春之を見て急に也有を召し命じて之を鎮めしむ、也有徑ちに馬を進め、衆中に入りて縱横に馳突し、忽ち部伍を整へ、順次に川を渉らしめ事無きを得たり、是れ蓋し謙信流の軍法に基くといふ、人其兵馬に老ゆるを稱す。

也有尤も俳文に長ず、奇才縱横、能く腹笥萬卷の書を驅使して、俗に失せず、雅に過ぎず、主義一貫して、恰も麻姑を倩ふて癢處を搔くが如く、讀む者をして篇々の妙、章々の奇なるに驚き、覺えず一唱三歎せしむ、後來太田南畝、石川雅望の徒、推稱して措かず、安永の初め南畝、隅田川の邊長樂精舍に於て、也有が借物の辨を見て感歎し、金森桂五に囑して其文集を索む、桂五依りて鶉衣二卷を贈る、已にして也有の歿せるを聞き、更に遺文を堀田六林に乞ひ、南畝自ら書して板に刻し世に行ふ、鶉衣前後編是なり。

也有人と爲り謹嚴、廉靜寡欲、未だ嘗て妾を置かず、職を辭するの後、城南前津に隱栖を營み、名けて知雨亭、又半掃庵といふ、（知雨亭とは、穴居知雨の語に本づき、陋屋の謂にして、半掃庵とは、日々洒掃せざるより名づくといふ）從ふ所の者、唯二僕のみ、自ら知雨亭記、知雨亭後記を作り、又七景を撰びて七景記あり、諸名流寄題するもの頗る多し、天明三年六月十六日病みて歿す、享年八十二、藤ケ瀨西晋寺に葬り、並明院殿朝雲暮水大禪定門と法諡す、著す所鶉衣四卷、管見草、庭訓錄、小草籠、美南武須比、野夫談、永代藏、無夜食談、蘿窓集（歌集）、雪窓百首、蘿隱篇（詩集）、行々子（俳集）、千句集、五百句集、蟻塚集、もり桶、蘿葉集、蘿の落葉、漢和聯句集、峨洋篇、白話傳難陣等あり、歿後其臣石原文樵俳諧夢之蹤を編して世に行ふ。（士林評林、横井氏系譜、名古屋人物史料、尾藩老談錄、連城亭隨筆、鶉衣、雪窓百首、蘿葉集、俳諧夢之蹤、也有全集、城南七勝詩、○學藝編一五八頁、地理編六〇八頁參照）

一八　仁木白圓

仁木白圓、桂葉下と號す、名古屋鐵砲塚町（今東區相生町）に住し、藥種商を營めりといふ、初め俳諧を蓮阿坊白尼に學ぶ、久村曉臺の少き時、導きて俳諧を學ばしむ、後曉臺の頭角を見はすに及び、自ら其門下に列して教を受く、人其虛心澹懷を稱す、暮雨門中年齒最も高きを以て、人皆長者を以て之を遇す、曉臺二條殿下より花の本の稱號を許され、一日殿中にて俳諧を行ふの時、白圓が斯道に志深きを賞せられ、殿下の命に依りて居士の號を許さる、曉臺乃ち庵居士か衣に倣へひとへ芥子の句あり、其重ぜらるゝこと此の如し、享和元年五月十四日歿す。

一九　浦野布磧

浦野布磧、名は重匡、銀河亭、又、烏雀菴と號す、通稱は甚左衛門、尾藩の士內藤作左衛門昌敷の弟なり、享保五年九月朝日を以て生る、年十五、始めて藩主宗春に謁す、然れども多病の故

を以て終に仕進を求めず、浦野布磧と改稱し、澤露川に從ひて俳諧を學び、身を風月に托し、天明六年閏十月廿三日歿す、享年六十七、大光院（中區門前町）に葬る、門人に旭昇臺曙イ（通稱横井八右衛門）あり。（金鱗九十九之塵、名古屋人物史料、碑叢）

二〇　逸筆坊鷗砂

逸武坊鷗砂、氏は伊村、又長谷川、巴龍舍、過去庵、過現未亭、般船廬、墨狂、現水、動水、等十六の號を有し、十六林の稱あり、（久屋町魚之極下ル東側に住す）俳諧を蓮阿坊白尼の門に學び、又書を善くし、懷素の風を慕ふ、平生佛を信じ、法華經、大般若經等を書寫するを常業とす、人と爲り風流閑雅、興を花月に寄せ、澹然として自ら逸む、病に罹るに及びて、猶筆を把りて懷めず、臨終に吟じて曰く「水冷し我世も筆に汲終る」と、遂に長逝す、實に寛政八年八月十六日なり享年七十三、大林寺に葬る、門人等遺命に依り、平生寫す所の經、及び敗筆を矢場清淨寺の境内に埋め、石を樹て題して筆塚といふ、門下に佗殿秋麿あり、著す所秋錦現世草二卷あり、子立長、長谷川の上下二字を省き、氏を谷と改む。（金鱗九十九之塵、尾張名家誌二編、碑叢、秋錦現世草）

二一　久村曉臺

久村曉臺、名は周臺、初め買夜子と號し、白一居、暮雨巷等の號あり、其居を龍門と呼ぶ、本加藤平兵衛と稱し、尾張の小吏なり、少時江戸に在りて、右筆部屋惣帳方に出役せるが、故ありて職を捨てゝ逃れ去り、他邦に流浪すること二十年餘に及ぶ。

曉臺、初め美濃風の俳諧をなす、或はいふ蓮阿坊白尼に學ぶと、而して當時俳風の陵夷を嘆じ、正風を復興するに志あり、明和の比名古屋に歸り、窃かに鐵屋横町に寓し、自ら買夜子と號し、日に酒に耽り、同志の徒と交る、仁木白圓、水野萬岱、井上士朗の徒、曉臺を奉じて盟主となし、大に清新の調を唱ふ、既にして脱藩の罪を赦され、號を曉臺と改め、久村五一と稱す、乃ち居を納屋町に移し、又桑名町に移し、草庵を前津に構へて龍門と呼ぶ、龍門曉臺の名一時に聞え、門人益々進む。

曉臺、洛の谷口蕪村、江戸の大島蓼太と、莫逆の交をなし、共に正風復興の事に力を盡す、江戸の加舍白雄、伊勢の三浦樗良、洛の高桑闌更等皆之に贊し、俗を化して雅となし、腐を變じて新と爲し、以て俳壇の革新を成就せり、而して其中心たりしは實に曉臺、蕪村なりき。

曉臺、門人尾濃三遠に遍く、又常に出遊して、數々花洛、湖南に至り、足跡關東諸國より奥羽越佐の境に及び、到る處の俳人其風を仰ぐ、安永の末湖南幻住庵に住して俳を講ず、既にして遊意勃發し、庵を門人臥央に屬し、東武奥羽漫遊の途に上る、時に曉臺の母、尾の暮雨巷に在り、年高きを以て、其子の遠遊を憂慮して歎まず、曉臺の妻之を門人に告げ、老懷を安ぜしめむことを請ふ、是を以て門人等相集りて笑話し、俳諧を作して老尼を慰む、之を留守懷紙

といふ。

曉臺、羈旅に在ること三年、天明三年湖南に歸る、此歳芭蕉翁九十回忌に當る、依りて百年忌を引上げて行ふことゝし、粟津、東山、一乘寺村の三所に於て、一七日間の法莚を設く、諸國の俳人雲の如く集り、曉臺之が會頭たり、曉臺名己に俳林に噪しく、天下推して宗師となす、寛政二年、二條殿下召して花の木の稱號を賜ふ。

寛政三年、若狹に遊びて京に歸る、門人桃睡白山通三條の北に一庵を設け、以て游息の處となし、亦龍門と號す、十月廿七日卜居の莚を開く、曉臺平生咽喉の疾あり、十一月に至りて疾頓に重く、寛政四年正月二十日を以て逝く、享年六十一、寺町四條南大雲院に葬り、春光院曉臺居士と法諡す、著す所蛙口亭集、姑射文庫、しをり萩、秋の日、熱田三歌仙、佐渡日記、風雜念佛、幽蘭集等あり、門人櫻田臥央暮雨巷を繼ぎ、文化六年曉臺句集二卷を編して世に行ふ、門下に井上士朗、金森桂五、渡邊岱青、仁木白圖、水野萬岱、伊藏都貢、鳥居亞滿、円珠庵雜城、虎足庵岳輅、花瓣少汝、匏形庵白居、椎下園事紅、村瀨大阜、村瀨帶梅等あり。（俳諧文庫、曉臺句集、墓碑）

二二　中野大朝

中野大朝、萩陰齋と號す、通稱は定藏、犬山成瀨氏の家士なり、俳諧を白梵庵馬州に學びて其高弟たり、性廉直、嘗て小納戸たる時、同僚と事を執りて遺漏あり、大朝以て己の過となして遁れ去る、成瀨氏其大朝の過に非ざるを知りて召還す、幾もなくして退隱して僧となり、普聞山に閑居す、後金森桂五、渡邊岱青の勸に從ひて、前津の草庵に移る、時に曉臺龍門に在り、大朝が居を隣にトせるを聞き門人他郎をして其力量を試みしむ、他郎乃ち大朝を訪ひて、「淋しさに僧訪ふ秋や我も僧」の句を示す、大朝忽ち「冬待つ袖に虱くらへん」の脇句を作る、曉臺之を聞きて感賞す、安永七年七月十四日歿す、總見寺に葬り、墓碑に「眼をねふる時大きなる世界かな」の句を刻す、著す所萩陰齋句集あり。（麋草、碑叢）

二三　石原存古齋

石原存古齋、唯阿と號す、通稱六之右衛門犬山成瀨氏の家士なり、同藩宮原某、故ありて父子白殺す、六之右衛門其事に關し、退隱して名古屋城北中杉村に閑居し、名を助給と改む、庵に太一の額を掲げ、存古齋唯阿と號す、俳諧を白梵庵馬洲に學び、其高足たり、性頗る酒を愛し、常に杯酒に親しむ、晩に木像を作る、左右酒壺と杯とを手にするものなり、後中風に罹り、文化三年八月二十九日、年七十五にして歿す、西蓮寺（東區東門前町）に葬り、存古齋向西入道稱譽助給唯阿居士と法諡す、歿する前句あり。（杉村志稿、碑叢、存古齋遺墨、西蓮寺過去帳）

八月廿七日夕目めいして轉ふ

此まゝに死ねはめてたし秋のくれ

又、其墓に題して曰く、

散花を南無阿彌陀佛と夕かな

伊勢の長官荒木田守武の辭世なり愚老此外に

全く別意を存せず候以上　存古齋

二四　圓珠庵羅城

羅城、僧名は鳳陽惠階、寂尊と號し、別に百厓と號す、眞宗大谷派寶池山光蓮寺の第廿世一なり、享保十九年甲寅五月八日、岐阜の圓龍寺に生る、寶曆十二年光蓮寺是澄の女に配して同寺を繼ぎ、權律師に補せらる。

俳諧を暮雨巷曉臺に學び、五老と稱せらるゝ者の一なり、羅城は其俳號にして、居を圓珠庵、又新樹堂と號す、羅城又、歌を武者小路家の門に學び、連歌を木曾正義に、茶道を久田宗參に、香道を蜂谷貞重に學びて、博く諸技に通ず、文化四年十一月八日寂す（俳諧年表其他の書に十月八日歿とあれども今光蓮寺華藏界累世永代錄に據りて十一月とす）年七十四、寂靜院と號す、（光蓮寺華藏界累世永代錄、金鱗九十九之塵、俳諧年表）

二五　松下子東

松下子東、名は治矩、通稱は久右衛門、名古屋久屋町の商栗田喜右衛門本恭の二子なり、歳十八にして松下喜兵衛信敬（後に氏を關戸と改む）に養はれ、其女に配して別に一家を起し、和泉町に住して味噌製造を業とし、信濃屋と稱す。

子東歌を好み、又俳諧を久村曉臺に學ぶ、其亭に名けて買春と呼ぶ、橫井也有爲めに其記を作る、天明七年九月十八日歿す、享年四十九、瑞寶寺（中區白川町）に葬る。

二六　渡邊岱青

渡邊岱青、名は綱、通稱は源右衛門、尾張侯の臣にして祿百石を食み、本丸番を勤む、俳諧を久村曉臺に學び、其高足たり、岱青は乃ち其俳號にして、別に雲外、五老峰の號あり。

岱青又、其妻由良と共に、本居宣長の門に入りて、國學歌道を學ぶ、人と爲り風流飄逸、利欲の念寸毫も存することなし、常に亂舞を好み、裝束等に金を費すを以て、家極めて貧し、一日俳友を招きて小集を催す、然も酒肴を設くるの資なし、乃ち庭中の土を賣りて之に充つ、既にして俳客坐に滿る時傭夫數人來りて土砂を搬出す、岱青席に臨み衆客に告げて曰く、今日幸に賁臨を辱うするも、物の興を扶くるなし、故に庭前に斷厓を造り、聊か淸娛に供すと、嘗て雪夜、俳莚を開く、會する者白圖、士朗、桂五、羅城、岳輅が徒なり、庭松雪に蔽はれ一望皚々、閑中微かに茶鐺の沸聲を聞くのみ、既にして俳諧一巡し、夜正に闌なり、岳輅飢を訴ふ、岱青曰く、今夕家人悉く在らず、唯予と犬の門を守るあるのみ、然れ共、曩に家人に囑して、客の需

めに應ぜしむるの設あり、請ふ少く待てと、厨に入りて大飯櫃を取り來る、客各々手づから飯を盛り、湯を沃ぎて食ひ、笑て曰く、何ぞ下物を缺くやと、岱青答へて曰く、客何ぞ急なる、豈好下物なからんやと、盤に雪の如き物を山積して出す、柱五熟視して曰く、好菌の下物、之れ卸大根なり、雪を汚すの恐ありといへども願はくは、醤油を給へと、岱青膝を撲ちて曰く、嗚呼忘れたり、暫く待てと、厨房に入りて出でず、待てども來らず、呼べども應ぜず、稍くにして出でて謝して曰く、紙燭を照らして徧く求むるに、寒厨物なし、客も願はくは其辛酸を嘗めよと、諸人皆之を興じて數椀を傾けたりと、其貧に處して晏如たること此の如し。

一日雅客を請じて紅葉の宴を開く、席上庭下楓葉散亂して錦の如し、會々士朗至る、岱青曰く、句なくば席に上るべからずと、士朗聲に應じて、一字つゝ發句書がばやちる紅葉と吟じて、席に就く。

人あり俳諧の點を乞ふ、岱青之を閲して其秀逸なるものに景物を附せんとするに贈る物なし、仍りて古來持ち傳へし赭山を贈る、之を獲たる人、年々租を負ひ、賣らんとするに買はんん人なく、與へんとすれば、受けん人なし、其人困惑して爲す所を知らざりしと、岱青、芭蕉翁の頭巾を獲て之を寶重す、後松兄の請に由り、割愛して之に授く、今傳へて正覺寺に藏す。

寛政十一年八月二日歿す高岳院に葬る。（續俳家奇人談、佗草紙、於本尊、鈴屋門人帳、系譜、墓碑）

二七　井上士朗

井上士朗、名は正春、通稱は專庵、晩に松翁と改む、朱樹、琵琶園、（又枇杷の字を用ふ）の號あり、士朗（初は支朗）は其俳號にして、名古屋新町（今東區鍛屋町二丁目）の醫なり、祖父安隆、父安清、並に醫を以て名あり、安清名は正純、人と爲り篤厚なり、治を乞ふ者あれば、暮夜倉卒といへども必ず往きて診し、心を盡して療を施す、又親戚故舊の窮乏なる者あれば、財を分ちて之を救ひ、必ず其安ずるを俟ちて而して後に已む、鄉黨號して長者となす、安永五年九月十八日年六十四にして歿す、子無きを以て其の弟の子を以て嗣となす、士朗即ち是なり。

士朗少うして醫を田中安益に學び、後京に入りて吉益東洞に從學し、古方を窮め、又賀川秀悅に學びて、產科の秘訣を受く、歸りて後聲名籍甚、療を請ふ者麕集し、門前市の如し、安永六年目見を許され、天明四年用懸りとなり、寛政七年用人支配となる、藩屢々召して醫員に擧げんとすれども辭して命に應ぜず、町醫師を以て自ら任じ、專ら民間の治療に從ふ、遠近雅治の病者あれば、其一診を得るを以て喜となす、寛政十三年二の丸御次療治を命ぜらる。

士朗年二十餘にして、俳諧を暮雨巷曉臺に學ぶ、藻思富麗、吐屬閑雅、獨同門中に傑出す、曉臺深く之を重ず、洛の蕪村嘗て書を曉臺に送りて曰く、余近ごろ示すべきの句なし、偶一の

地口を得たり。尾張名古屋は士朗でもつ」以て如何となすと、曉臺去りて後、暮雨巷の門人、皆士朗を奉じて盟主となす、而して其風を慕ふ者東奥羽より、西豊肥に及ぶ、尾張の俳壇此時を以て最盛となす、凡天下の俳人東海道を上下するもの、來りて琵琶園の門を叩かざるはなし、而して尾張の俳諧を了したるものは、天下に横行すべく、其俳力孱弱なるものは、此地を通過するを得ず、依りて名古屋を稱して俳諧の關門とせり。

享和元年、門人鶴田卓池、僧松兄を從へて江戸に遊ぶ、鈴木道彦歎待至らざる所なく、江戸の俳客貽贈甚だ盛なり、歸途中山道を過ぎ信濃の諸方を遊歷す、地方の俳人士朗を以て蕉翁の再生となし、箪食壺漿して之を迎ふ、此行諸方に於て贈する所の金三百兩に至る、又至る所の俳諧隨所に之を板行して題して鶴芝集といふ。

士朗俳客雲集すといへども、未だ曾て醫業を廢せず、其俳諧に遊ぶは刀圭の餘暇のみ、居る所の室皆名あり、南を朱樹といふ、一株の赤松あるを以てなり、西を枇杷園と稱し、北を綠蓼亭といひ、東を望山月といふ、士朗、寛政元年本居宣長の門に入つて國學を修め平曲を荻野撿校に學び、頗る之を能くす、故に琵琶園主人の名あり、又墨竹の法を長崎の范古に學ぶ、識く所の山水頗る逸致あり、好んで富岳を寫す、其不二を詠ぜる、今日も見え今日も見えけり不二の山、月と日の間に澄めり富士の山の句ありて平生得意の作となす。

士朗體軀肥大、圓頂豊頰なり、性恬淡寡欲、受くる所の金財、皆俳林行脚の徒に與へて賑み

ず、文化九年五月十六日歿す、享年七十一、照運寺（中區葵町）に葬り、幽操松翁居士と謚す、門人梅間其つくく、と見てをれはちる櫻かなの句碑を境内に建つ、醫の門人に丸淵仲山、宇都宮尚山等名を成せる者二十五人あり、俳諧には鶴田卓池、德田椿堂、中島秋舉、僧松兄、岡田梅間、吉原黄山、竹内塊翁、前田宇津、櫻井蕉雨、藤森素檗等最も門下に名ある者なり、著す所枇杷園句集、枇杷園隨筆あり、而して歿後門人士朗五七集（後編中の順序を變換し枇杷園七部集と改む）類題士朗叟發句集（後枇杷園類題發句集と改む）等を刊す。（墓碑、松宇遺稿、尾張名家誌二編、續俳家奇人談、枇杷園句集、照運寺過去帳、鈴屋門人錄、鶴芝集）

二八　金森桂五

金森桂五、名は一繁通稱市之進、初百助と稱す、家世々尾張侯の臣にして、祿百五十石を食む、父桂裏、狂歌を善くし、俳諧を好み、一勺井と號す、桂五、俳諧を久村曉臺に學び、亦一勺井の號を用ふ、井上士朗、僧羅城、岳輅、少汝と共に五老と稱せらる。

桂五、又狂歌を善くし、大田南畝等に交り、號を傘衛守（カラカサノエモリ）といふ、性曠達にして酒を嗜み、汎く衆人と交り、家極めて貧なれども、敢て意に介せず。

安永中、桂五父に從ひて江戸市谷邸に在ること數年、小十人組に召出され、尋ひで組頭に遷り、後勘定吟味役に轉じ、寛政六年、父の歿するに及びて、祿を襲ぐ、職故の如し、八年上有知

代官に遷り、之を久うして佐屋代官に轉じ、白鳥材木奉行に擢でられ、後納戸に還る、凡歴任する所、皆令名あり、桂五、上有知に代官たる時、横井金谷之を訪ふ、時正に夏なり、會前峰に群猿あり、隊を整へ伍を爲し、中央の二猿一巨物を捧げて行くを見る、金谷怪みて之を問ふ、桂五、里正を召び之を問ふに、曰く、此山の群猿、將に雨ふらんとすれば北山に移り、晴るれば南山に還る、毎に列をなし、彼寶物を護るを例とすと、桂五聞き了り令して曰、猿の南山に還るを要し、奪て其寶物を驗せよと、是に於て猿の還るを偵ひ、數百の村人急に起り、螺を吹き鼓を鳴らし、肉薄して寶物を奪ひ、携へて衙に至る、之を見るに、藤蘿を以て纏綿し幾百重に及ぶ、桂五曰く、是れ何物か得て知るべからず、然れども思ふに彼等の寶とする所、今之を失ひて、恐くは悲まん、余此地を宰し、管下の事に於て知らざる所あれば、瞶職の嫌なしとせず、今己に之を見るを得たり、速に彼等に返せと、然るに下僚、里正等相集り、纏ふ所の藤蘿を解く、中に古金一歩あり、喜びて之を市人に賣り、酒を買ひて宴飲す、桂五之を聽き、怒りて衆を責めて曰、獸類と雖も天下の至寶なるを知り、之を貴重し、寶藏す、汝等之を貪りて己が口腹の欲を充たす、獸にだに如かずと、衆大に懼れ、金を贈ひ、復び藤蘿を纏ふこと舊の如くし、以て猿群に還附し、里正等連署して謝罪の書を呈じ、事寢く解くを得たり、金谷嘆じて曰く、桂五、意を用ふる事深く、惠獸類に及ぶ、百姓の訟、理非曲直、必ず公平に、民寃枉の苦なからんと、一些事と雖も亦桂五の職に忠なるを想見すべし。

文化九年正月廿四日歿す、享年六十五、妙蓮寺（中區榊小川町）に葬る、子竹令亦俳諧を好み一句井の號を嗣ぐ。（備考、尾張名家誌二編正月九日歿となし、萬家人名錄、俳諧年表等は二月九日とす、共に誤なり、今妙蓮寺過去帳を檢して之に從ふ、桂五享年は尾張名家誌二編に六十七に作れども大橋粂太郎氏所藏桂五眞蹟に據り推算して六十五となす（系譜、妙蓮寺過去帳、尾張名家誌二編、金鱗九十九之塵、金谷上人御一代記、萬家人名錄、俳諧年表、桂五眞蹟）

二九　櫻田臥央

櫻田臥央、名は茂（しげみ）、通稱は玄丈、臥央は其俳號なり、家世々醫を業とす、臥央俳諧を久村曉臺に學び、又寛政四年本居宣長の門に入りて國學を修む、安永中曉臺湖南に遊び幻住庵に住して俳を講ず、既にして奥羽を歴遊せんとし庵を臥央に屬して去る、曉臺歿して後臥央暮雨巷を繼ぎ其二世となる、文化七年六月四日歿す、門前町阿彌陀寺に葬る、遺する所續姑射文庫五卷あり。

三〇　虎足庵岳輅

岳輅、僧名は源惠、岳輅は其俳號にして、虎足庵と號す、眞宗大谷派佛敎山乘西寺第十二世にして權律師に補せらる、俳諧を暮雨巷曉臺の門に受け、五老の一人たり、岳輅又寛政元年、本居宣長の門に入りて國學を受く、當時井上士朗俳名四方に噪し、岳輅之を翼けて、尾張俳

壇の重きをなす、年よりも家のかさりよ今朝の春、湖に片足かけて鳴く蛙、我國の鼻柱なり不二の山、等の句人口に膾炙す、文政四年五月十一日寂す、年七十餘、選する所に閑古鳥あり。

三一　少汝

少汝は眞宗大谷派黒部山常瑞寺の第七世なり、僧名了榮、花瓣と號す、少汝は其俳號なり、暮雨花曉臺の門に入りて、俳諧を學び五老の一人たり、少汝初め田中道麿に從ひて國學を修め、後寛政四年に至りて本居宣長の門に入る、性曠達にして酒を愛し、常に文墨の友に交り、細事に拘ざりしといふ、文政三年六月二日寂す。

三二　佗殿秋麿

秋麿、其性を詳にせず、佗殿と號す、俳諧を逸筆坊鷗砂に學びて世に名あり、又古學に通じ、悉曇に精しきを以て、教を乞ふ者多し、文政二年五月二日歿す、乾德寺（中區東田町）に葬り、佗殿秋丸居士と法諡す、門下に小澤さゝをあり。（俳諧滿壽鏡、萬家人名錄、墓碑）

三三　太一庵快臺

快臺、其姓氏詳ならず、初名梵阿、江戸の人なり、俳諧を雪中庵蓼太に學ぶ、既にして故ありて江戸を去りて駿河に移り、年四十の比又尾張に來りて城北杉村の石原存古齋に依る、存古齋、梵阿の名の、其師白梵及己の名の唯阿に緣あるを悅び、遂に後繼者たらしむるを約す。

快臺、容貌魁梧、眼光人を射、骨相凡ならず、時に雄偉の句を吐く、既にして京畿に遊び、名を麥阿と改む、唯阿歿して其後を襲ひ、復快臺と改め、太一菴と號す、居る事十年、長崎に遊び五年にして歸る、杉村の草庵、風雨の爲に壞破せられてより、常に知己の家に寄食し、轉々して其居住を定めず、常に酒を愛し、人の杯酌を薦むるあれば喜で辭せず、嘉永元年八月廿一日、年八十七にして歿す、西蓮寺（東區東門前町）に葬り、碑石に秋の暮餘念おこらは只の我の句を刻す、著す所、萬古青春、桐實集、筋遠集等あり、快臺生前、知人と雖も其姓氏舊里を知るなし、或は云ふ奥州磐城平の人なりと、己に歿して人其舊庵を理す、會々封函中に一記錄あり、曰、余本幕府小吏の子なり、父翁一日某家に飲み、某と古刀を鑒定し論爭して勝つ、某以て耻辱を受くとなし、父翁を擊殺す、余之を聞き直に赴きて某を斬り、以て仇を復す、義故士を去らざる可らず、是に於て跡を俳諧者流に韜晦す云々と、人始めて之を識り、皆其節烈に感嘆せりといふ。（墓碑、桃廬隨筆、蕉窓餘錄、松宇文稿）

三四　村瀨大阜

村瀨大阜、通稱は彌五助、海翁と號し、四絃を能くするを以て、能四弦の號あり、知多郡横須

賀の人なり、俳諧を久村曉臺に學び、暮雨門中の故老を以て推さる、文政三年九月七日歿す、陵山大阜居士と法諡し、横須賀玉林齋に葬る。（萬家人名錄）

三五　村瀬帶梅

村瀬帶梅、名は祥副、通稱は兩口屋彌四郎、知多郡横須賀の人なり、俳諧を久村曉臺に學び、後臥尖に次ぎて、暮雨巷三世の師となる。

帶梅、一年京都に上り、途上近江を過ぎて、湖の春やどちらへ暮てゆくの句を作り、一時に喧傳す、文政九年四月二十三日歿す、横須賀玉林齋に葬る。（汲古草稿）

三六　竹内塊翁

竹内塊翁、大鶴庵と號す、名は春政、通稱は九右衛門、知多郡草木村の人なり、俳諧を井上士朗に學び、初竹有と號せしが、後塊翁と改む、名古屋桑名町に住して、俳諧の點者を業とす、文政十二年十月十七日歿す、享年六十六、大運寺（中區白川町）に葬る、著す所草名集、青於集等あり、門人に月底、沙鷗、而后、士前等あり（歲月錄、道の時雨、草名集、青於集）

三七　木犀居松兄

松兄は、眞宗本願寺派一柳山正覺寺の僧にして、同寺第十世なり、僧名義海、木犀居と號し、俳名を松兄といふ、井上士朗最愛の門人なり、享和元年士朗東海道を經て江戸に至り、歸途中山道を行脚せる、所謂雀芝の行あり、松兄同門三河の鶴田卓池と共に之に從ひ、至る所諸州の俳人と交遊す、平生客を好み、俳人騷客の至る者あれば、之を留めて數月に及ぶ、松兄又寛政四年本居宣長の門に入りて、國學を修む、文化四年七月廿五日、東行せんと欲して鳴海に至り、俄に病發り寺に歸りて寂す、年四十一、士朗深く之を悲み哀悼の句を作る曰

むつましきかきりを師弟の中といへはまして此松兄は身にそへる子のたくひにて年の齡もいと若く老を捨ては先たつましきならひなるに今日のなけきは何事そや

秋風やゆく空もなき夜の鶴

其情以て窺ひ見るべし、茶毘して西本願寺別院内、正覺寺歷代の塋域に葬る。

三八　鷄頭庵不轉

鷄頭庵不轉、初め普天といふ、老少年の號あり、俳諧を井上士朗に學びて名あり、小塚町（今東區小市場町二丁目及び寶町三丁目）に住して、一生を風月に寄す、弘化二年八月十五日歿す、七寺に不轉法師塚あ

り。（金鱗九十九之塵、碑叢）

三九　照井曾洛

照井曾洛、暮雪庵又、千字廬と號す、俗稱は長四郎、府下瀬戸物町（今東區大津町四丁目）に住せる金具師なり、俳諧を臥央に學び、帶梅の後を承けて暮雨巷四世たり、天保八年六月八日歿す、菩藏寺（東區七小町）に葬り、歸邦曾洛信士と法諡す、著す所新姑射文庫三卷、廻文はした柴一卷、文庫飛良紀一卷あり。（金鱗九十九之塵、文學小編）

四〇　岡田梅間

岡田梅間、名は寶、字は子善、張古と號す、梅間は其俳號にして、園中多く梅樹を栽うるを以て、梅花園と呼べり、通稱は保十郎、尾張侯の臣にして、祿九十石を食む、梅間文雅を好み、井上士朗に從ひて俳諧を學び、又畵を好みて横井金谷、井川鳴門の徒と往來す、士朗曾て梅花園記を作る、記に曰。

梅間に五室あり、分入る事十歩にして畵室に到る、竹の透垣したる所を俳室といふ、月雪は今宵のけしき也、花鳥の外、又別に調度を見ず、五歩にして亦一室、茶を煮る、わづかに二三子の膝を容、一徑屈曲酒室にのぼる、みさかなには何よけむと、こゆるぎの磯に刈和布もとり〳〵なり、李白が百篇、必しも一斗を傾ず、又こゝに讀書の室、梅花尤多し、疎影横斜のうちに巢ふ人、字を問來るところなりけり。

以て其人と爲りを察すべし、嘉永二年十一月十一日歿す享年七十七、松山町慈眼院に葬る、著す所力草、梅花帖、あり、歿後而后の徒、其遺吟を拾ひ、追悼の句を併せ上木し之を梅影集といふ（墓碑、力草、梅花帖、梅影集）

四一　加藤足彦

加藤足彦、名は肅、字は敬子、小字は司馬太郎、白龍、櫻叟、醉月庵、鵬聲亭、北石齋、思永堂等の諸號あり、俳諧を好みて初め梅樹軒逸人と號し、後鈴木道彦の門に遊びて足彦と改む、東枇杷島の富豪なり、俗稱は油屋太助、世人呼びて大星（だいせい）といふ、初め學を鈴木蕉屋に受く、家鉅萬の富を累ぬるを以て多く書を買ひ、庭園を盛にす、又印癖あり、既にして驕奢に長じ、京都島原の妓の所謂太夫と稱ふるものを贖ひて妾とするもの四人、日に俳客を延きて莚を開き、作る所の俳諧、發句は直に之を剞劂に附して天下に頒ち、以て其名を衒ふ、其集冊多くは名工の畫を請ひ、又自ら書し自ら畵きて設色とし、費量るべからず、文政十二年十一月三日、狂を發し五歳の男兒を手刄して自殺す、享年五十六、枇杷島西源寺に葬り、釋思永信士と法諡す、著す所芳園集、醉月集、狂言畵、狼集、曝臼集、續曝臼、叩齋集、上元集、梅花集、萬古青春、比刀太刀肥、

鶯囀梅・桃・櫻・雨・華・笹・粽・文・晉錄・釣蔥・合鏡・琵琶調・四季三番叟・青梅集・思永堂印譜等あり。（尾張名家誌二編、金鱗九十九之塵、蠹月錄、醉月集、思永堂印譜）

四二　三輪月底

三輪月底、夢光庵と號す、通稱は勝四郎（初鉄藏、喜四郎又直九郎）尾張侯の御大工なり、寛政七年四月、父の跡に召抱へられ切米九石扶持二人分を受く、後作事奉行手附吟味方を兼ね、文化八年三月御大工與頭代を命ぜられ役料年々金壹兩を給ふ、文政三年四月病を以て暇を乞ふ。

月底、俳諧を井上士朗に學びて、夙に名あり、又墨梅を善くす、勤を罷むるの後、諸國に出遊し、其名遠く聞ゆ、當時推して名古屋俳家の頭領となす、萬延元年五月十三日歿す、享年八十三、大法寺（東區小川町）に葬る、月底翁句集壹卷は、嘉永三年、其門人の編する所なり。（藩士名寄・萬家人名錄、月底翁句集、細評俳諧名錄、正風俳人鑑、道の時雨、大法寺過去帳）

四三　小澤さゝを　列根

小澤（こさは）さゝを、名は鎭盈、松の家と號す、通稱は勘兵衛、初め山川泰助と稱し、九石貳人扶持を受けて、尾藩の書物方手代たり、性學を好み、俳諧を佗殿秋麿に學ぶ、勤仕の暇、吟詠を以て樂とし、又後進を誘く、天保十三年藩主齊莊、府下俳諧に名ある者七人に命じて句を獻ぜしむ、

さゝを之に與る、嘗て內庫藏する所の書を檢し、一々之が解題を作り、名けて御文庫御書物便覽と曰ふ、又篆刻を善くし、龍根と號す、弘化四年正月九日歿す、享年七十、法光寺（中區矢場町）に葬る、著述若干、句集にさゝを句集あり。（蕉窗餘錄、金鱗九十九之塵、天保會記、藩士名寄、さゝを句集、墓碑）

列根は、さゝをの子なり、名は鎭監、初め啓吉と稱し、後に勘兵衛と改む、天保六年八月、書物奉行手代並となり、俸五石二人扶持を受く、後藏奉行手代、金奉行手代並、書物奉行手代となり、俸を增して九石二人扶持に至る。

列根、父に從ひて俳諧を學び、松の家の號を嗣ぐ、深田香實の尾張志を編纂する時、選ばれて其書寫役となる、安政三年十月廿七日歿す、享年四十四、法光寺に葬る。（蕉窗餘錄、天保會記、藩士名寄、墓碑）

四四　吉原黃山

吉原黃山、名は光仲、竹意庵と號す、通稱は五左衛門（初數馬）後に黃山を以て通稱とす、尾張の士吉原源之進の長子にして、祿三百石を食み、藩の大番組たり、後辭して馬廻組となる。

黃山、俳諧を井上士朗に學び時に名あり、致仕の後專ら吟詠に耽り、門下頗る多し、又狂歌を善くし、弓箭爲丸と號す、子鵬居、醉雨も亦俳諧を善くし、門人黑田市最も名を著す、安政元

年六月廿七日歿す、性高院（中區門前町）に葬る。

四五　西川芝石

西川芝石、名は吉陳、通稱は官次郎、帶月庵と號す、海東郡福田新田の人なり、出でて名古屋長島町に住す。

芝石、冠句を能くし、千里亭と號して其點者たり、又俳諧を大鶴庵竹有に學び頗る名聲あり、後專ら俳諧を以て世に立ち、門下甚だ多し、松浦羽洲、大木靜處、服部李曠等、最も著る、嘉永元年三月二十日歿す、愛知郡龍潭寺（荒子村大字野田）に葬り、學圓院帶月自耕居士と法諡す。（汲古草稿、龍潭寺過去帳）

四六　竹村鶴叟

竹村鶴叟、名は昌成、通稱は半右衛門、止丘軒と號す、尾張の重臣織田氏の家隷なり。

鶴叟、初め夙也と號し、伊勢の德田柳堂に從ひて、俳諧を學ぶ、後京都に赴きて、成田蒼虬の門に入り、其執筆たること數年、歸りて後其名大に著れ、門葉甚だ多し、慶應三年十一月廿四日歿す、享年八十八、玄周寺（東區松山町）に葬る。

四七　森本沙鷗

森本沙鷗、姓は平、名は寛、字は君栗、帶川居と號す、俗稱は井桁屋治右衛門、天明三年九月廿五日生る、府下戸田町（今西區堀詰町）に住して酒造を業となし、家頗る富む、人と爲り高雅にして學を好み、克く其家を治め、親戚朋友に厚し、少うして井上士朗に從ひて俳諧を學ぶ、士朗嘗て曰く、沙鷗月底の二子は句體殊に觀るべきものあり、後當さに名を顯さんと、果して其言の如し、然れども常に謂へらく、我が志す所は道義に在り、風雅は唯樂とする所、之を以て世に知らるゝは我が愧づる所なりと、故に會宴を好まず、多交を欲せず、良會ありと雖も、社友四五人に過ぎず、閑寂中に在りて樂を求む、平生木下長嘯子の擧白集を愛讀し、其我が前きの世は月の宮人の句を喜び、前身月宮人の印を製して以て自ら用ふ、句評を乞ふ者あるも多くは辭して應ぜず、其門下と雖も亦皆社友を以て遇し、肯へて師を以て居らず、平生煎茶を好み、清泉を汲みて烹て以て樂とす、又笛を嗜み、閑に花月に對して時に之を弄ぶ、天保六年の秋、其親しき所の芝石、而后、旭嶂、梅裡と共に竹生島に詣し、島山日記を著す、自ら謂ふ、是れ吾が終世の清遊なりと、文化中町代となりて勤務すること十五年、篤實を以て稱せらる、天保中再勤せしも遂に衰老を以て辭し、十三年別莊を押切に營みて養老の地となす、自ら謂ふ來秋を以て別莊に移り七部集の名句を抄せんと、十四年春藩主齊莊の命により自詠三

句を上る。

秋九月二日病みて歿す、享年六十一、心海寺墓地（東區車道町）に葬り、帶川沙鷗翁と法諡す、著す所島山日記、帶川居遺稿あり、門下大橋梅裡最も著る。（名古屋人物史料、心海寺過去帳）

四八　伊東而后

伊東而后、名は榮、暮雪亭と號す、俗稱は錢屋道喜（初喜兵衛）名古屋益屋町（今西區茶屋町一丁目）の賈人なり、俳諧を大鶴庵竹有に學び、沙鷗に次ぎて名を四方に馳す、慶應元年十一月九日歿す享年八十一、光明寺（中區白川町）に葬る、而后發句集あり、世に行はる、子一清も亦俳を嗜む。

四九　大熊兎農

大熊兎農、銀杏園と號す、通稱は雲八（初善兵衛）尾張の士にして祿百五十石を食み、藩の大番組たり、後辭して馬廻組となる、俳諧を井上士朗に學び、後大鶴庵竹有に從ふ、兎農、又守株山人の號あり、慶應元年九月十七日歿す、享年七十五、眞柳寺（東區小川町）中、本遠寺墓地に葬る。（藩士名寄、歳月錄、道の時雨）

五〇　朝岡宇朝

朝岡宇朝、名は正章、通稱は傳藏、桃廬と號す、宇朝は其俳號にして、別に露竹齋の號あり、家世々尾張侯に仕へて、祿百五十石を食む。

其人となり沈靜にして、事に綿密なり、儒を飯萬島清忠（佐太郎と稱し中村習齋門人）に學び、篤く朱學を信じ、又小笠原流の禮式に精しく、歌及俳諧を嗜む、交る所皆其道に名ある者なり、性遊覽を好み、暇あれば同心の友を携へて、名勝を探り、到る處必筆を援りて之を記す、紀行數十篇あり、又平生見聞する所を筆記し、名けて袂草といふ、（一に桃廬隨筆ともいふ）天保十一年正月廿八日、疾を得、俄然として逝く、享年四十七、安齋院（東區松山町）に葬る。（いろは寄、蕉窓餘錄、袂草）

五一　朝岡柳昌

朝岡柳昌、名は正虡（たか）、通稱は久米一郎、隱居して久齋と稱す、寂然堂と號し、俳號を柳昌といふ、尾張の士朝岡正章の長子にして、祿百五十石を食み、大番組たり。

柳昌、初め父に從ひて句讀を受け、後細野要齋の門に入りて朱學を受く、公務の暇子弟を教授すること四十七年、其教を受くる者四百有餘人に及ぶ。

柳昌少きより俳諧を嗜み、又古錢を愛するの癖あり、暇あれば古書を抄出し隨筆若干卷

に及ぶ。明治廿二年十月十六日歿す。享年六十七。安齋院（東區松山町）に葬る。

五二　村木虎有

村木虎有

村木虎有、名は義眞、字は古仙、通稱は仙五右衛門、虎有は其俳號にして、別に橘頓齋、萬里亭等の號あり、世々犬山成瀬氏に仕ふ。幼にして俳諧を好み、白梵庵馬州の風骨を慕ひて常に其遺書を讀む。後井上士朗に師事し、士朗歿して大鶴庵竹有に從遊して名あり、當時の俳客快臺月底、黃山、而后、士前等皆其最も深く交る處なり。老後髮を削り、名古屋成瀬氏の濟水の邸に住し、專ら風月を樂とす。慶應二年五月二日歿す。享年七十二。犬山先聖寺に葬る。

子有阿、通稱は久太郎、亦父に學びて俳諧を善くす。明治三十七年二月十四日歿す。享年七十四。東輪寺（中區下茅屋町）に葬る。門人丹羽、葉栗の二郡に多く、屢々追薦會を設け師恩報謝の美風を遺す。（名古屋人物史料）

五三　野呂瀬桃鳥

野呂瀬桃鳥

野呂瀬桃鳥、名は自堅、幼名磯太郎、後庄次郎と稱し、更に庄左衛門と改む。父自陳、與一郎と稱す。吏職に精通し、中外に歷官すること四十年。新に采地百石を給ひ、加秩を合せて三百五十石を領す。其他賞を受くること三十餘回。文政四年十月廿六日、年六十にして歿す。

桃鳥蔭を以て、右筆部屋に出仕し、切米六十七俵を受くるに至る。文政四年十二月父の祿百石を襲ひ、右筆、寺社奉行吟味役、小納戸等を經て、藏奉行、木曾材木奉行兼錦織奉行、作事奉行等に歷職し、屢秩を加へられて三百石を領す。桃鳥文雅を好み、最も俳諧を以て名あり、天保十四年藩主齊莊、封內士庶の歌俳を能くする者をして、其詠を上らしむ。桃鳥、沙鷗、さゝを等の七人其選に與る。弘化三年六月二十九日歿す。善稱院（東區長久寺町）に葬り、霽月院光風桃鳥居士と法諡す。碑陰に辭世を刻す。曰く春秋五十餘年夢短夜既明欲覺時、たのしみやすゝしき國へ一またき。（藩士名寄、墓碑、天保會記）

五四　渡邊芸里

渡邊芸里

渡邊芸里名は綱雄、一の名は愍、神佛庵と號し、別に風詠、小果、漲堂等の號あり。通稱は善兵衛、尾藩の浮人同心にして、城西柳町に住せり。

芸里、俳諧を好み、廣く雜書に涉る。又佛學を好み、嘗て某禪師に從ひ酒肉を絕つこと十餘年、坐禪を專らにして遂に省悟する所ありといふ。平生長湫役の事實を推究するを以て事とし、遍く諸家の記錄を探り、其異同を校讐して、以て長湫記大全を編成せんとす。

芸里、人と爲り曠達、小節に拘らず、好みて古書畫、古器物を藏し、細野要齋、小寺玉晁等に交り、同好會に列す。老に及びて酒を嗜むこと甚しく、日として醉はざるはなし。其人に接する

に貴賤を別たず、嘗て雨甚しき日、漏雨坐を濕す、芸里爽然として狂詠をなす。

我宿はさて富貴なり金銀の棒のやうなる雨さへそ漏る

人皆崎人を以て之を目す、明治六年七月廿八日歿す、享年七十四、小田井村西方寺に葬る。

（蕉窓餘錄、感興漫筆）

五五　寺西我竟

寺西我竟、曲江園と號す、通稱は善左衛門、尾張の重臣織田氏の家隷にして、城北上宿に住せり、俳諧を森本沙鷗に學び、當時に名あり、慶應三年十二月十六日歿す、心海寺（東區赤塚町）に葬る。

五六　森崎是空

森崎是空、梅谷庵と號す、通稱は幸左衛門、元尾濃廣敷詰の小吏なり、中年仕を辭して熱田中瀬町に住し、書法を兒童に授く、曾て俳諧を小澤さゝをに學び、之を善くするを以て、傍ら里人に教ふるに俳句を以てす、熱田の地久しく俳に遊ぶ者なく、且つ俗勇敢にして動もすれば粗暴に流る、梅谷性溫和にして人と爭はず、且つ才氣あり、其の俳道を鼓吹せしより、卑賤の者も亦風流を解し、教化に資する所あり、後傳馬町政林寺内に移りて、專ら俳諧の宗匠を以て居り、門人益々進む、晩に曾福女に移り、遠暦の後、古兒と號し、又巴仙、雀の宿主、蘇生坊、又蘇生坊等と號す、明治十二年三月九日歿す、享年七十四、宗圓寺（中區新榮町）に葬る、著す所古雅子、巖尾集あり。（貝谷鉦二郎氏報告、宗圓寺過去帳）

五七　永井士前

永井士前、名は匡儀、通稱は松右衛門、愛知郡荒井村の豪農なり、家世々里正の職に居り名望頗る高し、士前茶儀を嗜み、俳諧を大鶴庵竹有に學ぶ、初め和潮と號し中ごろ烏津と改め、天目軒、一撮園等の稱あり、老後更に士前と稱し、名古屋に出でて長島町に住す、依りて又金鱗舍、龍鱗亭等の號あり、人呼んで荒井の入道といふ、士前自ら持すること頗る高く、其俳席に於ては、士人と雖も敢て席を讓らず、當時其右に出づる者無きこと以て知るべし、明治十一年七月廿四日歿す、享年七十一、知多郡緒川村了願寺に葬り、法號を十里香院釋泡影といふ。

五八　永井芝椿

永井芝椿、名は匡威（たゞたゞ）、通稱は松右衛門、初め星岬と號し、後芝椿と改む、尾張丹羽郡の富豪土田氏の子にして、出でて永井士前の嗣となる、父に次ぎて俳諧を善くし、近里其教を受くる者多し、明治三十三年八月九日歿す、享年七十二、知多郡緒川村了願寺に葬り、松心院釋祐宗

と法諡す、子に久一郎禾原松右衛門、阪本彰之助圖蘋大島久滿治あり。（名古屋人物史料、了願寺過去帳）

五九　大橋梅裡

大橋梅裡、清遠舍と號す、俗稱は明賀屋茂藏、名古屋樽屋町（今西區江川町三丁目）の賈人にして、紙類疊表等を商ふ、性風流を好み、森本沙鷗に從ひて、俳諧を學ぶ、時に伊東面后世に名あり、梅裡之と並び稱せらる、明治六年十月廿八日歿す、享年六十四、北押切本龍寺に葬り、本解院梅裡日遠居士と法諡す。（大橋氏文書、本龍寺過去帳）

六〇　石田素陽

石田素陽、豊屋と號す、通稱は源助、丹羽郡今市場の人なり、幼にして風雅の志あり、大鶴庵竹有の門に入りて俳諧を學び、頗る其道に達す、其家農を業とするを以て勸農の傍四方の俳士に交り、且つ後進を指導して風化を補ふ、明治三十三年一月八日歿す、享年八十九、居村の墓地に葬り、歸法道一と法諡す。（汲古）

六一　黒田甫

黒田甫（はじめ）、名は文柱、六一郎と稱す、後立軒と改む、甫は其俳號にして、第一樓と呼ぶ、家世々尾張侯に仕へ、祿二百五十石を食む、六一郎亦藩に仕へて目付役たり。

俳諧を吉原黄山に學び、初瑤池軒桃里と號せしが、后甫と改む、人となり風流瀟洒、諸技に精しく、畫を門人奥村石蘭に學び、俳と畫と互に師弟たり。

明治の初年永平寺久我環溪和尚、俳諧の人心修養に稗益あるを說き當路に上書して教導職を設けん事を請ひ、議容れらる、甫教導職試補となり、後東京教林盟社の分社を設立して人心を美化するに務む。

當時東京に橘田春湖あり、京都に八木芹舍あり、世稱して俳壇東西の二大老となす、甫之と相上下し中京俳壇の牛耳を執り、其名海内に施く。

明治二十五年九月廿八日歿す、享年七十九、情妙寺に葬る。（墓碑、藩士名寄、見聞雜劄）

六二　吉原醉雨

吉原醉雨、名は東海（はるうみ）、通稱數馬、初め竹三郎、又、五郎と稱す、吉原黄山の第五子なり、俳諧を父黄山及伊東面后に學び、歌を上田仲敏、植松茂岳に學ぶ、慶應元年俳諧撰者立机を行ひ、父に次いで竹意庵と稱ふ。

醉雨、上代樣の書を能くし、俳諧の冊子、歌の集、其筆する所多し、書及俳諧の門人頗る多く、地方第一と稱せらる、明治廿六年三月廿七日歿す、享年七十五、白川町西光院に葬る。（汲古草

稿）

六三　織田車友

織田車友、名は信熹（のぶあきら）、通稱は忠右衛門、世々尾張侯の臣にして、祿百石を食み、藩の大番組たり。

車友、俳諧を花の木芹舍の門に學び、松琴園と號す、明治三十四年七月十五日歿す、享年七十九、筒井町情妙寺に葬る、著す所松琴園句集あり。（没古草稿）

六四　大野三楓

大野三楓、通稱は紋七郎、尾藩の小吏にして、上宿役割町（今吹出町）に住す、性閑雅風流を好み、俳諧を吉原黄山に學ぶ、常に茶事を樂とし、暇あれば一字三拜法華經を書寫す、明治二十二年十月十四日歿す、享年七十三、圓頓寺（西區橋詰町）に葬る。（没古草稿）

六五　松浦羽洲

松浦羽洲、初め名は有秀、後羽洲と改め、暫く徂康の號を用ひしが、後又羽洲に復せり、別に六松園、羽洲園の號あり、俗稱は吉島屋九右衛門、初め東萬町に住して古着商を業とし、弱冠にして西川芝石、伊東而后に從ひて俳諧を學び、二人歿して後、深く大橋梅裡に交れり。

羽洲、又木下庄三郎に從ひて觀世流の謠曲を學び頗る得る所あり、遂に江戸に出でて觀世清孝の門に入り其蘊奥を極む。

羽洲、名聲諸國に聞え、俳諧の門下漸く多きを加ふ、且謠曲に精妙なるを以て、家元觀世より後進の誘掖を托せられ、其門に入る者亦多く、資產頗る富むに至れり、是に於て業を廢し、家を東魚町に築きて之に居る、明治二十年前後、海内俳壇の耆宿、相次で物故す、羽洲長壽の故を以て所謂舊派俳人の中心となる、門下に西園寺不讀公望、渡邊其鳳昇、森山鳳羽茂、岩村素水通俊等あり、大正三年十二月廿三日歿す、享年八十八、白川町法應寺に葬る、著す所羽洲園發句集、雪の雫（歿後追悼の俳諧及遺吟を集めたるもの）あり。（墓碑、名古屋文學史、雪の雫）

六六　大木靜處

大木靜處、未曉庵と號す、通稱は菱屋重次郎、文政十一年七月十三日、城西枇杷島の家に生る、幼名を左門、又貞次郎と呼べり、少うして、柳澤維賢の門に入り、書及び漢籍を學び、又謠を渡邊清に學ぶ。

靜處、賦性恬淡清靜、風雅を好む、乃ち西川芝石の門に入りて俳諧を學び、弱冠にして詞藻已に群に拔んづ、初め沙流と號し、又量湖と呼び、後靜處と改む、家世々農にして、傍ら蔬菜の

問屋を營み、苗字帶刀を許されたる家柄なりしも、靜處之を以て人に誇る事なく、常に書畫珍籍、古器を愛して樂となし、暇ある時は四方に出遊し、凡海内の勝地舊蹟、往て訪はざるはなし。

靜處交遊最も博く、其風を慕ひ、教を乞ふもの亦少からず、其雌黃を下すに、仔細に商量して、嘗て苟もせず、人其道に厚きを稱す、明治二十五年九月十六日、年六十五にして歿す、枇杷島淸晉寺に葬り、獨仙靜處居士と法諡す、著す所閑古鳥百韻、靜處發句集あり。（不昧集、名古屋文學史）

第十一　狂歌　小說戲作

一　三宅長齋

三宅長齋、本三郎右衛門と稱す、近江堅田の人なり、小笠原監物に仕ふ、監物殉死の時、之に殉ぜんとす、止められて罷む、後本多豐後守に賴り、又來りて尾張侯義直に仕ふ、人と爲り恬淡寡欲にして口才あり、又工を能くす、常に老莊の書を讀み、平日談ずる所、皆之に本づく、人の貧なるを見れば財を施して惜まず、一日侯將さに一士を手刄せんとす、長齋急に止めて曰く、今日恰も彼岸に會す、戮することを止めて請ふ之を宥せと、侯曰く、彼岸とは何物ぞ汝之を知るかと、長齋伏して曰く、其形鴻鵠（おほとりなるいたち）の如くなりと、侯笑ひて之を釋す、長齋書を巧にし、詩歌を善くす、而して其面貌を窺ふに一字を識らざるものゝ如し、侯嘗て先聖殿を造り、長齋に命じて、黃金を以て聖賢七人の像を作らしむ、伏羲、夏禹の二軀成りし時、正月元日君前に出でて狂歌を詠ず。

あら玉のとしのはじめにふつきして冥加に叶（かな）ふ我身なりけり

又小野小町が持てるといふ松風の琴、破損の處多し、侯復た長齋に命じて之を繕修せしむ、長齋乃ち之を修し、侯に上る時

うきことをせまじが爲の細工にてくはいろかゆる松風のこと

肥田孫左衛門、侯の親任を受く、人目して出頭人となす、而して其頭禿す、長齋戲れて曰く、

出頭は出る頭とかくけれど孫左のあたまはげにけらしな

一日堀杏庵、侯に侍す、長齋卒然として曰く、正意甚だ驕慢の色あり、漢に在りては孔子、本朝に於ては我なりといふの狀、歴々として見ゆと、杏庵大に恐懼して其故を詰る、長齋曰く、孔子の子を鯉といふ、正意其子に鯉とも鮒とも命じ難きを以て、源五郎と名づく、是れ孔子に匹敵すといふ所以なりと、一坐皆顏を解かざるなし、其矢口善謔概ね之に類す、侯薨じて後、迹を韜晦して其之く所を知らず。（塵點錄、逃城亭隨筆）

二　水野鳥三

水野鳥三、通稱は米屋甚助、剃髮して鳥三と稱す、名古屋鐵砲塚町（今相生町）に住す、小治田之眞清水には名を長三また庄兵衛ともいひて云々と記し、金鱗九十九之塵には長左衛門と錢す故に人皆長さんと呼ぶ直に歌名に用て鳥三と稱すとあれども、海福寺過去帳、尾張畸人傳共に甚助とあるを正しとして之に從ふ、又氏を久野とするものあれども、是亦海福寺過去帳に從ふ　鳥三狂歌を能くし酒落齋、元日庵等の號あり、人と爲り放逸にして、流俗の煩はしきを厭ひ、常に酒を嗜み、時に臨み、口に任せて狂歌を詠ず、故に詠草を留めず、固より後世に貽さんの意なく、唯一時興の發する所、遊戲として之を詠ずるに止り、世の狂歌者流の口吻とは稍々異なり。

一日酒宴の席にて杯へ蚤の飛入りければ

盃へ飛入る虫ものみ仲間さすがおさへもつぶされもせず

或人元旦に雜巾の天窓へ落ちしとて欝ぎ居たれば

ざうきんを當字でかけば藏に金いづれにしても是はふくもの

一日竹腰山城守に召されし時予今繪を描かん予一筆

畫かば汝亦一句づつ歌仕れとあり先瓜の葉を描かる

乃ち直ちに瓜蔓にと口吟す山城守手早く葡萄に變じて畫き成されければ

瓜蔓になすびはならぬものゝふのお家柄とてぶだうなさるゝ

或商家を訪ひし時暖簾を揚げて伺ふに會々來客ありければ其儘立歸らんとするを主人誰そと問ふ鳥三かへりみて

暖簾にあたりて歸る者ならば鐵砲塚の人と知るべし

其風調概ね此の如し、天明八年九月十日歿す、享年七十八、新道町海福寺に葬り愚谷道慧居士と法諡す。（墓碑、海福寺過去帳、尾張畸人傳、小治田之眞清水、金鱗九十九之塵、玉晁思出隨筆）

三　蘆邊田鶴丸

蘆邊田鶴丸、三藏樓、又、橘庵と號す、氏は岩田、俗稱は近江屋傳兵衛、府下吳服町の染戸にして、有松絞を製するを以て業となす、性狂歌を好み、唐衣橘洲に學びて其妙を極む、後業を女婿某に讓り、退隱して正萬寺町に住し專ら狂歌を事とす、一年春曙を詠じて曰く。

花鳥に今目がさめてこれまでの朝寐くやしき春のあけぼの

橘洲激賞して措かず、爲に橘の一字を學ぶ、依りて橘庵と號す、文化年間江戸に至り、後妻を携へて京都に赴き、西行庵に居る。文政七年再び尾張に歸り、髮を削りて名を靈壽と改め熱田宮谷山神光寺（修驗道祐學院今廢す）に住し、翌年又江戸に遊び、仙臺に至る、既にして神光寺を其子某に讓り、又京都に赴き御幸町三條北に居る、天保二年熱田に歸りて神光寺堂宇修復の事に從ふ、天保六年長崎に遊び、歸途丸龜の船に上る、明石を過ぐる時、忽ち颶風に遇ひ、船覆りて人皆溺る、田鶴丸舟人の救を得て纔かに蘇し、

ありがたや底のみくづとなりもせで、身は浮草のきしにこそよれ

と詠ず、已にして治療效なくして歿す、時に十月六日なり、享年七十七、同地長林寺に葬り、法諡して橘庵田鶴丸靈壽居士といふ。（尾張畸人傳、尾張名家誌二編、金鱗九十九之塵、文政再刻平安人物誌歲月錄、雜聞）

四　豐年雪丸

豐年雪丸、通稱は市橋助右衛門、初め榮七と稱す、名は美、月花庵の號あり、瀧本樣の書を巧にし、又狂歌を唐衣橘洲に學びて同門中に傑出す、安永二年始めて尾張に仕へて勘定方並手代となり俸を賜ふ、後數々俸を增して拾二石一口を賜ひ、勘定本締役、記錄所書役等となり、班を歩行格に列す、文政四年十二月十四日歿す、瑞寶寺（中區白川町）に葬り、花月院淨雪照丸居士と法諡す、其詠する所に

花發多風雨　さく花の狼籍者にかけて見む風には手かせ雨に足かせ

立秋　立秋の露と蚊屋とは質草にいつれか先へおかむとすらん

落栗　國境おちたる栗は飛ひ出てて伊賀より伊勢へ拔參りしつ

落葉　小倉山みゆきのさきへ風立ちて下に〳〵とちろもみちかな

等あり、以て其風調を窺ふべし。（藩士名寄、尾張名家誌二編、藝文、墓碑、狂歌萬葉集）

五　石井垂穗

石井垂穗、名は孝政、八束軒、怡齋、二亭（りゅんてい）、同道堂、無空々々道人等の號あり、初の稱は八郎次、後九郎左衛門と更む、木氏は庵原氏、祖父楚巾、父文芦、共に横井也有と交りあり、垂穗出でて石

井氏に養はれ、寛政六年始めて右筆部屋留役見習に出仕し俸三口を賜ふ、尋いで留役より右筆に進み、百俵を賜ふ、享和三年父の祿二百石を襲ひて家を繼ぎ、後書院番より純姫（藩主宗睦の養女、上杉治廣の室）用役となり、文化十年書院番に復歸す、文政五年進物番出役となり、八年書院番組頭格に進み、十三年書院番組頭となりて祿五十石を加賜し、專ら進物番出役の事に從ふ、後使番格に進み、歷職四十七年の久しきに及ぶ。

垂穗少うして細井平洲に從學し、又幼より朝岡氏の門に入りて禮法を學び、式事に精通す、平生橫井也有に私淑し、鶉衣續篇及び拾遺を校して世に行ふ、其江戸に祇役すること前後二十年、唐衣橘洲に從ひて狂歌を學び、蜀山、飯盛、眞顏、種彥等に交る、天保十一年五月十四日歿す、享年七十二、阿彌陀寺（中區門前町）に葬り、八東軒陀譽垂穗居士と法諡す、著す所享元錄、空談大論、帳中教語、片假字考、水替り前篇、奈良武加、垂穗草、樹々の榮、杉の村雨物語、かのこ染、變手古篇、其他編錄若干あり。（藩士名寄、鶉衣續篇、石田元季氏鶉衣と石井垂穗）

六　木芽亭田樂

木芽亭田樂、本名は神谷剛甫、醫を業として、城西牧野村に住せり、學和漢に通じ、常に戲作を好み、特に狂歌を善くす、木芽亭田樂、一に西江田樂と號し、又西郊の字を用ふ、其花押には田樂形を書す、終身娶らずして母に孝あり、享和元年始めて挑燈庫闇の七扮といふ草雙紙を著はし、曲亭馬琴に請ひ、其紹介を以て出版せり。（醫家姓名錄、野口道直手錄、江戸時代戲曲小說逸志）

七　大屋孫彥

大屋孫彥、本名は安井信富、古渡山王祠の神職なり、六橋と號し、又剪燭齋と號す、晩年白髭を蓄へ、髭翁と號す、世の人其名を呼ばずして、山王のお髭といふ、少うして磯谷滄洲に學び、詩を嗜みて吟詠を絕たず、職を辭するの後、一室に隱栖し、朝夕講書を業とす。

孫彥、人と爲り諧謔を好み、奇才縱橫、實に天資に出づ、狂詩、狂歌を善くし、最も口合に長す、其人と語るに始より終に至る迄、口合にあらざるなく、彌々出でて彌々妙を窮む、時に某なる者あり長髯を好む、人稱してお髯と呼ぶ、一日途に孫彥に逢ひて、率爾に曰く、「相變ラズオヒゲンヨウ」と、孫彥徑ちに「アナタモオマゲデ、」と應答す、人傳へて其應酬の妙なるを稱す。

孫彥、時事を諷して作る所の狂詩、俗謠頗る妙を極め、讀む者爲めに頤を解く、晩年狂歌あり。

正直のかうべもいたくはげにけりすべりたまふな宿る神達

弘化元年秋、病に罹り、二年の春に至りて彌々篤し、然れども訪ふ人あれば、應對常の如く、諧謔溢る所なし、二月に至り、終に起つべからざるを知り、座右無用の書籍器物を賣り、古事

記傳一部を購ひて子孫に貽す、而して辭世の詩歌を書するもの七首、三月六日に至りて歿す、享年七十三。德林寺（中區日出町）に葬る、遺言して曰く、我死後三十日間、日々茶會を催し知己を饗せよと、自ら其獻立を書して、嫡孫某に囑す、某能く其遺命を守り、一に其言の如くせりといふ。（天保會記、墓牌）

八　西來居未佛

西來居未佛、初め瓢箪園一寸法師と號す、本名は毛受善喜、尾張侯の奥坊主にして江戸市谷邸に勤仕す、人となり酒落にして放達、最も狂歌に工なり、常に酒に耽り、日に酒肆、青樓に過ぎり、遊蕩して一世を愚弄す、曾て謂ふ、狂歌は物に隨て即坐に詠むを以て興とす、然らざれば詩歌を作るに如かずと、人あり之を苦しめむとして詠じ難き物を畫き贊を求むるに直に筆を執りて狂歌を書す、奇思百出、更に構思を費さずして、其妙人の顯を解く、其殘雪の詠に曰く。

鶯の經の功力に悟りてや雪の達磨の坐禪くづるゝ

又其冬籠の詠に

鶯も夜飼の頃の冬籠小鍋やほしき酒やこひしき

これ袋草紙に幼兒の歌として出せる

鶯よなとさはなくそ乳やほしき小鍋やほしき母や戀しき

の歌に胚胎せりといふ其才思概ね此の如し、天保二年四月十六日歿す、年四十餘、著す所忠臣藏合鏡、小倉袴女英勇錄等あり。（尾張畸人傳二七、圓陵隨筆四八、歳月錄）

九　小寺玉晁

小寺玉晁、名は廣路、字は好古、初め古樂園嘉來といひ、後連城亭玉晁と號す、別に續學舍、對硯齋、隨筆園、東杉居、藏書園、戲呂健館、城東館、珍文館、戲道人等の號あり、又俳名を西亞、許大、山之、萬丸等といふ、幼名廣治、又富次郎、後九右衛門と稱す、父の名は廣政、十兵衛、又九右衛門と稱す、玉晁は其庶出の子なり、寛政十二年五月十八日生る、廣政、玉晁が庶出にして且つ老後の子なるを以て、木村廣之を養ひて己が嗣となし、玉晁を以て廣之の養子となす、廣政歿後廣之子數人を生むを以て、玉晁其養子たることを辭し、別に一家をなす、而して藩士上野、野崎、中村、高橋、佐枝、大道寺の諸家に轉仕す、玉晁幼より諸藝に志あり、文武二道の數技を兼ね學ぶ、特に畫を森高雅に、香道を蜂谷宗意に學び、狂歌を榛園秋津の門に受く、又俳諧を嗜み、且つ頗る著述を好む、平出龜壽、永坂平器、松尾千瑋、高橋仙果は、其最も親しき交友にして、常に相會して文藝風俗の事を談ず、後仙果の江戸に出づるに及び、更に天笠花老人、松井蒼龍、水野睡鷺、中西金陵の四人を加へて、八天狗と稱し、又耽古連中といふ、而して盛に狂歌、戲文

を弄し、又遊廓、芝居、草紙、物語等の古書珍籍を蒐集して、互に誇りとし、又古版を摸刻して同好に頒つ等の事をなす、玉晁生川春明と交りあり、又平野廣臣、稲富秀實、吉田高憲、長坂正心、岡田啓、平出順益、奥田常雄、大島通明、野口道直、首藤允中、柴田龍溪、石原吉正、水野正信、都筑泰觀、神谷克楨、岸上武綱、鏡島邃山、渡邊芸里、水野伴鈴、林穆叟、長戸忠順、細野要齋、細野栗齋、小田切春江、川崎六之、川崎千虎、尾崎忠愛、大田治明、村瀬正行、深田民助等と共に同好會を設け、月毎に相會して、古事を考査し、古器物、古書籍、古書畫等を研究して、互に聞見を博うす、玉晁陪臣にして祿微なるが上に、性酒を嗜みて斷えず酒氣を帶ぶ、家資素より豊ならざるが故に、常に貸本店大惣、及び同好者の需に應じて寫本をなし、以て生計の資となせり、而して精力絶倫にして健筆なるを以て、其間に在りて古今の事蹟を記錄し、且文藝、風俗、地理等に亘りて著述する處頗る多く、續尾陽勾欄始志、名古屋勾欄續々誌、甲戌勾欄類見聞、自文久四年至明治六年勾欄類雜、集錄、芝居叢の中、尾張芝居雀、見世物雜志、戲場評判記目錄、淨瑠璃外題いろは分、亂舞雜錄、小歌ごもく草紙、小歌（カウイシ）志彙集、童謡雜錄、小歌のちり、どゝいつぶし、根元集、可見圖（カミヤシ）益志、增補浮世繪師考、近代本朝續世事談、俗の歳事記、尾陽祭禮年中行事、御祭禮雜記錄、尾張八丈、虚無僧雜記、尾陽古今畫畫一覽、古今招牌集考、蓬萊松、高蕪濃考、二編人倫訓蒙圖彙、人物圖會、歳月錄、傳聞過去帳、名府諸名家墓所一覽、舊邸礎跡略、籠の鳥、司武評士、繩張草紙、干魚の玉物、近世淫亂集、落馬集、三闕集、大邪政事槌、堂中杖、井中鉦、物語、續膝栗毛、狂戲文集、十二支戲文、化粧文集、紙魚のそし

き、筆のまに〳〵、こばむのみみ、一口ばなし、天保見聞、名府太平鑑、尾陽太平日記、連城亭隨筆、古樂園隨筆、玉晁思出隨筆、鳥の巣、紅葉集、東西評林、東西紀聞、玉晁見聞錄、玉晁日々錄、華砌嵐日記、櫻田紅雪錄、京阪日誌略、長防征伐日記、越奥羽追討日誌、但州夢物語、熊本暴動記、諸家隨筆集、醒世文集、この序から、水府雜錄、反古袋、連城叢書、續學舍叢書、珍文叢書、俳叢、俳諧百人一句抄、四季抄、玉晁川柳稿本等あり、明治十一年九月二十六日歿す、享年七十九、安淨寺（東區鶴重町）に葬り、連城亭玉晁居士と法諡す、子數人あり、長子廣國、通稱ば亥六、雅號を國晁といふ、天保十年五月二日生る、明治の初故ありて近藤氏を嗣ぐ、亦風流の人なり。（名古屋人物史料、人物圖會、松濤草筆、小判のみみ、感興漫筆）

10　赤之御膳

赤之御膳、本名は千村政時、藤右衛門と稱す、尾張の世臣にして祿四百石を食む、文政六年家を繼ぎ、使番、目付、勘定奉行等に歴職し、用人格に進めらる、後用人格寺社奉行となり、累りに祿を加へられて八百石に至る、嘉永四年馬廻頭格となり、六年三月致仕す、狂歌を好みて時に名あり。

いく千年ふる上下にふるのしめ今朝もめてたくきみか代の春

は其詠なりといふ、安政四年正月二十一日歿す、政秀寺に葬り、良俊院顯嵩密一居士と法

謚す。（藩士名寄、金鱗九十九之塵、政秀寺過去帳）

一一　加藤琵琶彦

加藤琵琶彦、名は保右、字は中甫、瀧の屋と號す、俗稱は升屋理吉、名古屋古渡町山王祠畔の市人なり、小間物を行商するを以て業とす、國學を市岡和雄に學び、又狂歌を龍の屋海城に學びて頗る之を巧にし、便々館琵琶彦の名四方に鳴る、森高雅の女を娶りて子あり、男は早く歿し、女は平出順良に嫁す、安政元年三月廿三日、近江土山の旅中に歿す、年四十許、矢場町法光寺に葬る、釋淨眞は其法名なり。（金鱗九十九之塵、名區小景三編、思出草、平出謙吉氏談話、法光寺過去帳）

一二　笠亭仙果

笠亭仙果、氏は高橋、初の名は政房、後廣道と改む、字は子由、通稱は彌太郎、幼名龜三郎、嘯齋、古今堂、笠亭と號し、又狗々山人、招祿翁等の戲號あり、熱田中瀨町の人にして父を彌右衛門といふ、彌右衛門は同所木挽町紀伊國屋喜平治の長子なり、偶々橘屋彌右衛門の女に懸想せられ、遂に其贅壻となる、名は敬義、字は民則、俳諧を好みて小有軒品川と號す、橘屋は質屋を業とし家頗る富む、品川遊蕩して產を治めず、諸國を遊歷して俳客に交り、是を以て家產遂に衰ふ、安政元年七月十八日歿し、成福寺（南區熱田白鳥町）に葬る。

仙果、幼にして熱田の祠官磯部右近（名は政春）を師とし、字を習ひ書を讀む、長じて鈴木雜屋に從ひて和漢の學を修め、又本居大平の門に入る、傍歌を高松中納言に學び、又畵を森高雅に學ぶ、曾て柳亭種彦を慕ひ、書を寄せて其門人となり、戲作を試みて其名漸く著る、後江戸に出でて種彦の家に寓し、又黑川春村に從ひて狂歌を學び、四世淺草庵の號を讓らる、仙果著述を以て生計となせども、自ら戲作は其本意に非ずと稱し、未如之何也（シヨウトガナイ）已矣と號す、常に清の李笠翁を慕ひ、又師の柳亭の通音を取りて、依りて以て笠亭と號す、其仙果の名は十歲の比熱田神宮寺の僧金幢に愛せられて、仙桃一顆を贈らる、高三寸圍六寸餘、形寶珠に類す、稱して崑崙山の種なりといふ、故に之を名とす、種彦沒後、自ら二世柳亭種彦と稱せしが、種彦の親戚門人の反抗に依り種秀と改む、明治元年二月九日歿す、享年六十三、本所中ノ鄕東盛寺に葬り、忠山宗義居士と法謚す、著す所八犬傳犬廻草紙、花街雀竹の夜遊、肱笠雨小春の空癖、合せ物端唄彈初、枕琴夢の通路、見目より草紙、油丁製菜種黃表紙、見世三味線一寸連彈、千代見草調の富貴組、敵鏗差身の業物、花の蔭賤の俳優、一筋道雪の眺望、柳蔭古著の新見世、根源實紫、東海道人物志、雅俗隨筆、新板へひり話、はりぬき富士等あり。（燕石十種、感興漫筆、江戸時代戲曲小說通志）

一三　大江尾京

大江尾京、本名は津田三左衛門、名古屋本町の筆墨商にして、俗稱を津の國屋といひ、揮雲堂と號す、其大江尾京と稱するは、三都の名、及び尾張の頭字に採るといふ尾京敬神の念極めて厚く、常に白衣を着し、市中を徘徊して、兒童の乞ふ者あれば狂歌狂歌を作りて之を與ふ、人目するに奇人を以てす、明治元年北越の戰終り、總括千賀信立の凱旋するや、上下之を迎ふること盛なり、尾京衣冠を着して、手に榊を持し、突然出でて信立の馬を扣へ、高聲に吟じて曰く。

戰爭もめでたくをはりのおん大將御骨折は御紋所に

と、蓋し千賀氏の徽章は、骨折扇を用ふるを以てなり、其奇行往々之に類す、明治六年一月八日歿す、尋盛寺に葬り、攝州院津田尾京居士と法諡し、墓碑に其辭世の狂歌

己れ死は沐浴するなそのまゝに上下きせて穴へほりこめ

を刻す（汲古、墓碑、尋盛寺過去帳）

一四　不二廼舍高根

不二廼舍高根、氏は大口、通稱は六兵衛、名古屋門前町の醴屋にして、三國一と稱せり、其家木伏見屋と稱する木綿問屋なりしが、高根の祖父大大黑といへる者、歌、俳諧、茶、挿花等に耽りて、家産を治めず、遂に醴店を開くに至れり、高根痘痕滿面、風貌太だ揚らずといへども、人と爲り滑稽諧謔、多藝多才にして歌舞音曲に通じ、俳諧、狂歌、情歌を善くす、明治九年の比愛岐日報社に在りて記事を擔當し、後青柳新紙、轉愚叢談等を發刊して滑稽文學を弘む、傍脚本小說を筆し、花柳界の新年の唄、舞踊歌等の新作、凡其手を煩はさゞるはなし、又同辭の者と共にお酒落會を起し、瓢逸なる生活をなす、其俳號を芙山といひ、不二廼舍高根と號するは皆三國一の名に因めるなり、明治三十九年九月十八日、年六十にして歿す、妙蓮寺（中區南小川町）に葬り、法號を不二庵眞諦巨靈居士といふ、其辭世に曰く、「死んでゆく先樣次第どふなるかとんと知らぬが佛なりけり」（墓碑、汲古草稿）

第十二　洋學

一　上田仲敏

上田仲敏、初名は御野、小字は金十郎、後頼母と稱し、又帶刀と改む、楠氏の後裔にして家に菊水の徽章の旗を傳ふ、依りて菊壺屋又黄花園を號となす、尾張の世臣上田半右衛門橘愼の子なり、文政三年父の祿八百石を襲ひて寄合となり、後使番、持弓頭、本丸詰物頭等に歷職す、初め國學を本居大平に學び、頗る歌を善くす、嘗て侯駕に從ひて江戸に赴く、途駿河を過る時、天氣清朗にして富士の全山悉く眸中に入る、侯輿中より見て之を賞し、且つ曰く此景歌なかるべからずと、直に仲敏を召して詠ぜしむ、仲敏即時吟じて曰く。

私の旅ならませば富士の根の見ゆるかぎりはいそがざらまし

侯大に嘉賞す、後藩六國史校合の事を起すや、仲敏之が總裁たり、仲敏性剛毅にして卓識あり、夙に天下の形勢を看破し、諸藩の政治人情を探り、時事の新報を得るに汲々たり、偶々荷蘭船長崎に來り、書を捧げて英國モリソン船の近く江戸近海に來り、漂民護送を名として、其實貿易を要求すべきを內報せるを聞き、慨然として曰く、曩に清國鴉片の亂あり、我國近く魯使「レワノツト」の事あり、今又此新報に會す、惟ふに外國との關係は年を逐ひて

頻繁に赴かん、熟々海外の事を察するに、萬國互に往來し、有無相通ずるは今日の勢なり、我國獨り鎖國の舊を守ること能はざるべし、然れども彼を待つには必ず彼を制するに足るべき軍備なかるべからず、若し其備へなければ彼が蹂躪を免かれず、今日の急務は海防を整ふるを第一とす、而して其事たる先づ彼を知るを以て緊要とすと、乃ち伊藤圭介及び福恩寺の僧得照等と謀り、歐學の必要を藩廳に開陳し、洋學堂を其邸に設けて、研究會を開く、又藩に請ひて柳田良平をして蘭學者田口俊平を聘せしめ、兵法砲術の原書を購求して、火器の製造、銃陣の法、其他天文、地理、歷史、理化の諸學に至る迄講究せざる所なし、嘉永元年十二月俊平の罷め歸るや、藩又長崎人白石平兵衛を納れ蘭法を仲敏に皆傳せしむ、是に於て仲敏洋式に摸倣して「カルロンナーデ」「モルチ！ル」「ホウヰツツル」「カノン」等の大砲大小數十門を鑄造して軍備に供し、硝石を製して武庫に充て、又知多の沿岸に砲臺を新築す、而して砲術語撰、西洋礮術便覽、慨世彙編等の諸書を著し、世の砲術家に便し、又時勢の趨く所を知らしむ、是に於て仲敏の名聲四方に傳播し、各藩の士笈を負ひて門に至る者前後千を以て數ふ、當時仲敏の家、國學和歌の爲に集る者あり、西洋砲術を學ぶが爲に來る者あり、依りて扉を別ちて境界を設け、是より西、日本人、是より東、西洋人と書せる下げ札をなせり、本藩の宇都宮三郎、柳河春三等等皆其門に出づ、然れども當時の士多く世界の大勢を知らず、蘭學者を目して夷風を尊崇すと爲し、之を指彈す、仲敏嘆じて曰く、世の學者西洋の

事情に通ぜず、其大艦巨礮の恐るべきを知らず、漫りに無謀の大言を爲す、此弊和學者に於て殊に深しと、安政二年十月臺場砲術掛を罷むるに及び、藩主銀七枚を賜ひて之を勞す、六年二月藩西洋銃陣を用ふるに至り、銃陣師範役となりて江戸に赴き、兵制を改正し、藩兵を教鍊す、九月其多年西洋砲術に心を用ひ、門下教養の功多きを賞して書院番頭格とせらる、仲敏餘技將棋を善くし其技四段に達す、文久三年五月二日歿す、享年五十五、東輪寺中區下に葬り、良範賢雄道英居士と法諡す。（藩士名寄、愛知縣名古屋區人物誌、いつまで草、幸園安政錄、幸園雜記、明治十二傑伊藤圭介傳、宇都宮氏經歷談　西洋聚衛便覽、東輪寺過去帳）

二　佐竹得照

佐竹得照、臥龍と號す、眞宗大谷派の僧にして、名古屋住吉町福恩寺得雄の長子なり、後同寺十二世の法席を嗣ぐ、得照夙に蘭學を修め、上田仲敏、伊藤圭介等に交り、其研究に從ふ、又天文學を窮め、夜々星辰の觀測をなす、貧寺にして資乏しけれども、金を得れば隨ひて書を買ひ、又行旅の人に托して窃かに蘭書を嘖ふ、就いて教を受くる者日夜絶えず、多くは醫生の徒なり、慶應二年八月十一日寂す、世壽五十、同寺に葬る。（佐竹得忍師談話）

三　山碕玄庵

山碕玄庵、幼名は總吉、淺井貞庵の第五子なり、兄養吉山碕中亭の嗣となりて早く歿す、依りて三歳にして其後を繼ぎ、小普請醫に列す。

玄庵、天資活潑、英敏にして俊才あり、其幼なるを以て、兄紫山の家に養はる、齋中四壁板を架して、書を載せ、意の欲する所に隨ひて、抽出して之を讀む、五行並び下り、眼光紙背に徹す、人目するに神童を以てす、嘗て一醫生あり、淺井氏を訪ひて曰く、吾は海内を歷遊し、名家を訪問して醫事を論究する者なり、請ふ師に見えんと、擧止倨傲、而かも辯論の離當るべからざるに似たり、塾生逡巡して爲す所を知らず、時に玄庵傍に在り、忽ち一文を草して之に示して曰く、吾幼弱にして喋々の論を好まず、請ふ筆戰を爲んと、醫生其文を熟視し、驚き謝して曰く、後生畏るべしと、面色赧然汗を拭うて去る。

歳十三、家を脱して江戸に遊び、藩醫中島養忠を訪ふ、養忠未だ嘗て玄庵を識らず、頗る之を疑ひ、試に案問を講ぜしむ、辯論精覈人を驚かす、養忠因て之を紫山に報ず、幾もなくして家に歸る、十五の春、例試に當り、頃刻にして數萬言の答文を作り、臨監の有司をして驚嘆せしむ。

嘉永元年五月、藩に請ひて退隱し、家を杉注連之助に讓り、山碕を稱せしむ、是より先、玄庵

蘭學を修む、田宮桂園玄庵と交りあり、書を贈りて西學の末節に走りて、忠孝の大本の忘るべからざるを規箴す、玄庵窃に城南古渡及び愛知郡牧野村に僑居し、高野長英の獄を脱するの後、澤三圭と稱して名古屋に來れるを潛匿せしめ、後稍く露はれんとするを察し相伴ひて伊豫宇和島に赴く、既にして玄庵京師に捕へられ、藩に押送せらる、是を以て罪を獲、閉居を命ぜられ、兄紫山、及、注連之助も亦譴を受く、嘉永四年八月廿四日歿す、享年二十五、妙本寺（東區小川町）に葬り、隨安院何村法道居士と法諡す。（藩士名寄、淺井氏家譜大成、桂園遺稿、妙本寺過去帳）

四　柳河春三

柳河春三、名は春蔭、一の名は暾、梅江と號す、別に柳園、柳屋、梶園、臥孟、楊大昕、鴛鴦樓、喫霞樓、細柳書屋等の諸號あり、又戲に紀淑齊（きのよしなり）と呼ぶ、天保三年二月二十五日名古屋大和町（今西區茶屋町）二丁目に生る、父を西村武兵衛といひ、一瓢庵幸佐と號す、春三、小字は辰助、後良三と改め、名を朝陽、字を旭といひ、白雲と號す、生れて二十箇月にして既に筆を運して字を作る、父母之を奇とし、丹羽盤桓子に就きて學ばしむ、數月にして筆法精妙を極め、觀る者皆驚きて神童となす、三歳の時尾張老侯齊朝、館中に召して數幅を書せしむ、文字活動龍蛇の勢あり、侯深く感嘆せらる、侍臣も亦爭ひて其書を需め數十幅に及ぶ、最後侯復た命じて一幅を書せしむ、乃ち大書して曰く「もういやになつた」と、是に於て侯益々其識量に驚き、侍臣に語りて曰く、是れ眞に神童なり、若し度して僧とせば、後必ず超凡拔群の善知識たらんと、侍臣内命を傳ふ、春三之を欲せず、父母仍りて密に其弟をして代りて僧と爲らしめ、春三をして伊藤圭介に從ひて醫を學ばしむ（或は云ふ圭介の養子となり、後故ありて止むと）、四歳の時、尾張笠寺の額を書し天保十二年十歳にして圭介撰する所の洋字篇を參訂す、十一歳漢文を用ひて法華經の評論を書す、辭意並びに見るべし、十二歳西洋砲術の書を著して以て、洋砲の必須なるを說く、長じて專ら蘭學を修め、上田仲敏の邸に出入す、仲敏が尾藩に洋砲の術を開きしは、蓋し春三の誘導に因れり、仲敏著す所の西洋礮術便覽は實に春三が十九歳の時譯する所にして、其刻字も亦春三の手筆に係る、凡そ春三の著書前後上梓するもの皆自から書する所にして、其書を譯するや、先づ題簽を書し、自序凡例を草して印影を描き、次いで本文を譯するに、其終尾に至るまで改竄せず、更正せずして直に之を剞劂に附す、書成りて一の誤脫なく、而も其字の巧妙なる、奇才實に天授に出づ、是を以て春三の著書一も稿本を留めず、安政三年九月、江戸町奉行井戸對馬守に召喚せられて東行す、或は其藏する所の蘭書に關し嫌疑ありしか、春三發するに臨み、其親族と絶ち再歸の意なかりしものゝ如しといふ、既にして姓名を更めて柳河春三と稱し、紀藩の老臣水野土佐守の知る所となり、其江戸船河原の別邸に在りて蘭書を譯し、一百卷の多きに及ぶ、其著「洋學指針蘭學部」は安政三年十二月に成り、四年四月之を公刊す、此年又「洋算用法初篇」を刊行す、我國洋算の書ある之を以て嚆矢とす、土佐守、春三の才

學の非凡なるを知り、之を紀侯に薦めて祿せしむ。安政五年十一月紀侯祿七十石を賜ひ、寄合醫師となして蘭學所に出勤せしむ。元治元年幕府の徵に應じて開成所教授職となり、慶應四年三月同校の頭取に進む。時に王政維新に際し、大阪に假政府を置き、七月召命先づ春三及び福澤諭吉、神田孝平の三人に下る。春三江戸の地を去るを欲せず、福澤は病に托して謝し、神田獨り命に應ず。依りて春三に代へて箕作麟祥を召す。九月鎭將府開成所を設け、悉く幕府開成所の職員を用ふ。春三依然頭取の任に居る。十一月開成學校翻譯校正掛に任ぜられ、二年三月學制を布かんが爲に選ばれて、學校制度取調係となる。七月大學少博士に任じ、尋いで正七位に叙せらる。十月に至り突如官を免ぜられしも、翌月又大學校出仕となり、翻譯督務として「譯筌」の編輯に從ふ。是より先慶應二年春三寫眞鏡圖說を公刊す。我國寫眞術を說くの書、實に之を鼻祖とす。翌年十月「西洋雜誌」を發刊し、四年二月「中外新聞」を發行す。亦我國に於ける新聞雜誌の權輿なり。其他語學より制度、文物、遊戲の末に至る迄、西洋文明を紹介し、我國文化の開拓に貢獻せる者、實に春三を以て先驅者とす。春三夙に漢籍に涉り、博覽强記、兼て蘭學を修め、後又英佛の書に通ず。而して國學に於て造詣最も深し。其文才は天授にして、筆札亦極めて精妙なり。少時人の爲に傭書するに、原本を一讀して直に筆を執り、唯時々一二字を撿するに止るのみ。其開成所に在るや、教授たるの人は、皆日に洋書一枚を譯するの課務あり。諸學者頗る刻苦して、而も訛謬あることを免かれず。春三平日手を下さず、月末に至りて始めて之に從ひ、忽にして三十枚を譯了し、且つ同僚諸氏の譯文を訂正して、瞬時に功を竣る。其反譯に精妙なること、世殆んど其比を見ず。數友春三の家に會するに春三几に凭りて一書を譯し、別に一書を讀み、而して數人に對して談論應答す。其間筆を停めず、讀むことを休めず、辯舌亦流るゝが如し。而して遂に一の沮礙なく、失語なし。人其才の敏なるに驚かざるはなし。春三筆硯の餘暇、時に短唄新曲を作り、柳橋の妓流に與ふ。當時教坊中之を謠ふ者、頗る多し。性酒を嗜み、醉へば必ず起つて河伯の舞をなす。其情態人をして絕倒せしむ。成嶋柳北箕作秋坪、神田孝平、桂川甫策、福地櫻痴、加藤弘之、福澤諭吉等皆其交る所にして、共に推重せざるはなし。大學少博士たるに至りて、時の大學別當松平春嶽の知遇を得、深く其信任を博す。宇都宮三郎は、同鄕の友なるを以て、尤も刎頸の交あり。明治三年春三肺を病むこと數旬、猶ほ案に憑りて書を讀む。自ら以て大患とせず、人亦其危篤なるを知らず。一日三郎之を訪ふ。春三曰く本日頗る快し、君と對食せんと。乃ち鰻鱔を命じて共に飽食し、既に箸を歛むるの時、俄然咯血して絕す。實に二月二十日なり。享年三十九。淺草本願寺中願龍寺に葬り、法諡して光攝院釋護念居士といふ。其著譯せる所前に記するの外、洋學指針、英學部、洋學便覽、初集、同二集、法朗西文典、同後編、同字類、佛學階梯、英吉利日用通語、十一國語箋、亞彼西字棧、智環啓蒙、國字解、萬國通商便覽、掌中萬國一覽、萬國新話、西洋軍制、新編砲家必携、英國刑典、經濟原論、除痘約論、袖珍藥說、蠶種說、附通商雜誌、格物入門、和解水學部、西洋

時計便覽、西洋將棋指南、西洋開運物語、西洋王代一覽、算法珍書、汐時早見、外國錢譜、鉛筆紀聞、中外漫筆、うひまなび、にせ物語、柳園叢書、及び歌集柳の雫あり、又一時の戲に筆せる天香社會話（名稱子放言）、古今樹花和歌集、量飲器考（どろんくめーとる）、横濱繁昌記、愛憎表考（しんぞうめーとる）、書生必用熟語箋は之を喫霞樓六々部集と名づく。（新聞雜誌之創始者柳河春三・柳北遺稿、明治十二、傑伊藤圭介傳、紀藩士著述目錄）

五　宇都宮三郎

宇都宮三郎、秋水園と號す、幼名は重行、銀次郎と稱せり、尾藩の士神谷半右衛門義重の第三子にして、天保五年十月十五日、名古屋車道の邸に生る、神谷氏は、三河碧海郡阿彌陀堂村の城主神谷石見守高正を始祖とす、高正八世の孫正三、尾張侯義直に仕へ食邑百石を領し、世々本丸番の職を執る、義重は其七世の孫なり、三郎歳十六七に及び、藩に請ひて神谷氏の本氏宇都宮を稱し、小金次と改む、後藩を脱するに及び名を義綱と更め、鎮之進と稱し、後又名を三郎と改む、幼にして藩學明倫堂に入りしが、性讀書を好まず、常に惡戲をなし、堂中の頑童を以て知らる、居ること三年自ら學の成し難きを知りて、請ひて退學し、是より專ら武藝を修む、而して最も砲術、轉心流の組打甲州流の軍法を好めり、時に上田帶刀西洋砲術を講ず、三郎一たび往きて之を試みるに、從來學べる所の和流砲術の比に非ざるを以て、遂に帶刀の門に入りて日に往き講習して倦むことなし、而して帶刀の許には當時和蘭甲比丹の幕府に上れる風說書等の譯文至り、海外の狀況を知るの便あるを以て、益々之を喜び、多く砲術書を讀破す、偶々海上砲術全書を讀み、火藥の製法に關し、蘭合學の必要を悟り、遂に武術を廢して、專ら西洋砲術と、蘭合學との研究に一身を委ね、殆んど寢食を忘るゝに至る、嘉永六年米艦浦賀に來りて互市を乞ひ、翌年復來るを約して去る、藩江戸警備の爲に六人の士を選びて東上せしむ、三郎其選中に在り、父大に喜びて其行を壯にす、三郎決死東行し、江戸に至りて砲術を在府の藩士に授け、彈藥の製造に從ひ、傍ら有名の砲術家及び蘭學者と泛く交ることを務め、最も深く杉田成卿に親しむ、當時成卿より和蘭の麵麭製造法を聞き、直に之を製造し、頗來之と冷水とを用ふること二年餘なり、蓋し將來山野を跋渉せんの企圖ありしを以て、豫め其習慣を養ふの意なりしといふ、而して又國老竹腰氏の臣大脇道助に就きて蘭學を修む、既にして築地に砲臺を築き、砲を据ゑて米艦に備ふ、是より先嘉永中三郎著發彈を發明す、而かも資金の乏しきを以て之を試驗するを得ず、是に至りて之を戸山邸に試みること屢々なり、藩主慶勝聞きて大に之を嘉みし、賞金を賜ひて之を奬勵す、時に江戸西洋砲術の大家は江川太郎左衛門、下曾根金次郎の二家を推し、諸藩の士皆各其門に入りて學び、互に相競ふ、然るに江川の門、角材を建て彈丸之を穿てば破裂することを發明し、之を築地に試みる、而して下曾根の門下は未だ之を能くせず、頗る以て憾みと爲す、渡邊在綱（新左衛門）之を聞き、下曾根の門人に告げて曰く、我藩に宇都宮小金次あり、曩時既に之

を發明し、頃日數々之を試驗せり、敢て角材を要せず、水中地面彈の達する所に於て破裂す、其法を知らんと欲せば之を宇都宮に問へと、是に於て下曾根門下の士三十餘人、誓紙を納れて三郎の門に入る、三郎乃ち諸士を率ひ大森に行き、從來試みたるよりも更に大なる砲を以て著發彈を試擊す、當時世上未だ西洋砲術に暗く、尾州の研究最も進歩して一頭地を拔けるを以て、是より藩邸に來りて三郎の教を請ふもの日に七八人を下らず、時に藩議西洋砲術を罷むるに傾き、砲名の如きも原語を以て稱へしめずして、長筒短筒と呼ばしむるに至る、依りて三郎等を國に歸らしめんとす、是に於て三郎意を決し、書を參政に送り、西洋砲術研究の爲と稱して藩を脱す、時に安政四年なり、五年幕府大砲を鑄造す、三郎其鑄造法の不可なると地金中砒石及鉛を含有するときは用を爲さゞることを論ず、適々遠藤但馬守の聞く所となり、遂に地金分析の事を命ぜらる、是に於て三郎自ら藥品を製し、器具を調ふること七ケ月、其間屢々化學の實驗を施して諸人に示す、當時人未だ舍密學の何たるを知らず、視て驚異せざるはなし、其定量分析の結果、初めの配合と寸毫の違なかりしを以て大に諸吏人を驚かし、賞金二十五兩を賜ふ、是より江川の家に寓し、其教官に教授す、六年英艦品川に入る、江川の下僚艦に至り摩擦管一本を乞ひ得て還り、之を三郎に示して其製造を托す、三郎驗して其コロール酸加里を用ひたるを知り依りて、コロール酸加里を製し、標本に同じき物三四十を造りて之を試みるに頗る好成績を示せり、江川大に喜び、持して之を英人に示す、英人亦大に驚く、

是より先紀伊の藩老水野氏、尾藩大脇道助に囑して軍艦を新宮に造る、艦長さ十三間半、三本檣の帆船にして、號して丹鶴丸といふ、工成りて進水するに方り、艦横臥す、漸くにして之を起し水上に浮ぶることを得たり、水野氏率先して軍艦を造りしを以て、之を江戸に回航せんとす、然かも其任に當る者なし、三郎の親友柳河春三、時に蘭書翻譯の爲に水野氏の許に在り、之を聞きて三郎を推薦す、水野氏大に喜びて回航一切の事を委す、三郎素より操船の術を知らず、然れども其義俠の心と好奇とを以て之を諾し、乃ち江川氏海軍方の教官、及び中濱萬次郎、柴廣吉に就きて操艦の秘訣數條を聽取し、安政六年二月紀州に赴き、艦の一部を改造す、四箇月を費して航海の準備成り、勝浦を發して六日にして浦賀に著し、遂に品川に達す、其停船投錨の法皆前に聽く所を應用せり、幕府海軍所の諸員、船の入港せるを見、其操縱の巧妙なるを以て、皆外國船となし、勝安房等來り觀るに及びて紀藩の軍艦なるを以て、更に一驚を喫し、三郎の豪膽と、其奇才とを稱せざるはなし、水野氏酬ゆるに三百兩を以てす、後勝安房の薦を以て幕府の洋書調所製煉方出役となり、兵科舍密の外、一般舍密學に從事す、洋書調所を開成所と改稱するに及び、三郎建言して製煉所を改めて化學所となす、本邦に化學の名を用ふること此に始まる、幕府軍制を改革して西洋法を採るに及び、大村益次郎、大鳥圭介、原田一道等と共に海陸軍兵書取調役となり、又講武所出役を兼ね、專

ら陸軍所に在りて兵科化學を教授す、文久中幕府大砲を鑄造するや、伊豆韮山に赴きて、學術上の事を掌る、後幕府は鑄造を中止せしが、三郎の指揮に依りて鑄造せる、阿波侯の大砲二十八門は一の缺點なく製造を了し、始めて本邦に於て完全なる砲を製出することを得たり、元治元年藤田小四郎等兵を筑波山に擧ぐ、三郎幕軍に從ひ、野堡築造の事に從ひ、歸りて賞銀百枚を賜ふ、時に幕府三郎を祿仕せしめんとし屢々内命を傳ふ三郎素志の尾州復歸に在るを以てし固く之を辭す、後又世祿百俵、三百俵高を以て步兵指圖役頭取格たらしめんとす、三郎前志を翻さず、會々征長の事起り、老中阿部豐後守、松平伊豆守大阪に在り尾張侯玄同に設きて、三郎の歸藩を許されんことを請ひ、而して後尾張に乞ひて幕臣たらしめんとす、尾藩の答其當を得ず、事遂に綫む、時に紀侯征長の總督たり、其軍皆和流を用ふ幕府の將校之を憂へ、三郎をして紀藩に遊說して洋風を用ひしめんとす、是に於て三郎紀伊に赴き東奔西走遊說に務むること數十日、遂に悉く軍隊を改正せしむ、既にして廣島に赴き軍中に在りて病む、依りて軍艦に乘じ江戸に送還せらる、病を養ふこと三年、維新の變革に及びて尙ほ起つこと能はず、二年に至りて稍輕快に赴く、時に函館追討の令出づ、三郎力疾京師に至り、太政官に出でて榎本等の反志なきを陳じ、追討の軍を止め、自ら函館に至りて共に蝦夷地開拓の事に從はんことを請ふ、太政官之を京都府に請ふべしと爲す、京都府は又之を江戸の軍務官に請ふべしと爲す、依りて晝夜兼行して江戸に還り、病も亦此間に在りて癒ゆ、而かも事遂に意を得ずして止む、三月開成學校出仕となり、七月大學中助教に任じ、三年九月大助教に任じ、從七位に叙せらる、四年九月文部省八等出仕となり、編輯係に任じ、十二月文部少教授に任ず、五年正月南校專門學課となり、尋いで正七位に叙せらる、五月工部省六等出仕となり、命を受けて歐米各國に航し、洋人の召傭諸器械購入等の事に當り、六年十一月製作寮六等出仕に補せらる、八年十月再び英米兩國に至り、十一月米國費府博覽會御用掛に任ず、九年十二月工部二等技長に任じ、十年一月勸業寮御用係を兼ね、二月工部權大技長に任じ、工作局に出勤し、四月正六位に昇叙す、十年八月内國勸業博覽會審査官となり、十三年十二月復内國勸業博覽會審査部長となる、十五年六月工部大技長に任じ、十五年八月勳五等に叙し、從五位に叙せらる、十七年六月病の爲に職を辭し、三十四年十一月正五位勳四等に叙せらる。

明治の初め本邦の工業極めて幼稚にして、諸品皆外國の供給を仰ぐ、鐵道建築、港灣改良の諸工事に要する所のセメントの輸入極めて多大なり、明治七年、政府其輸入を防遏せんとして其製法如何を三郎に問ふ、三郎其製造の容易なるを建白し、遂に深川工作分局に於て其製造の試驗を爲すに決し、二年の間晝夜勉勵し、辛苦の末完く其成效を見、能く外國品の輸入を防ぐことを得たり、我國幾多のセメント工場は、其源を三郎の經始せる深川工作局の法に取り、其指揮に依りて成りたるもの多く、深川の淺野セメント工場は、即ち三郎の

多年經營せるものゝ後身なり、白煉瓦は鎭山の鎔礦爐及び各種の爐竈に必要なれども、當時其製造法なかりしを以て諸工業に着手するを得ざりしが、三郎歐洲出張の時、其方法を研究して歸り、伊豆梨本より白土を蒐集し、更に尾張より良土を取りて、專ら其製造をなし、遂に始めて本邦に於て完全なる耐火煉瓦を製出するを得たり、明治九年大阪造幣局に於て炭酸曹達の製造をなす、是より先大隈重信大藏卿たる時建言して曹達製造を工部省に托す、工部省依りて三郎に之を命ず、是に於て三郎其實驗に着手し終に其成功を見るに至る、凡三郎の經營せる事業中、最も苦心慘澹を極め、實に六十日間に亘りて、徹夜研究せるは當時皆人の驚き怪む所なり、以て三郎が其事業に熱中せるの深厚なるを窺ふべし、其第二回歐洲出張は專ら此曹達製造研究の爲なりき、又明治八年より十年に至るの間製藍の法を改良して一新法を案出し、後其法全國に普及す、又電信局長芳川顯正の請に依り、電柱防腐法を試み、遂に從來よりも二三倍の長年月を保たしむるに至り、其方法全國一般の電柱に應用せらるゝに至る、十一年京都博覽會審査官として出張中、砂紙の製法を同地に傳へ、後名古屋に至りて同法を授く、本邦ヤスリ紙の製法茲に端緒を開く、明治十四年、三郎本邦築竈法の學理に背き、無益の燃料を費し、火災の患多く、極めて不完全なるを感じ、改良竈を新案して築竈論一部を著す、北海道北水協會、之を魚粕製造用竈に採用して、其利益する所極めて大なりしを以て、後有功賞牌を贈れり、又火葬法を改良し、明治十六年七月築竈改良論を主唱するの際、尾張亀崎地方の請ひに應じて同地に到り、舊來用ふる所の清酒釀造法の不完全なるを說き、遂に同地に試驗所を設けしめ、躬親ら釀造場に入りて製作を試み、完全なる新法を實行し、同時に釀造新法一部を著して、廣く清酒釀造の學理及び實驗法を知らしむるに至れり、又播州龍野に至り、醬油の改良釀造法を講じ、大に其成功を見たり、明治三十一年蒸汽機鑵の內部に附着する固形物を除去する所の解石散の製法を傳授し、之を發賣せしめて諸工場鐵道等の機鑵に應用して利する所少からず、後類似の方法夥多世に出づと雖も、皆三郎の發意を根據として多少の新案を附加せるに過ぎず、三郎西洋の學術未だ開けざる時に方りて、夙に化學に志して之を實地に應用し、世上の工業甚だ幼稚にして、一も學理に基くもの無き時に方りて、斯業の端緒を開き、終始一貫之に力を盡し、我國今日朝野主要の工業、其發見に基きて發達せるもの頗る多數を占むるは、實に偉大なる功績といふべし、明治三十五年七月二十三日、東京芝豐岡町の邸に卒す、享年六十九、三河碧海郡上郷村大字阿彌陀堂の幸福寺に葬り、法諡して秋水院釋淡譽不染居士といふ、（宇都宮氏經歷談、名古屋人物史料）

六　下山順一郎

下山順一郎、犬山成瀨氏の臣健次郎の子なり、嘉永六年二月十八日を以て生る、幼にして

漢學を修め、明治四年貢進生となりて、東京に出でて獨逸語を學ぶ、六年大學醫學部に入りて製藥學を專攻し、十二年業を卒へて製藥士の稱號を受く、翌年大學助教授となり十六年日本藥局方編纂の事に從ふ、同年製藥學研究の爲に、獨逸國に留學を命ぜられ、二十年歸朝して醫科大學教授に任ぜらる、二十三年第一高等學校教授を兼ね、二十六年フキラデルヒヤ藥學大學の名譽教授に推さる、三十二年藥學博士の學位を受け、三十五年高等官一等に陞叙し、同年歐洲各國に差遣せらる、順一郎大學教授たるの傍、東京藥學校長となり、日本藥局法調査委員、藥劑師試驗委員、日本藥劑會理事長、日本藥學會副會長等を兼ね、藥學の爲に盡す所頗る多し、而して漢學に通じ、文章に長じ、兼て泗水を善くす、深く日蓮宗富士派の教を信じ、每朝端坐して佛に奉ずるを廢せず、尤も藥草の栽培を好み、家園に植うるの外、郊外に一地をトし、是好園と號して數百種を栽植し、以て研學に資し、兼て觀娛に供せり、明治四十五年二月十四日從三位勳二等に叙せられ、此日薨ず、享年六十、十五日兩陛下勅使を以て白絹二匹を賜ひ、又祭祀料七百圓を下賜せらる、本所小梅常泉寺に葬り、法諡して叢林院殿一雨日潤居士といふ、著す所藥用植物學、製藥學、製藥化學、有機化學、無機化學等あり。（大山の業、大日本人名辭書增補）

七　八木秀太郎

八木秀太郎は、尾張犬山の藩士八木雖の長子なり、明治六年東京外國語學校に入りて獨逸學を修め、轉じて大學醫學部に入り、十五年を卒へて藥學士となり、陸軍藥劑官に任ず、十八年內務省御用掛となりて、警保の事を考査し、未だ幾ならずして建築事務官に任ず、後內務省に復官し、從六位に叙せらる、征清の役起るに及び、徵に應じて軍に從ひ、役畢りて勳六等に叙し、單光旭日章を授けらる、後宮城、奈良、滋賀、山梨、諸縣の典獄に歷任し、三十年辭して東京に住す、人と爲り廉直にして獨逸語に精通す、是を以て獨逸人に接し、獨逸書を譯すること尤も多くして且つ熟し、人に推重せらる、四十四年の春疾を獲、大正元年六月九日に至りて遂に歿す、享年五十三、名古屋市外覺王山に葬る。（碑文）

八　二葉亭四迷

二葉亭四迷、本名は長谷川辰之助、尾藩の士吉數の子にして、元治元年二月三日江戶の藩邸に生る、明治元年名古屋に移り、八歲の時藩校に入り佛人ムウリエー、及び林欽次に就きて佛語を學ぶ、十一歲父の任官して島根縣に赴くに隨ひ、同地に留ること五年、十五歲の時上京して漢學を修む、明治十四年五月外國語學校に入り露語を學び、在學四年同校の東京

商業學校に合併せらるゝや、其露語科に入り、十九年一月退學す、是より後專ら翻譯著作に從ひ、傍ら英國宣教師ダンバー及び米人イーストレーキ等に就きて英語を學び、以て文學哲學の研究に心を潛む、二十二年八月內閣官報局に出仕し、英露新聞の翻譯を掌り、三十年職を辭し、翌年海軍編輯書記に任じ、三十二年更に東京外國語學校教授に任じ正七位に叙せらる、三十五年五月官を辭し、十月清國北京に入り、京師警務學堂の提調を囑せらる、滯留中清國語を修め、居ること一年にして翌年歸朝す、三十七年三月大阪朝日新聞社の聘する所となり、東京に在りて大阪及び東京朝日新聞の文欄に筆を揮ひ、大に異彩を放てり、四十一年六月朝日新聞社特派員として露都に赴き、幾ならずして神經衰弱症に罹り、不眠に苦しむ、然かも自ら攝養を加へて快愈を期せり、四十二年二月に至り健康衰へ、露醫診して肺病と斷ず、諸人依りて歸朝を勸めしが、四迷頭を掉りて曰く、我が身體は我れ能く知る庸醫の言何ぞ信ずべけんや、自ら藥を求めて之を服て、猶ほ努めて讀書執筆を事とす、偶々梶浦海軍々醫、露都に至り診して大患となし、明々地に之を告げ歸朝を勸說す、四迷尙ほ聽かず依然自療を加へ、且つ通信起草を廢せず、此の如きもの半月餘、病大に進み遂に室內を步行すること能はざるに至る、是に於て意を歸朝に決し、病院に入りて暫時療養を加ふ、四月五日大阪商船會社末永氏の好意に依り、同氏の保護を受け、多少の發熱を冒して露都を發す、四月九日倫敦に着し、直に加茂丸に搭乘し、船中に在りても自ら體溫を驗せしが、紅海に入るに及び氣溫一時に十餘度を加へ、劇變の爲に著しく衰弱し、コロンボに入る頃より病狀一層惡しく、五月十日午后五時十五分、ベルガル灣內北緯六度三分、東經九十二度三十四分の地點に於て船中に歿す、享年四十六、十三日、新嘉坡埠頭を距る三哩餘のパセバンシヤンに火葬し遺骨を東京染井墓地に葬る。其著に浮雲、片戀、筒を枕、エスペラント、其面影、カルコ集、平凡、血笑記、浮草、及び二葉亭全集あり、四迷明治十九年小說浮雲を著して、文名一時に鳴り都鄙二葉亭を知らざる者なし。而して本邦有數の露西亞學者として、露國文學に精通し其名著傑作を翻譯して、能く時好に適せり、晩に東京朝日新聞に揭載せる小說其面影は、傑作を以て稱せられ、平凡、亦之に次ぎて世人の稱揚を博せり、四迷文學小說を以て一世に名ありと雖も、而かも自ら一個の政論家を以て任じ、平居人に對して文學小說を口にするを好まざりきといふ。（大日本人名辭書第七版增補之部、大阪朝日新聞）

第十三　醫學　本草

一　賀島道圓　子道圓

賀島道圓、名は東和、永壽院と號す、其先は駿河賀島村の人なり、道圓、曲直瀨道三に學びて醫に精しく名古屋道三の稱あり、寛永八年尾張侯義直、召して醫師となし俸を賜ふ、後采地三百石を賜ひ、慶安元年又百石を加ふ、人となり多能にして柳生如雲齋に學び頗る兵法に達し、又千宗旦に茶儀を受けて名あり、且つ禪に通ず、年八十六に及び殿中杖頭巾を用ふることを許さる、依りて常に藜杖を用ふ、乃ち其像を畫かしめ自ら歌を題して曰く、

佛には我と知らずになるものを心もしらず有明の月

と、又養生和歌百首を作る、寛文十一年八月二十九日歿す、享年八十七、大林寺（中區南桑名町）に葬り、永壽院東和道圓居士といふ、子に關庵あり、玄伯と稱す、光友世子たる時、召されて醫師となり、萬治三年七月二十一日先だつて歿す、養子道圓繼ぐに及びて、人東和を呼びて古道圓といふ。（士林泝洄、書畫、墓碑）

賀島道圓、名は盛辰、初め玄喜と稱す、小島彌次右衛門の男なり、東和養ひて子となす、光友の時、召されて醫師となり俸を賜ひ、後更に俸を加へられ、遂に食邑三百石を賜ふ、齊を善

くして法橋に叙せらる、元祿十一年十月二十九日歿す、大林寺に葬り、墓に題して善應院前法橋通貫道圓居士といふ、子孫世々藩醫たり。（士林泝洄、墓碑）

二　大田什安

大田什安、初め竹庵と稱す、名は秀成、養氣軒と號す、其系桶氏より出づ、正儀の曾孫隼人秀成、伊勢國司北畠氏に屬し、邑を安濃郡大田村に食む、因りて大田氏と稱す、六世の孫秀秋、利庵、又道益と稱し、醫に志して其術を研磨す、初め清須に住し、後名古屋に徙る、寛永十三年三月六日歿す、什安は其子なり、性學を好み、手寫する所の書冊若干あり、特に醫學を嗜み、日夜研磨して怠らず、遂に良醫の名を得たり、延寶四年九月十一日、尾張侯光友擧げて醫師となし、祿二百石を賜ふ、翌年十月廿六日法橋に叙せらる、元祿十三年二月廿一日致仕し、十五年七月十七日歿す、享年八十六、政秀寺（中區矢場町）に葬り、墓に題して前法橋養氣軒無物安貞居士といふ、子孫世々藩醫たり。（士林泝洄、大田氏系譜、墓碑）

三　淺井周迪

淺井周迪、名は正仲、（初名包政）東軒と號す、周迪は其通稱なり、父策庵（名正純、稱周璞）京に在りて醫を以て名あり、周迪、享保十年十二月、尾張侯藩友の聘に應じ、名古屋に來り醫を以て始て仕へ、祿

四百石を食む、之より子孫相次で尾張の醫官たり、周迪寛文十二年三月廿二日を以て生れ、寶暦三年七月廿五日歿す、享年八十二、城南常德寺（中區新榮町四丁目）に葬る、著す所病機撮要、本草摘要等あり、子圖南家を續ぐ、門人に御薗中渠あり。（淺井系圖、墓碑、小治田之眞清水）

四　淺井圖南

淺井圖南名は惟寅（初名、政直）、字は夙夜、幼名冬至郎（一に藤五郎）後周北と稱し、又賴母と改む、圖南は其號にして、別に幹亭、篤敬齋の號あり、父は東軒、母は三谷氏、寶永三年十一月十三日生る、圖南、幼にして慧ならず、人呼んで白癡となす、自ら箕裘を繼ぐ能はざるを懼れ、才藝を得むことを北野社に祈り、月毎に拜して未だ曾て懈らず、既にして才學日に進み、敏慧强記、精力人に絶す、而して勤苦書を讀み、上素靈より、下李朱の書に至る迄、其奥を究め、其粹を拔く、歳二十一、東軒尾張侯に仕へ、圖南をして己に從はしめむとす、圖南肯かず、東軒固く之を强う、圖南決然辭して曰く、我祖策庵業を京師に起してより殆んど百年、海内の醫人、來り學ばざるなし今一旦父子東せば、其業を絶たむ、亦惜しからずやと、乃ち京に留りて、舊廬を守り、是より亦一錢の給を東軒に仰がず、既にして、醫徒稍々集り、聲名籍甚、終に祖業を張る、其志操の凡ならざること此の如し。

圖南の術、素難倉公に原き、折するに仲景を以てす、嘗て曰く、內經既に言ふ所、仲景略して論せず、內經未だ盡さゞる所、仲景演べて之を詳にす、旨實に相埃て相背くに非ず、近ごろ僧父あり、語言を造作し、仲景を主張して、而して其本を究めず、素難を貶斥して以て迂誕と爲す、無識の者其聲說に眩惑し、互に相附和す、古經の微玄熄むに近し、良に歎ず可きなりと、蓋し、香川吉益の二氏を斥するなり。

圖南、本草を松岡恕庵に學び、又先醫の不文に鑑み、依て志を勵まして文章を田親長に學ぶ、其作る所範を韓柳歐蘇に取り、上秦漢に泝りて之を潤色す、其京に在る友人石川鱗洲、宮崎筠圃と互に相切磋す、又墨竹を畫くに志し、初め運筆を望月玉蟾に學ぶ、後其俗習あるを厭ひ、專ら法を華人の眞蹟と諸家の竹譜とに取る、出入數年風格大に備り、遂に其妙を得、筠圃及山科李溪、御園中渠と與に平安四竹と稱せらる。

寶暦三年、圖南歳四十八、父東軒歿す、尾張侯宗勝聘して父の業を嗣がしむ、九月圖南京より至る、是に於て四方の學徒笈を負ひて名古屋に集り、家塾之を容るゝ能はざるに至る。

圖南、既に文章に長じ、詩賦を巧にし、傍ら連歌、俳諧より歌の典故、釋老、鬼神の義に至る迄通せざる所なし、其後進を誘掖する、惓々老に至つて倦まず、人の其書を借らん事を乞ふ者

あれば、帳中の秘と雖も推與して之を讀ましめ、毫も吝色なし、其人材を奬成するに意を用うること大抵此に類す。

圖南人と爲り、簡約にして眞率、敦實を好み、菲薄を賤み、人に接するに城府を設けず、之を以て騷人墨客、往々就て正を乞ひ、推して宗匠と爲すといふ、天明二年八月五日歿す、享年七十七、常德寺（中區新榮町四丁目）に葬る、圖南平松氏を娶り、三男一女を生む、長男正路善く業を繼ぐ、先つて歿す、二男良範、通稱源太、南涯、又如水と號す、大叔父法橋淡河南齋の後を嗣ぐ、三男藤次早く夭し、女與貴は、義子正準の妻となる、著す所扁倉傳割解二卷、家脉話柄、篤敬齋文稿五卷、詩集、歎餘草二卷、發句集一卷等あり（墓碑、淺井系圖、尾張名家誌二編、皇國名醫傳、篤敬齋文稿、小治田之眞清水、扶桑畫人傳）

五　淺井周碩有隣

淺井周碩、姓は和氣、名は正路、字は由卿、幼名を藤太といひ、後周碩と稱す、號は朴山、又南溪、圖南の長子にして、母は平松氏、享保十九年十一月十八日生る。

正路、醫を以て天朝に仕へ、正六位上、內舍人に至る、是より先、祖父東軒、父圖南、俱に尾張侯の醫官となる、之を以て正路亦安永九年三月九日、官を辭して、尾張侯宗睦に仕へ、父の職祿を繼ぎ、名を周碩と賜ふ。

周碩、脉法に通じ、診脉の祖と稱せらる、其尾張に來りしより、醫藥大に行はれ、弟子日に進む、未だ幾ならずして、天明元年十月十三日を以て歿す、享年四十八、城南常德寺（中區新榮町四丁目）に葬る、著す所、諸家經驗方、內證診法、方訣脉論等十數卷あり、男正時京都に留りて天朝に仕ふ、因て姪正封を以て祀を奉ぜしむ。（墓碑、淺井系圖、尾州諸系圖集十ノ七七、小治田之眞清水、皇國名醫傳）

淺井有隣、名は正時、字は士敏、有隣軒と號す、通稱は小源太、後に紀伊守と稱す、安永二年京師に生れ、醫を以て天朝に奉仕し、正六位下內舍人と爲る、人と爲り沈默にして才學あり、儒を中井竹山に學ぶ、後病を以て職を辭し、潛に名古屋に來りて痾を養ふこと二年、寛政十年六月十九日を以て歿す、時に年二十六、常德寺に葬る、京都妙滿寺中にも亦墓碑を建つ、蓋し當時法に於て官人の長く諸侯の國に留るを聽さず、故に其人歸後歿するに擬し、權りに葬事を營めるなり。（墓碑、常德寺過去帳、淺井氏家譜大成）

六　淺井茅渟

淺井茅渟、名は正準、字は子的、通稱的之進、茅渟と號す、和泉貝塚の醫新川典膳孔嘉の第三子なり、其母、人の的を與ふと夢みて孕めるあり、延享二年五月十九日を以て茅渟を生む、依て的之進と名く。

茅渟、淺井圖南に學び、醫を好むこと其天性に出づ、圖南其女を娶はして義子と爲し以て

家を嗣がしめんとす、人と爲り外柔にして內剛、心手相應じ、死を起し、骨に肉する枚擧すべからず、凡府下に於て良醫を數ふる者、先づ指を茅渟に屈す、之を以て遠近病を抱く者、咸く來つて治を乞ひ、業大に行はれ、殆んど肩輿を出るの暇なきに至る、故に資財餘裕を生ぜるを以て、前津の別墅及び八事山東の候潮山を購ひ、圖南の老情を慰む。

茅渟、陸王の學を好み、又詩を善くし、傍ら書畫に及ぶ、安永四年十二月圖南將さに老を告げんとす、會々茅渟病あり殆んど危急に瀕せるを以て果さず、明年春茅渟病愈ゆ、六年正月病再び發し三月七日に至りて遂に歿す、享年三十三、城南常德寺先塋の次に葬る、天若し年を假さば醫家の冠冕たるを疑はず、不幸短命にして歿す、人深く之を惜む、子一男一女あり、男正封祀を奉ず。（墓碑、淺井系圖、淺井氏家譜大成）

七　淺井貞庵

淺井貞庵、名は正封（まさとし）、字は堯甫、幼名は小藤太、後平之丞と稱す、貞庵は其號にして、別に櫟園、靜觀堂、文燭亭等の號あり、父は正準、母は圖南の女、名は與貴、明和七年十月一日を以て生る、幼にして聰明、耳目の觸るゝ所未だ嘗て忘れず、祖母其銳敏に過ぎ、夭折せんことを憂へ、城南住吉の天神祠（祭神少名彦神）に才智の半を獻じて壽を禱る、八歳父母を喪ひ、祖父圖南に養はる、天明二年圖南も亦歿す、依りて孫を以て祖を承け、祿二百石を襲ひ藩醫となる、時に年十三なり、特に命ありて家學を精勵し、父祖の業を繼ぐべきを以てす、藩又圖南の門人、村上見善、山崎專三（後眞人）に命じて、代りて學徒に教授せしむ、是に於て貞庵京に入り、醫を學ぶこと七年、天明八年鄉に歸り、始めて堂に升りて書を講じ、躬から學生教養の任に膺る。

寛政九年其家業に熟すると、教育に力を用ふること厚きとを賞して祿二百石を加賜す、翌年脉法の久しく傳を失ふを以て、河田倉部を薦めて之を教授せしめ、貞庵之と討論講習すること數年、遂に其奧妙を究む、十一年命を承けて始て藩醫の子弟の學業を試み、以て登庸するの制を定め、爾後每歲春秋二回、藩の用人屬吏を率ひて淺井氏の第に臨みて之を行ふ、又市井醫業を開かんとする者あれば、市井の事を執る者、或は醫師取締試業を行ひ、之を用人若くは奉行に上申して而して後に之を許す、皆淺井氏の統ぶる所なり、同年十二月屠蘇三藥を藩主に奉るの例を開き、是より每年十二月十五日を以て之を進む、尋いで奧醫師に陞り、仍ほ學生教育の事に當るを以て更番當直等の事を免す、是より先寛政六年近隣火を失し家室堂宇灰燼に委す、官作事奉行をして監造せしめ、其費皆公に出づ、時人之を榮とす、貞庵人となり溫潤にして度量あり、博學多識、凡百の技藝通ぜざる所なし、最も程朱の學を好みて、業を中村習齋に受け、易、太極の奧を究む、又漢唐の文辭を岡田新川に學び、礒谷淦洲、河村乾堂、奧田鶯谷と相親し、弱冠にして命を奉じて、村上見善、山崎專三等と共に古方書を撿究して尾藩禁方集成七十五卷を撰し之を納る、乃ち白銀の賞あり、大素經、新修本草は

宋後亡逸して世に出でざること久し、偶々貞庵の友東遺策といふ者あり、京に住して醫を業とす、仁和寺寶庫の秘書に大素殘本二十二卷、新修本草五卷あるを聞き、密かに請ふ所ありて稍く覽ることを許さる、之を觀るに仁平仁安の間丹波憲基、賴基等の傳寫せる所にして殆んど七百年前の古寫なり、道策之を貞庵に報ず、貞庵依りて門人冢原修節、及び僧英山をして京に赴かしむ、然るに繕寫容易ならず、乃ち切に請ひて携へ歸り、一月を出でずして謄寫して之を還す、是に於て醫家の至寶とする所のもの始めて世に出づ、文政十二年二月二十二日歿す、享年六十、常德寺（中區新榮町）に葬り、智境院貞庵日靜居士と法諡す、其門に學ぶ者三千餘人に上り、他邦より來りて葬に會する者三十餘國に及ぶ、著す所、醫學錄、物產志、醫門小學、三續私抄、課試問答、周禮醫師講義、身醯名、稟賦名、藏府名、孔穴名、充華名、氣名、神志名、精液名、經絡名、天地名、色葉本草、校刻醫家千字文、大極圖說講義、中庸講義、易經講義、脉鑑、醫經發端義、藥性和解、方彙發端義、古之人、本朝名醫傳略、醫書筆記、貞庵隨筆、等三十四部、二百三十卷、別に本朝千家方三千卷、同續添五百卷あり。（淺井氏家譜大成、名古屋人物史料、尾張名家誌二編、常德寺過去帳）

八　淺井紫山

淺井紫山、名は正翼（まさしげ）、字は亮甫、紫山、又希聖齋と號す、小字は桃太郎、後董太郎と更む、貞庵の長子なり、寛政九年三月三日生る、年壯なるに及びて江戸に遊び、昌平黌に入りて古賀精里に從學す、文政十年家學に精熟せるを以て寄合醫に擢でられ俸十口を賜ふ、十二年父の祿二百石を襲ひ、且つ家格を以て番醫の班に列す、天保二年門下教養の功を以て祿二百石を增し、六月靜觀堂講舍を改めて醫學館と稱し、藩主齊莊扁額を賜ふ、三年奥詰醫師を拜し、尋いで藥園奉行を命ぜらる、十四年命を承けて施藥救貧病の事を統轄し、嘉永元年奥醫師に進む。

紫山人と爲り大度豁達にして小節を顧みず、博學篤志、素靈を推明するを以て自ら任ず、又詩を好み、畫竹を善くし、名遠近に聞こゆ、其素靈に於ける、幽を發し、隱を索め、多く前賢の未發を發す、世俗に所謂る古方家なるもの起りて以來、海內素靈の學絕え、而して眞古の醫學熄む、紫山父子起て之を救ひ再び古に復す、大醫令丹波氏亦た依賴す、貞庵の本朝千家方を編輯する紫山與りて力あり、貞庵門人三千餘人と稱す、紫山職を繼ぐに及び、來りて業を受くるもの、歲每に五七十人を增し、門下及び賓客の出入するもの日に百人を下らず、尤も隆盛を極む、又每年六月十日、動植鑛の奇品、竺支西洋等の產物を蒐集して衆庶の覽に供す、稱して醫學館藥品會といふ、遠近爭ひ來り觀る、亦一偉觀なり、安政元年故ありて奥醫師を免じ、寄合醫に貶し、加祿二百石を削らる、三年九月致仕を請ひ、萬延元年正月八日（實は三日）歿す、享年六十四、常德寺に葬り、嵯然院紫山日恭居士と法諡す、編する所に靈樞雜經、傷寒論、金匱等の定本あり。（淺井氏家譜大成、尾張名家誌二編、常德寺過去帳、尾張名所圖會）

九　淺井樺園

淺井樺園、名は正贊(まさすけ)、字は思文、九皐と號す、小字は吉太郎、後儀一郎と稱し、又樺園と更む、紫山の長子なり、文政十一年九月五日生る、年甫めて六、奥田鳳文に從學し、又三村蒙庵、石川忠次、深田香實、村瀬太乙等の教を受け、脉學を河田壽安に學ぶ、年十四醫學館例試の對策に甲科を得、二十に及びて醫學館代講を命ぜらる、嘉永六年、小森典藥頭の請に依り、樺園に命じて京都に往き、醫心館に醫書を講ぜしむ、翌年寄合醫に擢でられ俸七口を賜ふ、尋いで紫山に代りて醫生教育の任に膺る、紫山放逸客を好み、酒色に耽り負債山積す、其職を免し祿を削らるゝや、家政頗る窮乏に陷る、樺園堅苦、誓ひて父の耻を雪がんと欲し、黽勉努力して教授に是れ務む、此に於て門人競ひ進み、家聲復た盛なり、安政三年祿二百石を襲ひて家を繼ぎ、翌年勤勞を以て奥醫師格に進み、祿百石を加賜す、元治元年藥園奉行となり、慶應二年又祿五十石を加賜す、明治二年に至りて醫學館の廢せらるゝや、一等醫、漢學二等助教、小學校教授等となり、四年十一月知多郡に徙り、中島村小根、及び大野に在りて醫を開く、十二年聘せられて名古屋博愛病院の講師となり、十五年其分院を三河學母に設くるに及びて往きて寓す、尋いて又分院を大濱に開くに及びて之に移り、十六年十二月廿六日其地に歿す、享年五十六、常德寺に葬り、良善院樺園日性居士と法諡す、門下殆んど千人、著す所博愛心鑑序註、舌診考、毒箭治方、素問口訣、靈樞口訣、傷寒論口訣、金匱要略口訣、方臺口訣、鍼灸治驗、璟間紀聞、璟間紀聞二編、瑛間紀聞、九皐漫錄、靈樞窺、樺園漫錄、摘疑錄、精神元舍非頭腦之說及魂魄功用說、聲括本草、萃說、爲不知錄、九皐手抄、舌耕餘事、校正脾胃論、塵垢囊、續塵垢囊、醫事藪、續醫家千字文、澤地抄、新註日本外史、九皐文稿、御風樓漫筆、雜記、素問記、九皐漫抄、九皐叢書、雜纂、入京紀行、身體和名集、詳學新抄、私記一得、九皐詩集、等あり。（藩士名寄、淺井氏家譜大成、常德寺過去帳）

一〇　淺井篤太郎

淺井篤太郎、名は正典(まさつね)、字は士廸、國幹、淡海、獨善庵等の諸號あり、初め德太郎と稱し、後篤太郎と更む、樺園の長子にして嘉永元年十一月朔日生る、年甫めて六、句讀を父に受け、又奥田大觀に學ぶ、而して十歲に至るも、受業の書一字を記憶することなし、樺園之を憂へ、一日膝下に召して苦ろに訓誡し、父祖の業を失墜せざるを以てす、是に於て翻然として悟り、發憤勵精、家學を攻むるの暇を以て、古學を冢田謙堂に學ぶ、既にして轉じて程朱の學を中山梅軒、細野要齋に學び、脉法を河田春意に受く、而して專ら大學を自修すること二年、略ぼ醫學の全體に通じて儒道の大要を得たり、是より儒醫の二道を專巧し困學琢磨すること年あり、名藩内に聞ゆ、慶應二年藩命ずるに醫學館代講を以てす、明治二年醫學館の廢せらるゝに及び、藩學明倫堂に入り、幾もなくして漢學二等助教試補に擢でられ、兼ねて塾舍を監督

す、後漢學二等助教、中學二等助教となる、時に教科書中西洋の學を加ふるを以て之に快からずして遂に其職を辭す、乃ち居を知多郡中島村に移して醫を業とし、九年三月再び名古屋園井町の舊邸に歸り、又醫術を行ふ、一日書を縣令安場保和に呈じて漢醫繼續の事を論ず、而して其の納れられざるを察し、蘭蕪學校を立てて、孔朱の學を教授す、後改めて尙絅學舍と稱す、十二年一月舊門下の諸醫、及び縣內の漢法醫三百人を糾合して博愛病院を立て、推されて其社長となる。

篤太郎居常皇漢醫學の道統を傳ふるを以て念となし、檄を天下に飛ばして同志を募り、屢々書を內務省に上りて請願する所あり、又元老院に請ふて興道の事を以てす、而して一も省みられず、此間官に請ひて專門皇漢醫學校を設け、又和漢醫學講習所を置き、東京溫知病院等を創設す、廿一年九月第六皇女常宮の生誕したまふや、宮內省診御脉を命ず、尋いで御養育法の改革に伴ひて其職を解かれ、金若干を賜ふ、帝國議會の開かるゝや、全國の同志と策應して請願書を呈すること二十餘通、署名の人員十萬に至る、篤太郎皇漢醫道復興の爲めに心力を傾注すること十有八年、百難を冒し萬苦を嘗め、東西に遊說して維れ日も足らず、全國の漢醫其名を知り其志を慕ひて皆之に依賴す、明治三十六年一月十五日、東京に歿す、享年五十六、遺骨を常德寺に葬り、正德院國幹日耀居士と法諡す。（藩士名寄、淺井系圖、名古屋人物料）

一一　竹田三益

竹田三益、名は弘益、字は泰明、子龍と號す、通稱は三益、初玄春と稱せり、祖父兒島恕庵醫を業とし、本多甲斐守に仕ふ、恕庵七子あり、五子元庵、外姓を冒して竹田と稱し、播磨宍粟の本多氏に仕ふ、之を三益の父と爲す。

三益、壯歲江戶に出でて幕府の講官人見鶴山に師事し其家塾に在ること數年、業大に進む、又醫を井上玄徹の門に學ぶ、玄徹は幕府の醫官にして、交泰院法印と稱し神醫の稱ある者なり、從遊數年業成りて世に行はる、元祿十三年尾張侯の聘に應じ、松壽院夫人光友の側室勘解由小路の侍醫となり、祿二百石を食む、寶永二年夫人卒して、表醫師となり、正德五年祿百石を加へらる、享保十年致仕して、家を子三碩に讓り、同二十年五月二日を以て歿す、首題寺中區東橋町に葬り、法諡して貞巖院益亭倪弘居士といふ、其行餘述ぶる所の詩文、題して行餘感興集といふ。（系譜、鑒定便覽、弊帚集餘編、墓碑、大日本人名辭書、人見泰文紳）

一二　竹田三碩

竹田三碩、名は德固、字は三碩、省齋と號し、翠竹院と稱す、元祿九年九月十三日、播州に生る、幼にして尾張に來り、從父三益に從ひて醫を學び、方典を讀むこと日に數千言、學成りて術

亦精し、遂に三益の嗣となり、享保十年祿三百石を襲ひて、尾張侯の侍醫となる、聲譽籍甚、其處方療病、奇效枚擧すべからず、寶曆十二年三月首疾を患ひ、四月に至りて疾大に漸み、遂に十三日を以て歿す、享年六十七、首題寺先塋の次に葬る。（墓碑、系譜、榮國寺碑文）

一三　高橋玄仙

高橋玄仙、名は勝俊、寛濟軒と號す、玄仙は其通稱なり、父を瀨左衛門勝盛といふ、兒玉氏の女を娶りて、延寶七年四月八日、玄仙を伊勢度會郡一之瀨村に生む、玄仙幼より志を醫學に專らにし、後居を尾張に移す、享保四年十二月、國侯繼友召して醫官となし、俸八十石を賜ふ、五年采地三百石を賜ひ、七年又五十石を加賜す、殊恩優渥なり、元文四年七月十三日、江戸の官舍に歿す、享年六十一、四谷太宗寺に葬り、慈眼院無醫還仙居士と法諡す、門人等仰慕して止まず、其髮爪を大林寺（中區南桑名町）に埋め碑を建つ。（碑文、士林泝洄續編、大林寺過去帳）

一四　三村森軒

三村森軒、名は陳富、森軒は其號なり、初め平藏と稱し、後幸八と改む、佐々平馬成基の男にして、藩主吉通の命に依り、三村陳堅の養子となる、陳堅本氏は村瀨養健と稱し、茶道頭並たり、寶永五年十一月九日、吉通の命に依りて還俗し、家紋を賜ひ、三村と稱す、後側右筆、奥番等に歷職し寛保二年三月廿七日歿す。

森軒、初め勝手番に召出され、俸十八石を給ふ、正德元年奥番並に遷り俸を增され、三年奥番に進み、復俸を增さる、吉通薨後、書請寄合たること廿三年、元文元年藥園を掌ることを命ぜらる。

森軒、平生好んで本草を讀み、凡本草に關するの書、上古より歷代諸名家の說に至る迄尋窮せざるはなし、故に華夷の產物群品、悉く討論して其正を極め、詳に之を記す、又種樹培養の方に至る迄其精を探り、老蘇駝と雖も能く及ぶことなし、之を以て世推して和漢藥石の鑑賞家となす。

延享二年八月八日、藥園管掌の功に依り、采地百石及五十石代を給ふ、寶曆十二年十一月三日病で歿す、享年七十二、城南照運寺（中區新榮町四丁目）に葬り、法諡して直翁雄心居士といふ（碑文、士林泝洄續編、照運寺過去帳）

一五　松井壽安

松井壽安、名は直保、字は壽安、惇齋と號し、別に雪堂主人と呼ぶ、奥田直光の長子なり、母は松井氏、元祿十六年癸未三月廿日を以て、尾張葉栗郡北宿邑に生る、其先は甲州の人にして武田氏の裔たり、壽安に至りて外姓を冒して、松井氏を稱す、醫を高橋玄仙に學び、寛保中大

津町に住して治療に從ふ、

壽安至性篤行、溫順にして文を好み、善く醫事に勤む、常に櫻花を愛し、嘗て千株の櫻樹を八琴山に栽ゑて、都人遊樂の地となし、又櫻の句を四方の雅人に請ひ、一卷となして序を横井也有に需め、之を興正寺に納む、明和八年辛卯十月十五日歿す、享年六十九、本立寺（東區小川町）境地に葬る。（墓碑、醫家姓名錄、鶴衣續編）

一六　伊藤玄澤

伊藤玄澤、名は茂臣、字は子良、心齋と號し、其居を再生堂といふ、父道清、美濃高須に在りて醫を業とす、玄澤初め祐專と稱し、享保九年十一月名古屋に出でて、醫を兒玉玄侗に學ぶ、時に年十五なり、玄侗の家に在ること十年、業成りて居を、伏見町四丁目にトし、（後御園町に住す）改めて玄澤と稱し、門戸を開く、人と爲り敦厚、母館氏に事へて、善く孝養を盡くす、而して自ら奉ずること極めて薄し、又親戚朋友の急に遇へば、之を賑はして毫も德とする色なし、其人を療するに至りては、丁寧深切、病劇しきときは、枕に坐して之を守り、盡日徹宵懈倦あるなし、貧家請する者あれば、風雨を避けず、曉夜を問はず必ず親ら往き、其衣食に窘むを視れば、必先づ之を予へ、而して後貴藥賣劑、症に從ひて投ず、治を乞ふ者日に益々多くして、然も竟に醫藥の報を問はず、依りて人稱して再生堂といふ、貧民、行旅の病者皆來りて療を求む、延享三年玄澤又僻陬の民の醫に賴ること能はざるを憫み、丸散藥を製して弘く之を施す、

寶曆五年十二月藩主宗勝聞きて其行を美とし、歲毎に黃金三十兩を給ひて藥資を助け、永く施藥を行ふことを命ず、是に於て玄澤施藥の二字を大署し、河村秀根に囑して文を作らしめ之を門頭に揭げて以て病者を待つ、

施　藥

右はその身至てひんにして、びやうきのせつよるべもなく、くすりを用ひ候事も心にまかせざる人に、近來藥をほどこし來り候、然處此度上よりも藥種料御めぐみくだされ候條、いよ〳〵遠慮なく、施藥のぞみのびやう人まいるべく候、そのうち大びやうあるひは歩行かなはざるびやう人、ちかきところへは見まひ可申候、遠方にて見せ候事なりがたきものも、くわしくやうだいをきゝ、やうすしだひくすりをあたへ可申候

但右のとをりのひんじや、せやくをたのみ來り候においては、小兒のわづらひ、目のわづらい、はれものゝるいにても、りやうぢいたしつかはし候事

雲水の出家衆、並くわい國じゆんれいしゆ、しゆぎやうじやのたぐひ、これまたせやくいたし候間、りやうぢのぞみの方は御こしあるべく候

再　生　堂

伊　藤　玄　澤

寶曆乙亥十二月

玄澤益々施藥に務め、遼遠の者も亦之を聞きて至り、由りて以て生を全うするもの歲毎に千を以て數ふ、翌年用掛の命あり、八年謁を賜ふ、安永七年十二月其多年の功を賞して俸五口を賜ふ、玄澤、中西淡淵と相善し、淡淵嘗て細井平洲に告げて曰く、顧はくば善く我が紀生を視よ、吾れ唯其疾を之如きは得易からずと、又玄澤に謂ひて曰く、顧はくば善く我が紀生を視よ、吾れ唯其疾を之れ憂ふと、此より平洲、玄澤に親賴して、後常に書問を絶たず、安永八年七月二十一日歿す、享年七十、淨信寺（西區花車町）に葬る、子孫相繼きて施藥を行ふ、第一元、字は吉甫、冠峰と號す、淡淵に學びて儒を以て名あり、晩に美濃笠松に住す、二子長は春澤、名は茂樹、字は子德、采眞と號す、家を繼ぎて亦玄澤と稱す、享和二年二月十八日歿す、享年六十一、次は墨海、傳書家部にあり、（碑文、嚶鳴館遺稿、醫家姓名錄、尾張名所圖繪、可見都益志）

一七　藤　蘭宇

藤蘭宇、名は彝、字は天民、佩蘭齋と號し、一に香雪と號す、通稱は蘭宇、名古屋本町の人なり、蚤歲醫を成瀨氏の侍醫小林敬義に學ぶ、然も常に大志を抱き、吏僚商賈の間に居るを嫌ひ、乃ち京に入りて、伊藤東涯を師として儒術を究む、居ること數歲、慨然として自ら謂へらく、儒は其奥を究むと雖も、これを國家に施すこと能はずんば效なし、如かじ醫を學びて民の疾を救はんにはと、遂に志を勵して山脇東洋の門に入り、其蘊奥を究め、古今の方を折衷して、別に自ら一家を成す、鄕に歸りて業を開くに及び、名忽ち四境に達し、治を請ふ者門に滿つ。

延享三年移りて長者町に住む、遠近の諸侯禮を厚うして之を聘す、蘭宇人となり俶儻不羈、當世に售らんことを求めず、亦權豪に屈せず、其病を視る、貴賤貧富一の如し、人皆之を景慕す。

寛延元年韓使來朝す、蘭宇用掛を命ぜられ、鳴海驛に至り事を執る、後明和元年韓使復來朝し、府下性高院に館す、蘭宇往きて筆語唱酬す、會々韓人金某疾あり、官命に依りて之を療し、速かに癒ゆ、藩侯宗睦の生母英巖院俄に病む、諸醫爲す所を知らず、夜半急に蘭宇を召して診せしむ、蘭宇醫案を書し、侍醫に附して歸る、官命じて數日の間蘭宇の外出を止め、急に備ふ、既にして病忽ち癒ゆ、凡死を起し生に回す、枚擧すべからず、遠近之を傳へて從學する者甚だ衆し。

寶曆六年藩侯謁を賜ふ、七年京に入り法橋に叙せらる、寛政七年官蘭宇醫療の功多きを以て用人支配と爲さんとす、時に蘭宇已に退隱せるに依り之を辭す、依て賞を賜ふ。

蘭宇、醫務鞅掌の中に在りて、心中綽々として餘裕を存し、暇あれば琴を抱き童を携へ、水樓に月を賞し、山房に花を愛し、風流蘊藉、世と相遣る、齡六十に垂んとする比髮を除き、禪を愛して、黃蘗に登り方外の遊を爲して晏然自ら娛む、後廬を上野山中に結び、日に琴を彈じ、

書を讀みて以て老を養ふ、耳目聰明、鬚髯雪白、瞿鑠として仙の如し、寛政七年八月二十五日、壽七十八にして歿す、東輪寺（中區下茶屋町）に葬る。（墓碑、醫家姓名錄、門人加藤文中寄言、尾張名家誌二編、）

一八　山岡恭安

山岡恭安、其字號を詳にせず、尾藩の人にして居を伊勢に移す、著す所に本草正々譌あり。（尾張名家誌二編）

一九　杉山玄洞

杉山玄洞、名は惟敬、玄洞は其通稱なり、松平君山に從學し、著す所に本草正々譌刊誤あり。（尾張名家誌二編）

二〇　服部艸玄

服部艸玄、名は宏、字は子達、石邑と號す、艸玄は其通稱なり、愛知郡石佛村の人なり、五世の祖善昌、織田信長に仕へて、其將佐久間信盛に屬す、信盛罪を得て逐はるゝ後、善昌此地に退隱し、田を墾きて農耕を業とす、民來附して遂に一聚落をなす、地に大石佛あるを以て因りて村の名とす、三世を經て秀政に至り、諏訪部氏の子政乘を養ひて嗣がしむ、之を艸玄の父とす、男子三人あり、長は長方、諏訪部氏に復して國老成瀨氏に仕ふ、次は介、出でて中村氏を嗣ぐ、季は即ち艸玄なり。

艸玄、初め儒を中西淡淵の門に學ぶ、後醫に志し業を渡邊壽伯に受く、壽伯其才を奇とし悉く禁方を授く、年二十六京師に遊學し、松岡恕庵、香川秀庵、山脇東洋、吉益東洞の諸名家を問ひて、其學を研究し、發明する所多し、業成りて歸るに及び、從學する者日に多きを加へ、四隣の國、病者を輿して來りて治を乞ひ、良醫の名一時に喧傳せらる。

寶曆十一年、藩主宗勝病篤し、始めて召され病を診し銀三十枚を給ふ、翌年宗睦十人扶持を給し、章善院の病むに及び、之が侍醫たらしむ、章善院薨ずる時、其葬儀に與り、尋で銀三十枚を給ふ、時に以て殊恩となす、後奥醫師に進み、屢々江戸に從駕し、又大夫人の病に侍し、累りに祿を增し、三百石に至る。

初め寶曆十三年、藥を天朝に獻じて法橋に叙せらる、安永三年再び藥を獻ずるを以て法眼に昇叙す、艸玄、人と爲り謹恪溫和、其病を療する貧富貴賤となく、親疎する所なし、其朋友と交る、怡々として杯酌の間詩文を應酬し、欣然彼我を忘る、其職に在る二十有七年、未だ一日も廢失することあらず、細井平洲の尾張に聘せらるゝ、艸玄其同門の友たるを以て人見璣邑の命を承けて、專ら其周旋の勞を執れり、天明七年四月晦、病みて歿す、享年六十三、石佛村善昌寺に葬る。（櫻鳴館遺稿、張城人物志）

二　小見山順友

小見山順友、通稱は宗法、春倫子と號す、祖吉久曾て淺野幸長に仕へ、高原夫人の陪臣となりて始めて尾張に來る、其子吉政祝髮して道休と稱し藩の侍醫となり、子孫世々藩に仕ふ、吉政の弟宗法、業仕することを願はず、家居して醫を業とす、尾張侯光友殊に眷遇して烏犀圓の方を賜ひ、泛く國中の民庶に施し、且つ官符を給ひ、施藥者をして郡縣を經歷し往來自由ならしむ、蓋し殊恩なり、順友は其孫にして、享保十年八月十日府下玉屋町の家に生る、人と爲り溫潤清雅、人貴賤となく善く之を遇し、遂に忤色無し、醫を善くして學を好み、松平君山に從遊すること年あり、博物を以て務となし、每月八日君山を其私亭に請し、諸子を會して本草の講を聽くこと、連年懈らず、且つ滑稽を好み、時に佳句を裁して人口に膾炙す、安永五年十一月十一日歿す、享年五十二、西光院中區白川町に葬り、憲章院透山宗關居士と法諡す、（墓碑）

三　山碕眞人

山碕眞人、名は克明、字は士敏、通稱專三、九皐と號す、尾藩伶人の後なり、父は壽朴、醫を業とす、母は鈴木氏、享保二十年乙卯四月十九日生る、人と爲り直にして敏、豁達周詳、頗る古人の風あり、幼にして孤となり、醫を淺井東軒、圓南父子に學び、儒を小出愼齋に學びて、皆其蘊奥を究む、後業を開き、藥を施し方を講じ、夙夜懈らざること三十年、名望頗る高し、天明五年京に入りて法橋に叙せらる、

寛政三年、擢でられて藩の寄合醫師となり、俸七口を給せらる、屢々藩主戚族の病を療し、又民間醫藥の事に功あるを以て、賞を受くること數次なり、享和二年歳六十八、致仕して眞人と改め、其舍に名けて恬淡居といひ、專ら著述を以て事と爲す、藩命に依り尾藩禁方集成七十五卷を撰し、又聖惠方百卷、聖濟總錄二百卷を校して進む、其他纂述校訂する所幾んど三百卷に及び、間々世に行はるゝもの有り。

黃鍾錄は、醫に關する名數を網羅せるものにして、初め海西郡の醫生佐藤文杏といふ者、來りて醫學館淺井氏に學び、受業の餘暇草する所なり、稿を起すこと僅にして文杏家に歸る、眞人之を惜み、遂に暇日を以て家藏の方書を檢し、大に之を益加して遂に二卷となし、梓して世に行ふ、眞に緒餘の一事業といへども、亦以て眞人の學に遠く聞に博きを窺ふべし、

淺井氏の醫學館は、醫學の淵叢にして、遠近の學徒笈を負ひて來り學ぶ者常に家に滿つ、圓南の子南溟歿して嗣貞庵尙ほ幼なり、有司議して眞人及村上見善を擧げて、教授せしむること七年、眞人善く學徒を見、常に戒めて曰く、怠の一字萬事の廢する所、吾平生人に過ぐる者なし、但だ此病を免るのみと、眞人酒を嗜めども未だ嘗て醉を以て事を廢せず、晩年多

病なりしも亦病の爲に志を屈せず、其精勵終始渝らず。

眞人、人に接する常に怡々として和氣藹然たり、辯論を喜むも嘗て譏侮の言無く、其家に居る出入制あり、奴婢に至る迄、食味に暨き、贏餘の田宅、皆族親を贍はす、其内外を修めて、善く始終する者、近世未だ斯の若きの人を聞かず、文化七年庚午十月十九日病で歿す、享年七十六、妙本寺に葬る、眞人二男一女あり、長正、次連、共に早く歿す、季女省を以て義子祖靜に配し、祀を奉ぜしむ。（墓碑、黃鐘銘、山崎祖靜碑文）

二三　山崎榮茹

山崎榮茹、名は祖靜、字は寂然、榮粥居士と號す、通稱は專父、後に專三と改む、致仕して榮茹翁と稱す、父名は幸助、尾張の賤商なり、榮茹少うして儒を礒谷滄洲、石川香山に學び、又山崎眞人及淺井貞庵に從ひて醫を學ぶ、適々眞人の子歿して嗣なし、眞人其才學を愛して、乞ひて義子となし、女を以て之に妻はす、因りて山崎氏を冒す。

榮茹人と爲り、沈靜寡默、謙遜抑退、容貌愚なるが如し、然れども其病理を論じ、方藥を處するに方りては、議論精確にして、更に聞然する處なし、始寄合醫師に選ばれ、終に奥醫師に進み俸百俵を給せらる、歳四十を踰ゆる比、醫藥盛に行はれ病客常に門を塡む、

嘗て藩命を奉じて父眞人及貞庵と與に尾藩禁方集成を撰み、之を官庫に納む、因りて各白銀の賞あり。

榮茹一男四女あり、男名は中亭、未だ弱冠ならずして先ちて歿す、因りて貞庵の子養吉を乞ひて嗣となす、文政十一年戊子十二月十六日病みて歿す、享年五十六、妙本寺に葬る、明年の秋養吉亦尋いで歿す、親族相議して、又其弟總吉を養ひて家系を繼がしむ。（墓碑、醫家姓名錄）

二四　大河内存眞

大河内存眞、名は重昌、大川と號す、元文元年五月十六日を以て生る、醫を森夕旦に學び、專ら幼科を攻む、明和四年父周安退隱し、初めて藩侯に謁し、名聲籍々たり、遠近治を請ふ者門に滿つ、存眞、本草を松平君山に學ぶ、君山の本草正譌を著すや、同門諸子と共に之を校正す、安永天明の間、旨を奉じて二の丸及び公子勝長の邸に出入し、毎に功あり、賞を賜ひ且月俸七口を賜ふ、又民間の醫療に從ひ、奇效あることと數々なり、寛政六年十月廩米三十石月俸五口を賜ひ、擢でて奥醫師とす、十年春更に十石を加へ、江戸詰の命あり、病に依りて果さず、十一年十月十日終に家に歿す、享年六十四、長榮寺（中區宮出町）に葬る、門下に小林亮適、平野春策、井上眞良、岡田正弼、菅屋順詮等あり、子孫世々藩醫に列す。（墓碑、小林香雪墓碑、本草正譌）

二五　大河内存眞

大河内存眞、名は重德、初名、重敦、恒庵、還諸子、八松等の諸號あり、西山玄道の長子にして、初め道濟と稱す、文政元年藩醫大河内周碩の後を嗣ぎ、祿を襲ひて小普請醫師となり、因りて大河内氏を冒す、尋いで改めて存眞と稱し、番醫より、奥醫師格に進み、百俵を賜ふ、後奥醫師に陞り、前藩主齊朝に侍し、番料五十俵を賜ひ、又精勤を以て累りに加俸の命あり、二百五十俵を賜ふに至る、存眞初め淺井貞庵に學びて其塾頭たり、又本草を水谷豐文に學び、文政九年三月シーボルトの熱田を過ぐる時、豐文及び、弟伊藤圭介と共に之を訪ひて、互に利する所あり、常に同志と相會して博物の會を開き、後嘗百社を設く、其社名を嘗百と命ぜるは實に存眞なり、明治十六年五月二十三日歿す、享年八十八、鍋屋上野龍洞山に葬る。（墓碑、藩士名寄、淺井氏家譜大成、明治十二傑伊藤圭介傳、錦窠翁九十賀壽博物會誌、愛知縣人物誌）

二六　櫻井養益

櫻井養益、名は廣、字は子儉、桃山と號す、養益は其通稱なり、其先は山城伏見の人、醫を業とし、後移りて尾張清須に住す、慶長中再び府下に移り、居を蛇屋町（今、西區堀詰町）に定めて之に居る、桃山元文三年二月十八日を以て生る、幼より學を勤め業を修し、詩を作ることを好み、千村伯就（名は慶甫、オ次郎と稱す）に從游す、一閑齋は、復古醫と稱し、名護屋丹水、後藤艮山、山脇東洋と共に古方の四家と稱せらるゝ者なり、既にして業成りて歸り、聲名藉甚、官擢でて用人支配となす、嘗て以爲らく、凡學を爲す、博くして雜なるは、約にして精なるに如かずと、是を以て目他書に涉らず、傷寒論を研究することを四十餘年、大に發明する所あり、傷寒論古義五卷、及外傳十五卷、序例一卷、凡例一卷、定本一卷を著す、門人業を受くる者、前後數十百人に及ぶ、寛政十一年九月二十一日、病革なり、詩を作りて曰く、山只山水只水、花自開草自生、草乍枯花乍落、萬世傳不滅名と、蓋し傷寒論に於て自ら許す所あるなり、時に年六十二、萬年寺（中區矢場町）に葬る。（墓碑、尾張名家誌二編、自遠閣集二編、皇國名醫傳、名古屋醫家姓名錄）

二七　荒木田壽山

荒木田壽山、本氏は竹内、名は則民、字は壽山、號は南山、字を以て行はる、父を文格といふ、山城葛野郡西九條村の人なり、寶曆三年壽山歳十二、父に隨ひて來りて名古屋桑名町に家す、醫を佐枝玄通に學び、安永五年目見となる、寛政二年居を伏見町に移し、醫術益々行はる、三年藩、府下の良醫十人を選び之を用人支配となす、壽山其選に與かる、文化二年乙丑十一月十六日歿す、享年六十四、遍龍山西蓮寺に葬る。（墓碑、醫家姓名錄）

二八　堀田廣居

堀田廣居、姓は紀、名は世德、字は子馨、通稱は元進、廣井皆戸町の醫なり、因りて廣居を以て號となす、父を茂兵衛といふ、商を以て業となす、廣居儒を以て業となし、旁天文數學に通じ又本居宣長の門に入りて國典を學ぶ、性、沈實、說飾らずして野に、口吶にして言ふこと能はざるが如し、然れども事に臨み理を談ずるに至れば、諄々として言の止まる所を知らず、人見璣邑、千村伯就、內藤東甫等、其人と爲りを愛して之と交ること親し、天明六年十二月五日、暴疾を以て歿す、享年四十二、吉田氏を娶りて唯一女あり、門人等相議して葬を治め、碑を誓願寺（東區久屋町）に建て、璣邑の銘を乞ひ、題して廣屋先生碣といふ、著す所中星譜あり。（墓碑、自適園集、張城人物志、鈴屋門人錄）

二九　加藤常庵

加藤常庵、名は行忠、字は子信、桂齋、又古川と號す、常庵は其通稱にして、初め文中と稱せり、醫を滕蘭宇に學びて頗る之を善くし、藩の侍醫となる、寛政十一年秋、藩主宗睦に扈從して江戸に赴き、留まること十二年、文化七年五月二十七日病みて歿す、享年六十六、麴町心法寺に葬り、法性院身峯了道居士と法諡す、義子季博其遺衣を城西西願寺（西區新道町）に埋め、招魂碑を建つ、子孫世々藩の侍醫たり。（碑文）

三〇　永坂養二

永坂養二、名は正和、字は和卿、井谷と號す、養二は其通稱なり、三河碧海郡井谷村近藤久七郎正資の第三子にして、延享二年五月二十八日生る、後外祖永坂休節正雄の遺命に依りて永坂氏を冒す、幼にして江戸に往き、近藤養卜に從ひて外科の醫術を學ぶ、業成りて安永七年名古屋に來り、居を城南朝日町に卜し、醫を以て業となす、其病家に趨く、尊卑一視、低昂をなさず、唯仁術を以て自ら任ず、是を以て四隣の嚮、病を輿して治を乞ふ者、日に門に盈ち、良醫の名遠近に聞ゆ、寛政三年三月擢でられて用人支配となり、尋いで世子治行謁を賜ふ、常に門人に語りて曰く、醫は仁術なり、然れども其術精しからざれば仁ならず、其人廉ならざれば利に走る、若し苟も之を誤らば、則ち晉に病を治する能はざるのみならず、殆んど人を殺するに同じ、豈之を仁術と謂はんやと、享和元年九月四日歿す、享年五十七、瑞寶寺（中區白川町）に葬り、永坂院行譽秀道居士と法諡す、後文政二年門人永坂德時別に碑を八事山に樹つ。（墓碑、碑叢）

三　山田梁山

山田梁山、名は章、字は貞介、梁山は其號にして、一に蘿門と號す、父の名は時房、本氏は鈴木、三河の著姓なり、時房尾張に來りて、枇杷島の醫山田重藏の嗣となり、依りて亦山田重藏と稱す、四男二女あり、伯は梁山にして、叔は鈴木雛屋なり、梁山寶曆二年正月を以て生る、弱冠にして京に遊び香川南洋に學ぶ、歸りて家を季弟良順に讓り、名古屋に出でて別に家を起す、梁山の人を活す、多く灸艾を以てす、治を請ふ者四方より來りて門に相尋ぐ、或は深夜戸を叩きて來り請ふ者あれば、僮の起くるを待たず、自ら起ちて門に應じ、走せて往きて治す、其患者を巡視する日に數十百人、風雨に遭ふも蓑笠して傘を用ひず、中年肥滿して歩するに苦み、乃ち始めて轎を用ふ、老を告ぐるの後、治を求むる者猶ほ故の如く、休養すること能はず、年六十九忽ち右手の不隨を覺え、喜びて云ふ、是れ天吾を休ましむるに疾を以てするなりと、然も日に自ら灸すること數百、疾も亦略々愈ゆ、其母居處時を經れば、輙ち之に厭く、梁山屢々其居を移して、以て其意を新にす、母又山水の畫を好む、梁山多く畫幅を聚め、朝夕更め掛けて以て母を娛ましむ、而して自ら用ふる所の器物は、唯用を取るに止まり、他の玩好なし、常に子弟を訓戒するに、人生の勤に在るを以てし、曰く貧は是れ富の基、富は貧の媒なりと、人の華侈を好むを見れば輙ち以て憫むべしと爲す、善く孤窮を賑恤し、人の憂に急なること、己に於けるよりも甚し、往々人の爲に賦を濟ひ、紛を解き、勞して德とせず、傍ら禪を好みて、大如に參す、人其舉止の急遽なるを以て、往々之を譏る、或る者浮言を爲して曰く、梁山病家に至れる時、猫其藥籠に倚り、褥上に臥す、乃ち併せ裏みて以て去ると、梁山之を聞きて笑ひて曰く、余豈に此事あらん、然れども亦自ら取る所ありと、因りて自ら裏猫道人と號す、曾て富岳を觀んと欲して未だ遑あらず、一旦歲除を以て駕を命じて原、吉原の間に至り、一望して便ち反る、曰く吾が願足れりと、初め梁山の名聲藉甚、藩主之を聞きて、文化十年謁を賜ひ、文政八年に至り俸三口を賜ふ、蓋し優老の恩典なり、十一年五月六日歿す、享年七十七、八事山に葬る、四子あり、第三子貞石家を繼ぐ、（碑叢、名古屋人物史料）

三　山田貞石

山田貞石、名は讓、字は叔退、貞石は醫稱にして、雙樹と號す、梁山の第三子なり、歲十三江戸に赴きて小野蘭山に從遊すること三年、歸りて又京に入り、香川氏の門に學ぶ、乃ち廣く諸家の長ずる所を集めて、以て其業を大成す、初め梁山、學古今を綜べ、諸家の蘊底を洗發して折衷する所あり、之を術に施して必ず回生の妙を期す、貞石其緒を繼ぎ、孜々として及ばざるが如くす、是に於て父子相並びて治を施し、名聲遠近に震ふ、疾を輿して門に踵る者、日に數十百人、父の老するに及びては、一身負荷して夙夜診治するも殆んど給せず、天保六年藩

主召して寄合醫師となし俸七口を賜ふ、翌年奥醫師格となり、世祿三十俵を賜ひ、加俸を併せて百俵を賜ふ、既にして疾に嬰り、辭して寄合醫師となる、貞石性警敏にして敦厚なり、常に子弟を誡めて曰く、醫の道たる極めて尊し、人稱して仁術となす、夫れ仁術を執りて、仁に違はゞ、猶ほ農夫にして耕さゞるが如し、然れども農の耕さゞるは躬ら飢を取るのみ、醫にして醫ならず、一按若し誤らば、悔ゆとも及ばじ、誠懼せざるべけんや、貴賤を問ふ勿れ、貧富を視る勿れ、診脉必ず愼み、深く之を察せよ、之を察して審ならざれば、辭して憚ること勿れ、貨に味み、治を貪るは罪惡之より甚しきは無しと、其病むや、猶ほ或は勉强して事に從ひ、竟に起たず、實に天保十一年十一月二十九日なり、享年五十、誓願寺東區久屋町に葬り、戒愼院直指見性居士と法諡す、長子貞元、名は勤、後梁山と稱す、家を繼ぎて、奥醫師に昇り、世祿五十俵、歲俸三百俵を賜ふに至る。（藩士名寄、名古屋人物史料）

三三　大鶴活庵

大鶴活庵、名は定香（初名謹良）、字は君馨、篠谷と號す、幼字は百太郎、活庵は其通稱なり、父名は景春、母は柴田氏、寶曆四年甲戌伊勢桑名に生る、其兄は豊後佐伯の庶族にして、大鶴に居る、因て以て氏とす、活庵幼にして鄕の儒醫松井氏に從學す、安永三年名古屋に來り、田中養順の門に入り、其家に寄宿して醫を學ぶ、既にして伊勢に歸り、出でゝ石川氏に贅し、因て石川玄廸と稱す、安永六年再び名古屋に來り、笹屋町に住して業を開く、篠谷の號蓋し之に本く、活庵病を療するに專ら古方を用ひ、深く張仲景を信ず、中年に至り其術頗る優れ、業大に行はる、寛政十一年藩主より用懸りを命ぜられ、享和二年目見を許さる、人以て榮となす、文化元年再び本姓に復す、活庵文事を好み、岡田新川に從ひて詩を學ぶ、其交遊する所皆當時に名ある者なり、業務の旁ら、常に吟詠を絕たず、終身以て樂とす、其詩を賦する搆思を費さずして成る、嘗て熱田宮を拜し往復の間詩百首を詠ず、一日掃部頭勝長召して園中の景を賦せしむ、篠谷其前に侯し即坐に十餘首を作る、人皆其才の敏なるに驚く、文政八年春病を發し、十二月六日を以て終に逝く、享年七十二、宮出町善昌寺に葬る、著す所治痢軌範一卷（文化十九四年）華詩稿、篠谷詩集、丹丘詩抄、東海詩稿、活庵漫載等あり。（碑文、醫家姓名錄、尾張畸人傳、金鑾九十九の塵、日本醫學史）

三四　小林香雪

小林香雪、名は文和、字は亮適、字を以て行はる、香雪と號し、別に香祖山房の號あり、父は近藤市右衛門道次、母は中島氏、寶曆五年乙亥十月十四日、美濃海西郡松木村に生る、早歲醫に志し尾張高針村の醫小林嘉仲を師とす、因て小林氏を冒す、後藩醫大河内存眞の門に入り、最も小兒科を善くするを以て名を知らる、寛政十年七月選ばれて寄合醫師となり、明年二

月奥醫師に遷る。文化五年藩主の女維君の近衛基前に嫁するや、亮適之が侍醫となりて京都に赴く、藩に仕ふること二十餘年、累りに俸を增して三百俵に至る。

香雪人と爲り敏快朗達、文雅にして書を善くし、兼て畫を善くす、梅、蘭、山水は最も其善くする所にして、一點塵俗の氣なく、清雅愛す可し、又琵琶を愛し、壯より老に至る迄衰へず、其江戸及京都に在るや常に縉紳名家と交遊し、率ね風流を以て尙ばる、柴栗山、賴山陽の徒、推賞して措かず。

香雪の京に在る時、山陽其書を見て畏敬の念禁じ難く、一日香雪を訪ひて行筆の法を問ふ、香雪誨へて曰く、徐ろに筆を行り、墨の紙背に徹するを期せよと、山陽唯々として退く、京都に書畫の癖ある、當時の名流の作る所を展觀す、山陽每に事に從ふ者に囑して曰く、我が書を香雪の書に隣次せしむること勿れと。

寛政三年四月、一夫偶々宇治放生院の藩籬の側を穿ちて兎道橋斷碑を獲たり、殘缺二尺許、舊碑の四の一のみ、香雪、內田蘭渚、小川雅宣、吉田重英、僧亮惠等と謀り、之を乞ひ得、足らざる所を補ひて、之を建つ、其事を幹し工を督する皆香雪の力に依る。

初め香雪、大河內氏に在りて醫を學び、其名漸く著はる、大河內氏薦めて藩醫たらしめんとし、爲めに禮服刀劍を備へて命の至るを待つ、既にして召聘の命至る、時方に夜なり、香雪を索むるに在らず、親近の人走せて四方に搜る、香雪熱田廿五挺橋上に座し、月の東山に昇るを觀て琵琶を彈ず、使者喜んで伴ひ歸らんとす、香雪肯かずして曰く、余世に放浪して自適せんとす、爰ぞ復幣聘を用うることを爲さむやと、諸人百方說きて伴ひ歸り、其師慫慂之れ務めて、遂に藩命に應ぜしむ、是を以て香雪仕途に在るも、心未だ嘗て山林を忘れず、人目して仙醫と稱す。

山陽、香雪の琵琶を彈ずる畫像に贊して曰く

香雪作書畫、如其鼓琵琶、指所不到雅韵在（雅韵在、山陽詩鈔作存雅韵）不必麻姑搔處爬、墨痕瘦硬拙藏巧、時爲梅竹亦槎牙、陸沈炙門五十歲、秡獪戲人唉噫々、空留畫像在人眼、脫屣塵世如蛻蛇、吾題此詩郤踏趾、恐呵俗書著塗鴉、猶憶研北夕呼酒、一聲裂帛讀燈花。

香雪の面目、此詩に由りて窺ひ見るべく、恐呵俗書著塗鴉の一句、書に於て如何に山陽の香雪を畏れたりしやを想像すべし、文政三年八月十四日病みて歿す、享年六十六、妙本寺中に葬る。（高津、藤濱氏藏香雪翁畫像、山陽詩鈔、村瀨太乙直話、藤濱氏藏香雪翁墨蘭卷子、宇治橋斷碑、山陽先生書後題跋）

三五　神波船樹

神波船樹、名は勉、字は方努、曾七と稱し、又船樹山人と稱す、美濃大野郡數屋村の人、家世々醫を業とす、父重成、小森氏を娶りて二男を生む、長を素行といふ、次は即船樹なり、恒に二子を誡めて曰く、爾等須らく貧賤に安んじて、學を勉めよ、富貴を求めんとして險行を作すこ

と勿れと、故に家貧にして加ふるに災厄に遭ひ困苦身に逼ると雖も、紙筆書冊の類は必買ひて之を與ふ、是に於て二子深く父の意を察し、能く其訓誡を奉じ勤學して怠らず。

船樹長じて詩法を金龍道人に學び、安永八年歳二十笈を負ひて名古屋に出で、林良澤の門に入り、其家に寄宿して醫を學ぶ、居ること十年、業成りて小兒科を以て門戸を立つ、來りて治を乞ふ者日に戸外に溢る、常に曰く人の世に處する信義を以て第一となすと、故に療を乞ふ者あれば、其貴賤を擇ばず、招請あれば必ず往きて診す、世人皆欣慕し稱して名醫と爲す、之を以て業日に盛にして財隨て富む、船樹貨殖を以て念とせず、故に田宅を買はず、但だ門生を育するを以て樂とし、其俊秀にして精勵なる者は、養ひて子と爲し、必ず分居して神波氏を冒さしむ。

船樹性讀書を好み、其病家に往來するの時といへども、肩輿中常に書冊を繙き、披閱渉獵せざるはなし、寛政の頃、船樹一日津金胤臣に會す、胤臣は熱田奉行にして才俊を以て稱せられ、詩歌を善くして眼中人なき者なり、船樹を顧みて曰く、子詩を作るやと、船樹曰く能くせず、復た問ふ、歌は如何と、答ふるに同じく能くせざるを以てす、然らば俳諧は如何、亦能くせず、圍碁將棋はと問ふに、是れ亦同じと答ふ、胤臣罵りて曰く、子醫にして一の能なし大癡漢といふべしと、船樹徐ろに曰く、余に醫案を書かしめよ、恰も堅板に水を灑ぐが如く、凝滯することあるなくして立どころに成らんと、胤臣默して復た一語なし。

船樹晩年稽々醫療に精しきを以て寄合醫師となり、俸三口を給せられて身を終ふ、文政十二年己丑十二月十九日病みて家に歿す、享年七十一、善導寺（東區鍛冶屋町）の域内に葬る。（臺齊、醫家姓名錄、本居春庭門人錄、連城亭隨筆）

寛曆十二年生
初代賀川玄悅？安永六年歿

三　丸淵仲山

丸淵仲山、名は正泰、字は來甫、安々齋と號す、通稱は仲山、晩年一翁と改む、尾張中島郡丸淵村の人なり、父久西、四男あり、仲山は其第三子なり、家世々鵜飼を氏とす、仲山其本居に因りて、丸淵氏と稱し、以て自ら別つ、幼（安永二年十二才）にして名古屋に來り、井上專庵に從ひて醫を學び、弱冠（天明元年二十才）京都に往きて、賀川玄悅の門に入りて產科を學ぶ、玄悅其蘊奥を竭くして之に授く、既にして歸りて業を名古屋に開き、其術益々精しく、生に回し命を全うするもの前後算なし、之を以て名聲頓に揚り、人貴賤となく、途遐邇を論ぜず、苟も孕婦の在る有れば、仲山の門に至らざるものなし、地方の醫家賀川氏產科術の優秀なるを覺り、之を尊信する事、實に仲山の功に據る。

享和三年目見を許され、文政十二年用人支配となり、天保七年月俸三口を受く、蓋し其術に秀づるを以てなり、其他功勞を以て藩主より白銀の賞を得ること前後數回に及ぶ。

仲山、人と爲り剛毅にして敦朴、其人と語るに未だ曾て謾辭あらず、其疾病の輕重、藥劑の

當否を論ずる、一言にして決す、世の知らざるもの、其爵命に乏しきを言ふ、而して仲山恬として顧みず、仲山藥を研くの外、他の嗜好なし、唯少時より喜んで琵琶を彈じ、頗る其妙に詣る、之を弄すること終生渝らず。

弘化四年六月十九日歿す、享年八十六、駿河町光蓮寺に葬り、墓に題して安々先生といふ、仲山三男三女あり、長子早く歿す、次子正純嗣ぐ、亦仲山と稱す、季子曹恒出でて張氏を繼ぐ。（阿部伯考撰碑陰文）

三七　平野龍門

平野龍門、通稱は春策、尾張侯の醫官なり、醫に精しくして嘗て法眼に叙せらる、門人に宇都木昆臺あり、文化十三年正月二十五日歿す、寶生院（中區門前町）に葬り、樓心院法眼龍門釋顯養居士と法諡す、子春芳繼きて藩醫たり。（藩士名寄、墓碑）

三八　加藤慶元

加藤慶元、名は政道、字は弘甫、大東と號す、慶元は其俗稱なり、父杏庵、醫を以て尾張侯に仕ふ、慶元少うして學を好み、意を醫術に留む、嘗て淺井南溟に從ひて脉訣を受け、心を潛めて學習し、日夜懈らず、終に其道を得、年十六にして杏庵歿す、乃ち家を嗣ぎ、天明三年請ひて京師に赴き、三角法眼に從游し、留り學ぶ事歷年、旁ら本草を小野蘭山に學ぶ、既にして鄉に還り、園を開きて多く藥艸を栽培し、以て樂となす、八年五月、藩命あり特に俸を加へ、侍醫の闕に補す、此年侯世子治行に隨ひ知多郡に至り、人皆榮進を期す、不幸にして病に罹り、寛政元年十月十六日を以て歿す、享年二十六、城東圓勝寺の塋域に葬る、子あり梅庵といふ、家を嗣ぐ。（墓碑）

三九　柴田洞元

柴田洞元、名は正簡、字は子廉、西坡、又溶々齋と號す、洞元は醫の通稱たり、愛知郡山崎村江崎與右衛門の子にして、黃泉無著の兄なり、柴田自休の女壻となり、因て柴田氏を冒す、醫を藩醫林良澤の門に學び、內科及小兒科を以て門戶を立つ、寛政二年一家を樹立してより文化六年目見の班に至る、正簡又國學を本居春庭に學び、好みて歌を詠ず、又書法を中林竹洞に受け、松坡の號あり、醫は其方に精しき外、本草に通ぜざるべからずとなし、仍て研鑽して藥品の精粗を鑑別し、日用藥品考を著して世に行ふ、門人に本多春承、大野玄庵あり、弘化二年九月四日歿す、享年七十九、城南來迎寺（中區東橋町）に葬る。（墓碑、醫家姓名錄、春庭門人帳、日用藥品考、柴田氏文書）

四〇　淺野春道

淺野春道、名は　　字は　　栗亭と號し、居を思濟堂といふ、家世々醫を業とし、鍋屋町に住す、春道少うして大志あり、父昌益に請ひて、京師に遊學し、香川氏の門に學ぶ、又小野蘭山に從ひて本草學を窮め、後又長崎に遊ぶ、歸りて後業大に行はれ、門前市を爲す。

文化十一年正月、奥醫師に擢でられ、切米三十俵、足高を合せて百俵を賜ふ、後累增して貳百五十俵に至る、文政六年奥醫師を辭して寄合醫となる、天保七年奥醫師に復し、而して命ありて其職を執ることなく、專ら國中醫師の醫業を檢することを掌らしむ、

春道、古錢癖あり、藏する所極めて多く、當時收藏家を以て世に知らる、又古器を弄し、盆栽を愛し、多く異草奇花を聚む、名古屋の地後來本草學の盛なるに至りしは、春道之が先驅をなせり、天保十一年正月三日歿す享年七十二、功德院（中區裏門前町）に葬る、子孫相繼ぎて藩醫たり、門下三村玄澄、高田正敬尤も名を顯す。（藩士名寄、功德院過去帳、錦章翁九十賀壽博物會誌、三村玄澄碑文、醫家姓名錄、淺野氏聞書）

四一　淺井道順

淺井道順、名は正剛、字は士健、斗嵩、又閑齋と號し、別に紫川釣徒と號す、尾張中島郡四貫村に生る、本氏は德永、即ち德永法印の裔なり、年少うして醫に志し、遊學して名を顯す、遂に其師淺井東庵の嗣となり、因りて淺井玄達と稱す、後更に道順と改む。

初め外科を以て藩の醫員となり、後に命ありて內科を主として外科を兼ね、番醫より、奥醫に進む、嘗て藩主齊朝の室淑姬（將軍家齊の女）の病を診するが爲、召に應じ急馳して江戸に下る、幕府褒するに銀を以てす、又一橋治濟の病の爲めに再び急馳江戸に至る、後前藩主齊朝の侍醫となり、俸三百俵に至る、藩に仕ふること五十二年、江戸詰を命ぜらるゝこと二十一回に及ぶ。

道順、人と爲り忠厚、初め河村乾堂に從ひて漢學を修む、其江戸に在るや、醫を桂川甫周に、文字を篠本竹堂に學ぶ、其桂川氏に學ぶは藩主宗睦の特に命ずる所にして、年毎に學資金十兩を給ひ、七年に及ぶ、著書若干卷あり、弘化二年七月三日歿す、享年七十四、長榮寺（中區宮出町）に葬る、義子玄三家を襲ぎ益々名を顯す、次子玄達は別に一家を成し尤も易に精し。（墓碑、藩士名寄）

四二　村井泰翁

村井泰翁、名は貞固、字は子幹、春岱と稱す、世々尾張の醫官にして祿三百石を食む、本氏は小鹿、寛政十二年養父甫庵の後を承けて寄合醫となり、後番醫より奥醫に進む、致仕の後琴、詩、茶を以て樂とし、俱に其妙に至る、其琴は心越の傳を熟得す、一時の名流に交りて、最も深

田香實と相親し、其居園林幽雅、頗る景趣に富む、名けて五聲軒といふ、五聲とは松聲、水聲、琴聲、茶聲、鳥聲をいふなり、安政二年七月七日歿す、享年八十二、政秀寺に葬り、泰翁良儉居士と法諡す。（藩士名寄、名古屋人物史料、天保會記、蕉窓餘錄、政秀寺過去帳）

四三　大窪光風

大窪光風、薜荔庵と號す、初め山本九十九と稱す、天明二年大久保多四郎の後を承け、俸十口を賜ひて馬廻に列す、四年大久保の字を改めて大窪とし、尋いで多九郎と稱し、後太兵衛と改む、寛政元年公子勝長の側詰となり、幾ならずして罷めて又馬廻となり、後寄合組に遷る、性植物を好み、水谷豐文と共に後進を誘き、毎月十七日自家に本草會を開き、諸品物を研究す、文政七年二月十八日歿す、享年六十二、長榮寺（中區梅川町）に葬り、忠陳院岐山乙翁居士と法諡す。（藩士名寄、大窪家系圖、錦窠翁九十賀醫博物會誌）

四四　大窪昌章

大窪昌章、小字は舒彌、後舒三郎と稱す、志村半兵衛吉昌の次子にして、太兵衛光風の嗣となる、文政七年家を繼ぎ、歲俸三十俵を賜ひて馬廻に列し、後大番に遷りて加俸二十俵を賜ふ、本草に精しく寫生を巧にし、石黒濟庵、吉田平九郎、大河内存眞、伊藤圭介等と共に屢博物の會を開く、又茶事を好み、手づから陶を製し、採集せる奇木百種を以て茶杓百本を製す、天保十二年十月八日歿す、享年四十、長榮寺に葬り、昌章院文應卓成居士と法諡す。（藩士名寄、大窪家系圖、錦窠翁九十賀醫博物會誌、尾陽陶器名家集、阪崎親成氏談話）

四五　大窪安治

大窪安治、小字は小新吾、後小新吾兵衛、勘五郎と稱し、又太兵衛と更む、舒三郎昌章の長子なり、天保十三年家を繼ぎて馬廻に列し、弘化三年小十人組となりて歲俸五十九俵を賜ふ、後新番となり、尋いで組目付加役となり七十三俵を賜ふ、文久二年世祿を五十俵に增し、元治元年小十人組與頭に昇り、百俵を賜ふ、明治二年四十俵を加賜し、尋いで一等兵隊となる、人となり寡默、泗水を善くし、能く植物の性を究む、醫學士奈良阪源一郎の浪越博物會を起すや、其會に列し小塩三居巢と共に屢々各地に動植物を採集す、其疾に罹りて起たざるを知るや、一日家人に命じて曰く、吾將さに地に入らんとす、今日は我が親しむ所の美妓を聘して、畢生の樂を窮めんとす、早く之を招けと、家人頗る之を怪む、安治曰く、我が稱する所の美妓とは多年蒐集せる所の植物腊葉是なり、早く之を篋中より聘せよと、家人其意を了し腊葉を出して壁上に貼し室中餘す所なし、安治視て欣然として曰く、何物の美か之に及ばん、噫又遺憾なしと、幾もなくして歿す、實に明治二十六年十月八日なり、享年六十八、長榮寺

に葬り、安治院明道義忠居士と法諡す。（藩士名寄、大窪家系圖、汲古草稿）

四六　山中寛紀

山中寛紀、通稱は八十郎、後九十郎と改む、四花介德光の子にして、出でて同宗九十郎和同の後を承く、寛政十二年徒士以下小普請となり、年金三両を給ふ、後杁方物書、勘定方物書、水野代官並手代並となり、文化七年能く其職に勤むるを以て本役に進み、廩米九石俸二口を給ふに至る、後特に年金若干を給ひ、又加俸の命あり、天保二年、其常に心を侯家に存し、力を新田の開墾に致し、永く國利を進め、民產を增し、依りて以て民俗をして厚きに歸せしめしの功を賞し支配勘定組頭格に擢で俸を加ふ、初め水野治下の田、荒蕪するもの凡六千石を算す、寛紀之を憂へ、嚴に開荒の法を立て、民を驅りて墾治す、其田租を徵し、舊額に復するもの二千九百石餘、其他皆種うべきに至る、實に寛紀の力なり、尋で勘定吟味役に陞り、更に俸を加へ前後給ふ所併せて十三石三口俸に及ぶ。

寛紀嘗て中村習齋に從學す、人となり篤行にして儉素を尙び、濟物の志を抱く、凡地理、水行、物產、本草の學、苟も農政に便なるものは究窮せざる處なし、旁古器古物を好み、其動植の異類奇種は、或は之を飼養し、之を培養し、或は之を圖し、乾製とし、腊葉とし、筐に盈ち、室に滿つ、其遠國の產に係るものは、人に托して之を致し、以て自ら娛みとなす、文政八年歲歉にして人餓う、寛紀自ら衆草木を嘗めて、民に良毒を示し、活を全うする所多し、一時救荒の政、其力多きに居る、積粟儲錢の法も亦其意に出づといふ、天保十一年十二月廿二日歿す、享年六十三、西蓮寺（東區東門前町）に葬り、政忠院雪山自白居士と法諡す。（藩士名寄、碑文、耄意敎言、西蓮寺過去帳）

四七　宇津木昆臺

宇津木昆臺、名は益夫、字は天放、通稱は太一郎、名古屋の人、宇津木十助の子なり、幼にして學を好み、松田棣園を師とし、醫を淺井貞庵、平野龍門の二家に學ぶ、皆許すに大器を以てす、歲十八、笈を負ひて京都に入り、周く諸醫の門を叩くに、意に滿つる者なし、遂に家居し、妙法院宮微妙法親王に仕へ、古醫方を以て天下に鳴り、弟子大に進み、病者四集す。

昆臺、博聞强記、目一たび過ぐれば、細大盡く記す、平生好で書を讀み、當時世に有る所の書を讀破するを志す、故に制度、文物、天地、動植、都て通ぜざるなし、嘗て自ら稱して五足齋といふ、其意謂へらく、神儒佛老醫、此五つのものに付きて、皆各々得る所あり、自ら足れりとするに足ると、仍て五足齋の言を作る、而して當時平安の人、亦皆昆臺に許すに、此五者を以てしたりといふ、其佛に於けるも、該博兼通、頗る其義に精しく、雪堂興禪師に參禪して悟入する所あり、五山の僧徒來りて業を受け、籍を其門に着けしもの前後凡千人なりしといふ。

嘉永元年五月八日、京都車屋町押下路下塗師屋町の視別軒に歿す、享年七十、南禪寺塔頭

慈氏院に葬る、著す所古訓醫傳二十五卷、日本醫譜七十卷、解莊二十四卷、詩文集十五卷、和歌集五卷あり、皆家に藏す。

昆臺、嘗て弟子に語りて曰く、凡醫を學ぶものは、當さに古文の條理あるものを讀むべし、此の如きもの、今に存するは、獨り傷寒論あるのみ、即ち古の所謂風寒熱病方是なり、然るに古來の學者、之を知らざるは豈遺憾ならずやと、乃ち傷寒論を改訂して、風寒熱病方經篇と曰ひ、金匱を以て緯篇となす、以て古に復するなり、又書を著して之を辨明す、古訓醫傳即ち是なり、解莊一部、亦老莊の學に深きを知るに足り、我國儒者の、莊子に解釋を施せるもの、其右に出づるものなし。

昆臺、苗村氏を娶り、三女を生む、長先つて歿す、次は松井法印に適き、季は東儀出雲守に適く、妹の子榮安（名逢夫）遺命に仍りて家を嗣ぐ。（宇津木氏系譜、慈氏院墓碑、醫定便覽、日本醫學史）

四八　舍人重巨

舍人重巨、姓は清原、字は君規、小字は磯次郎、後九十九と改め、更に武兵衛と稱す、尾張の世臣にして祿二百石を食む、寛政元年家を繼ぎ、初め石河伊賀守同心となり、後寄合組、大番組に遷る、七年十一月藩主宗睦の小性となり、中奥番、手筒頭、徒頭、徒頭格中奥番等の諸職を歷て、長園爐裏番頭格新番頭となり、累りに祿を加へられて四百石に至る、而して中奥の勤務に老くるを以て、特に新番頭の勤務を免し、同僚指導の命を受く、重巨性草木を好み、四時の花卉を家園に栽培し、又廣く本草の書を撿して、其性と用とを辨じ、草木性譜三卷、及び有毒草木圖說二卷を編す、其書中載する所の圖は皆同好の描く所なり、重巨又挿花を能くし、花道靖流を開き、道生軒一德と號す、嘗て籬とせる所の竹の發芽を見て、深く其所以を考究して、竹の水揚げ法を發明すといふ、弘化四年九月二十四日歿す、享年六十九、政秀寺（中區矢場町）に葬る、生前自ら法號を選び、道生軒一德君規禪定門といふ、天保五年其宗睦に近侍せる時の見聞を集錄して稽德編附錄四卷を編す。（藩士名寄、草木性譜、有毒草木圖說、稽德編附錄、金鱗九十九之塵、花の栞、沒古草稿、政秀寺過去帳）

四九　奥村榮發

奥村榮發、初名を一齊、字を士長といふ、後名字共に榮發と改む、號は仙臺（初號璋圭又硯山）醫を以て業とす、父を茂兵衛といひ、府下宮町に住して、酒を賣りて產となす、榮發幼にして大河內存眞（名は重昌）の門に入りて醫を學び、寛政十二年正月日置に移りて業を開く、既にして火災に遇ひ、顯性寺の側に寓居す、身を陋巷に安じて、春は隣寺の櫻花を賞翫し、因りて迎春堂と號す。

榮發、身體肥大、天性溫醇なり、河村乾堂に師事して、能く儒を學び、醫業の傍、諸生に敎授し、又筆耕して口を餬し、惡衣惡食を耻ぢず、最も詩を嗜みて、奇才敏捷、作る所萬餘首に至る、友

人の詩を見る毎に、其心に適するあれば、則ち抄し、積みて堆を成す、平生親に事へて至孝、親の志を繼ぎて法華を誦し、又能く貧を守りて操を立つ、樹口好古最も膠漆の交あるを以て、文房家產の資、時に之を頒つ、曾て榮發に謂て曰く、衣食乏しければ、何ぞ財を假らざるやと、答ふるに返すべきの餘計なくして之を假る、意に於て安からず、自ら貧を守るに若かざるを以てす、其操守の高きこと此の如し、病中蚊蠅なし、門生之を賂らんとす、其婦辭して受けず、婦も亦畸人なり、文政四年四月十六日歿す、享年四十二、照遠寺（東區小川町）に葬る、其日記に筆の底あり。（墓碑、社盟詩載、蓮城亭隨筆）

五〇　水谷豐文

水谷豐文、字は伯獻、鉤致堂と號す、通稱は助六、尾張の士友之右衛門（號覺夢）の長子なり、享和二年三月家を繼ぎ、祿二百石を襲ひて馬廻組となり、三年十月大番組に遷り、文政六年十月更に廣敷詰となる。

父覺夢、草花を好み、培養法に精し、豐文、本草を小野蘭山に學び、藩の藥園を監守す、文化七年六月、信濃木曾及美濃の諸山に採藥し、木曾採藥記を作る、其他伊吹、熊野の諸山に躋攀し、仔細に採集し、家園に栽培する所、其品極めて多し。

豐文、植物、動物、鑛物を精研し、日夜刻苦して倦むことなし、其設最も多識にして、諸國及門の徒、亦甚だ多し、文政九年四月二十九日、蘭醫シーボルド宮驛を過ぐ、豐文、門人大河內存眞、伊藤圭介と共に之に面晤し、博物標品を示す、シーボルド、特に其御園町の邸に至り、其植物園を觀る。

豐文、同好の士と共に、時に本草會を開き、又常に相會して、藥物、腊葉、其他種々の物品を、互に相鑑定し、性質效用を辨晰す、後此會を名けて嘗百社といふ、文政十一年、石黑濟庵、大河內存眞等と共に、出品の圖說を綴りて、灌園餘錄一卷を作る、天保四年三月二十日歿す、泰昌寺に葬る、後同寺の廢絕するに及び政秀寺（中區矢場町）に改葬す、著す所物品識名二卷、同拾遺二卷あり、門人飯沼慾齋、伊藤圭介最も顯る、天保六年三月十五日、嘗百社の同人、一行院に本草會を開き、動、植、鑛の奇品、珍種を陳列し、豐文の爲めに追薦の大會を設け、其靈を慰め、且つ指教の德に報ず、其目錄圖說を上梓して、名けて乙未本草會目錄といふ、事を幹する者、石黑正敏、大河內重敦、吉田高憲、大窪昌章、伊藤圭介等なり、此目錄歐洲に傳はり、編中所載の「イバラガニ」の圖は、摸寫して洋書中にも出せりといふ。（藩士名寄、錦窟翁九十賀壽博物會誌、增訂日本博物學年表、物品識名、本朝醫人傳）

五一　石黑濟庵

石黑濟庵、名は正敏（墓碑には政敏に作る）、富春堂と號す、尾張侯の醫官通玄の子にして、世々祿百石を食

む、文化十三年家を繼ぎて寄合醫師となり、後番醫より奥詰醫師、奥醫師に進む、文政九年請ひて奥醫師を辭し、翌年又奥醫師に復し、加祿五十石を賜ふ、天保二年再び辭して加祿を止めらる、五年又奥醫師となり、加祿五十石を賜ひ、前藩主齊朝に侍す、七年又加祿五十石を賜ふ、三月齊朝に侍することを罷めらる、濟庵文政四年冬、罪人の屍體を藩に請ひ、新屋敷御試場に於て之を解剖す、初め町奉行の命により門人中の尤なる者、山口玄瑞、野口齡司、伊藤三平の三人をして補助せしむるの許を得、後中川順二、吉雄俊藏等六十三人藩に請ひて參觀す、名古屋に於て人體を解剖せるは之を以て嚆矢とす、濟庵本草に精しく、最も寫生圖に巧なり、水谷豐文、大窪太兵衛、舒三郎父子、伊藤瑞三、大河內存眞、吉田平九郎、伊藤圭介等と常に相會して本草を攻究し、又相携へて諸山に採集せり、天保七年五月二日歿す、享年五十、圓勝寺墓地（東區車道町）に葬り、法諡して白蓮院宗譽西岸といふ、子孫相繼ぎて藩醫たり。（藩士名寄、遺城亭隨筆、錦窠翁九十賀壽博物會誌、乙未本草會物品目錄、圓勝寺過去帳）

五二　吉雄南阜

吉雄南阜、名は尙貞、字は伯元、通稱常三、南阜と號し、其居を觀象堂と號す、肥前長崎の人なり、祖耕牛、父如及、皆和蘭通譯を職とし、傍ら和蘭醫學を窮め、且天文窮理の學に通ず、南阜幼より家學を修め、醫法を研き、格物の學に通じ、兼て砲術に精し、壯なるに及びて東遊し、歸路尾張を過ぎ、小川守中、橋本春山の家を主とす、時に醫學館淺井貞庵、太だ之を重じ、從學の者亦益々進む、尾張侯其名を聞き聘して藩醫とし累進して奥醫師に至る、羈旅の人にして、且外國の醫法を以て仕へ、藩主の湯藥を主るは未だ曾て有らざる所なり、著す所和蘭內外要方、草木譜、遠西觀象圖說、距度新編、銃砲原論、粉砲考等あり、天保十四年九月二日歿す、享年五十七、城南白林寺（中區矢場町）に葬る。（臺碑、遠西觀象圖說）

五三　三村玄澄

三村玄澄、名は百穀、字は茂公、惠齋と號し、其堂を鑑古と號す、玄澄は其通稱なり、名古屋鐵砲塚（今東區相生町）の人にして、父を長兵衛といひ、家世々藥舖たり。

玄澄、寛政四年正月十一日を以て生る、幼にして學を好み、奥田鶯谷に從つて經史を修習す、歲十三、淺野春道の門に入りて醫を學び、內科を練磨すること殆二十年に至る、門戸を開くに及び、苟くも其技を衒賣するを欲せず、心を潛めて、益々其術を研く、一日感ずる所あり、憤然として笈を負ひ、紀州に往きて華岡青洲を師とし、外科を學ぶこと四年、其蘊奥を極む、是に於て內外の治方通せざるなし、歸りて居を傳馬町に卜し業を開く、遠近治を請ふ者麕集し、聲名一時に嘖々たり、天保五年初めて目見を許され、十一年命に依りて俊恭院の疾を診し、弘化二年俸三口を給せらる、嘉永三年召されて奥醫師の次に班し、改めて廿五石五口

俸を給ふ、是時に當り前藩主齊朝病篤し、依て命を受けて藥を進む、慶勝國に就くに及び、恩遇愈々厚く、六年遂に奥醫師に進み、本秩三十俵と併せて百俵を給ふ、尋で侍醫となり、別に五十俵を加へらる。

玄澄、人と爲り清廉、然れども醫員に陞りしより以來、未だ敢て勤仕を廢せず、亦以て其孤養の方あるを知るべし、平生敦厚にして方正、學藝を以て人に驕らず、業餘好で畵を作り、其子弟を教ふるに恂々倦まず、故に門下多く善醫を出だし、藤浪萬德最も著る、嘉永六年十二月十四日歿す、享年六十二、關貞寺（東區大曾根町）に葬る。

玄澄、井深氏を娶り、二男二女を生む、長男玄壽、長女某皆先つて歿し、二男增次郎已に出でて姻家笹田氏を嗣ぐ、因て兄の子玄春を養ひ、次女を以て之に配し、家業を繼がしむ。（墓碑）

五四　村瀨立齋

村瀨立齋、名は有本、字は泉卿、立齋は其號なり、美濃上有知村の人、兄藤城は文學を以て聞え、弟秋水は畫を以て名あり、立齋寛政四年五月十三日を以て生る、年十四名古屋に來りて醫を神波船樹に學び、文化十三年業を府下に開く、時に年二十五なり、既にして術大に行はれ、年四十に及ぶ比、名聲大に振ふ、弘化二年俸三口を賜ひ、嘉永四年七口俸を賜ひ、擢でられて醫官となる、同年十一月十八日歿す、享年六十、光勝院（中區門前町）に葬り、即佛心軒知止道泰居士と法諡す、立齋容貌奇異、面長く目秀で、殆ど雜漢中の人物なり、性甚だ急にして、意常に轉す、唯臨池を好み、終身筆を把りて倦まず、蓋醫と書とを以て命と爲す者なり、族弟太乙常に目するに俗物を以てす、立齋笑ひて曰く、醫は固より俗なり、俗物たらざれば醫行はれず、徒に風流と稱して豈可ならんやと、義子益齋、名は天寵、字は士承、立策と稱す、布袋野村の人なり、家を承けて業を繼ぐ。（碑文、醫家姓名錄、名古屋人物史料）

五五　村瀨豆洲

村瀨豆洲、名は喆、字は白石、豆洲は其號なり、本氏は堀田、幼名を彦次郎といふ、天保元年五月十一日生る、年十五村瀨立齋に從ひて醫を學ぶ、立齋歿して更に益齋に學び、嘉永六年業を卒へて董齋と稱す、時に年二十四なり、翌年益齋歿して嗣子尚ほ幼なり、依りて益齋の第二女に配し、村瀨氏を冒して改めて立齋と號す、慶應二年藩主謁を賜ひ、七月公子の病を診す、明治元年命ありて常に公子を診す、翌年擢でられて醫官となり、五口俸を賜ふ、尋いで侍醫となりて俸十八口を增す、後藩主に東西に扈從す、是より先益齋の長子立庵を嗣とす、明治十年家を立庵に讓り、改めて豆洲と稱す、十九年朝廷皇子の尙藥たらしめんとし、徵すこと再三に及ぶも病を以て辭して就かず、二十一年召命急なり、依りて東京に上る、乃ち奏任官を拜し、年金一千八百圓を給ひ、淺田宗伯、福井貞憲と與に皇子昭宮を拜診す、九月三十日

皇女常宮降誕したまふに及び、尙藥となる、十一月昭宮薨じ、常宮健康人に勝れたまふ、侍醫洋醫を以て尙藥たらしめんことを請ふあり、豆洲之を聞きて職を辭し、十二月家に歸る、時に立庵已に歿し、其弟立策家を繼ぐ、立庵の子甲子太郎西洋醫方を學び、同じく業を開く、依りて文墨を弄して餘生を娛み、明治三十八年三月十日歿す、享年七十六、光勝院に葬り、芥須彌界豆洲處士と法諡す。（藩士名寄、碑文）

五六　柳田良平

柳田良平、名は政矩、字は鵬巢、凌雲と號す、又云々子、太平山人、復古齋等の號あり、良平は其通稱なり、中島郡馬寄村の人にして、京に出でて、醫を中神琴溪に學ぶ、琴溪は古醫方を唱へ、識見と膽略とを以て古方家中に傑出し、治術の妙を以て世に鳴る者なり、既にして業成りて歸り、名古屋に出でて門戸を張る、名聲漸く盛にして、治を乞ふ者門に滿つ、良平、矮軀にして膂力あり、健步比なし、深く甲斐德本を慕ひ、廣く古今の法を參酌し、村老野媼の術と雖も、其療病に益ある者は、悉く之を究めて診病、處方、施術に應用す、嘗て門人に示す所の詩あり、曰く、讀書不博學難成、取捨從宜道自明、先哲立言多得失、勿甘糟粕殺蒼生、晩年蘭法を修め、識の廣達、術の精勵、益々加はる、藥園を興して藩に獻じ、弘化元年俸三口を給ひ、用人支配となる、安政六年寄合醫師となり、俸七口を給ひ、同年十二月十八日歿す、享年六十三、守綱寺（中區矢場町）に葬る、著す所醫方要略二卷あり世に行はる、義子政泰、通稱は泰治家を繼ぎて番醫となり、維新の後一等醫に列す、門人に關島良致、關島良載、伯正副、塩津直俊、中田忠朗等あり。（墓碑、藩士名寄、醫方要略、日本醫學史）

五七　藤浪萬德

藤浪萬德、名は謙貞、字は仙篁、方岳と號す、萬德は其通稱なり、尾張海東郡津島新田の人、寛政十年十一月十日生る、父を八右衛門清光といふ、其先藤浪式部卿光春に出づ。

萬德、歲十六、藩の侍醫小林亮適に從て醫を學ぶ、既にして亮適、藩主の女維君の近衛基前に適くに隨ひて京都に赴く、萬德之に伴はれて京に入り、頼山陽に從遊す、既にして歸り、適々三村玄澄の外科を紀伊の華岡青洲に學び、蘊奥を極めて還れるを聞き、乃ち家を弟八三郎に傳へ、往て玄澄に師事す、玄澄は亮適と舊あるを以てなり、尋で玄澄擢でられて侍醫となり、名四方に噪しく、治を請ふ者門に滿つ、萬德孜々力を其間に盡し、內外の治療經驗せざるなし、玄澄大に之を愛し、遂に勸めて業を上田町（今久屋町）に開かしむ、實に天保十年正月なり、幾もなく業大に行はれ、名聲頗る振ふ、人玄澄弟子ありと稱す、十三年始めて目見を許され、文久三年正月藩主茂德に扈して京に赴く、六月醫員に列し俸七口を給せらる、元治元年奥醫師に遷り、改めて秩廿五石俸五口を給ふ、十一月征長の役に從ひ奏章服及黃金の賞を受く、

萬德、人と爲り豁達にして氣慨あり、龍榮を受くと雖も未だ嘗て驕誇の色を見さず、業餘其楓谷の園に文雅の士を會し、酒を設け、豪談自ら適し、頗る塵表の人たり、慶應三年七月二十一日歿す、享年七十、橘町崇覺寺に葬る、子無し、姪龍德を養ひて嗣となし業を繼がしむ。（墓碑）

五八　藤浪萬得

藤浪萬得、字は龍德、斧山と號す、父を門保といふ、母は橋本氏、天保十三年三月十三日、尾張海東郡津島新田大野山に生る、幼にして名古屋に來り、伯父萬德に依りて醫術を研鑽し、尤も外科に精し、萬德命じて其家を嗣がしむ、慶應三年尾藩侍醫の職を襲ひ、維新の際藩主に從ひて東西に奔馳す、藩廢せらるゝに及び、家居して病客に接す、遠近來りて治を請ふ者恒に門に滿つ、人と爲り、清にして和、善を樂み、施を好み、溫乎として春の如し、博く書史に涉り、詩を嗜み書を能くし、風流韻事を愛す、其讀書の室に名けて養愚庵といふ、刀圭の暇、文人雅客を延き、酒を置き茶を點じ、嘯詠揮灑して以て樂となす、大正四年四月六日歿す、享年七十四、覺王山に葬り、法諡して大成院斧山といふ、小出氏を娶りて五男二女を生む、長子鑑、四子剛一、共に醫學博士たり、五子由之文學士たり、次女は醫學博士森島庫太に適き、餘は皆早く歿す。（碑文、牧山樓文鈔、崇覺寺過去帳）

五九　吉田高憲

吉田高憲、雀巢庵と號す、通稱は平九郎、初め世良太郎と稱せり、尾張の士にして祿百石を食む、文政六年十二月、父平九郎の後を襲ひ馬廻組となり、尋で寄合組となる。

高憲、本草學を好み、木曾御嶽、駒ヶ岳等、其他の諸高山に採藥し、又後園に栽培する所の植物極めて夥多なり、其鑑識精細、夙に背百社同人の間に推され、飯沼慾齋の如きも、平素質義教を受けたり、每春自家に博物會を開くを例とす。

高憲、又好古の癖あり、神谷三園、岡田文園、小寺玉晁、小田切春江等と共に同好會を設け、月每に相會して古器、古文書、古書畫等を鑑賞す、安政六年八月廿四日歿す、七寺（中區門前町）に葬る。（藩士名寄、錦窠翁九十賀答博物會誌、感興漫筆）

六〇　中島養忠

中島養忠、名は行信、號は誠拙、養忠は其通稱なり、享和元年正月廿七日、筑後三池村に生る、家世々立花侯の臣たり、父洲平二子あり、長は即養忠なり、一日二子に謂て曰く、余聞く醫は仁術なりと、今幸に兩兒の在るあり、一人をして醫たらしめんと欲す、汝等孰れか之を諾すると、養忠曰く、兒不敏と雖も願はくば命を奉ぜんと、是に於て刀を棄てゝ方伎を學ぶ、歲十

四筵を負ひて江戸に出で、幕府の侍醫小川龍仙院を師とす、琢磨すること年あり、學力療法俱に進み、遂に業を都下に開く、然るに多難に遭遇し、殆んど活路を失するも、百折撓まず、刀圭の暇、尙ほ研鑽して已まず、終に其蘊奥を極むるに至る。

時に德川齊莊、田安にあり、召して侍醫となす、天保十年齊莊入りて尾張の統を繼ぐに及び、復召して奥醫師格となし、廿五石五口糧を給ふ、翌年奥醫師に進み、新に職俸百俵と世襲三十俵とを給ふ、後累りに俸を增し職俸二百俵世襲五十俵に至る、養忠藩に仕ふること三十餘年、五代に歷仕し、貞愼、貞德二夫人の執匙を兼ね、屢々恩命あり、最も寵榮を極む、人と爲り、誠實遜讓、人に接するに樂易、久しうして人愈々之を慕ふ、明治廿二年四月廿九日歿す、享年八十九、小川町妙本寺に葬る、歿するの時德川貞德院其舊勞を追思し、金若干を贈らる、養忠高木氏を娶る、子無し、從弟忠順を養ひて嗣と爲し、芳郎を生む、皆先つて歿す、曾孫甲子郎家を承く、（墓碑、名古屋人物史料三ノ四七）

六一　伊藤圭介

伊藤圭介、初名は舜民、字は藏堯、后清民、字を圭介と改む、小字は左仲、通稱圭介、錦窠、又太古山樵と號し、別に花繞書屋、十二花樓等の號あり、名古屋の醫西山玄道の第二子にして、母は野間氏、享和三年正月二十七日名古屋呉服町の家に生る、兄道濟出でて大河内氏を襲ぎ存眞と稱す、圭介父の命に依りて舊姓伊藤に復し、父兄に從ひて儒と醫との學を修め、箕裘の業を繼ぐ、性植物を好み、暇あれば父兄に和漢の名稱を質し、又水谷豐文に就きて本草學を修む、乃ち諸先輩と共に、尾張、三河、伊勢、志摩、美濃、信濃の諸州に至りて動、植、鑛諸物を採集し、文政四年京都に遊びて斯學の名家と往來し、藤林泰助に從ひて洋學を攻む、翌年更に山城、大和、攝津、伊勢、志摩等の山野を跋渉す、九年三月獨逸人シーボルト將軍に謁せんが爲、江戸に赴く、途次熱田驛を過ぐ、圭介、豐文、存眞と共に之に會見して互に神益する所少からず、圭介別るゝに忍びず送りて鳴海に到る、シーボルト別に臨みて、長崎に於て再見せんことを告ぐ、是を以て圭介長崎に遊ぶの念勃々として禁ずる能はず、然れども事容易ならずして未だ父兄の許可を得ず、十年又攝津、三河、遠江、駿河の諸州に植物を採集し、尋いで江戸に出でて宇田川榕庵の家に寓すること一月許、相伴ひて日光に採集し、別れて榛名、妙義より木曾を經て國に歸る、是より先長崎游學の事を父兄に請ふこと再三、遂に其許を得て歡喜に堪へず、江戸よりの歸裝を解くに遑あらずして再び長崎に向ふ、時に年二十五なり、九月長崎に着するや、大通辭吉雄權之助の家に寓し、シーボルトを訪問す、シーボルト喜ぶこと限なし、乃ち著崎の翌朝より出島の蘭館に出入し、植物腊葉の鑑定に從事し、熱心研究して以て翌年歸途に就くの前日に至る迄、一日も休廢せず、當時同窓の友は高良齋、高野長英、岡研介、賀來佐一郎、林洞海等の數十人なり、長崎に在ること殆んど半歲、老親の堂に在るを以て

永く留ることを能はず、遂にシーボルトに別を告ぐ、シーボルト亦別を惜み、其珍藏する所のツンベルグ著す所の「日本植物書」を贈りて之に餞し、且つ告げて曰く、君此書を繙きて學術を裨益せよと、ツンベルグは林娜の高弟にして、後林娜の講座を繼ぎし人なり、夙に我國に來りて植物を研究し、此書を著せり、圭介歸途九州及び播州に採集し、家に歸るの後、業餘此書を熟讀し、書中載する所の日本植物の羅甸名に和漢名を充て、別に林娜二十四綱の分類法を譯述し、其族種を註解して「泰西本草名疏三冊を著し、文政十二年之を刊行して官に獻す、今植物學の常用學語となれる雄蕊、雌蕊、種、類等の語は實に圭介が本書の譯述に當りて創めて用ひし所なり。

圭介の長崎より歸るや、蘭法醫術を開業す、當時未だ洋法を講ずる者幾んと希なるを以て、世人觀て奇異となし、或は稱して邪法といふ、圭介更に意に介せず、日に蘭書を講究し、傍ら博物學を研究す、是より先其長崎遊學の前に當り、同好諸人相謀りて諸物品を圭介が修養堂に陳列し、稱して藥品會といひ、衆庶の縱覽に供せり、蓋し是れ後年博覽會の濫觴なり、天保三年九月、又修養堂に第二回の藥品會を開く、後此種の會を開くこと數々にして、博物學の思想を世に弘布せるの功蓋し少からず、同年本會及び戸隱に植物を採集し、九年江戸域建築の木材を木會に採伐するに臨み、圭介其人夫病用手當の爲に出張の命を受け、山中の假小屋に起臥すること數月、深山幽谷を跋涉して、珍草奇木を發見せること尠からず、嘉永五年、及び安政二年には伊吹山に採集し、安政二年又山城の諸山、攝の有馬、勢の朝熊、志の青峯に、同五年吉田平九郎、飯沼懋齋と共に菰野山中に採集す、此歳朝日町の別業に藥園を開設し、號して旭園といひ、草木を培養し、後此處に於て博物會、及び嘗百社の會合をなせり、天保八年諸國凶歉にして、飢餓の民相次ぐ、圭介乃ち「救荒食物便覽」を編し一張紙となして之を梓行す、藩主見て之を便とし、版を圭介に借りて數千紙を印刷し、封内各地に之を頒つ。

圭介、上田仲敏と謀り、洋學堂を仲敏の邸に設け、同志の徒に教授す、天保十二年洋字篇の著あり、圭介の長子圭造及び門人西村良三（後に柳河春三といふ）の參訂する所にして、毎冊に、不出門關、嚴禁寶貨の印を捺す、偶々高野長英逃れて名古屋に來り、某所に匿る、時には圭介の家に泊することあり、是に於て窃かに共に蘭學を研究し、或は砲術を講習す、名古屋の洋學をして盛ならしめしは、長英の力暗に與りて效あり、時に外國との關係漸く繁からんとす、弘化四年十一月、藩圭介が蘭學に通ずるの故を以て、用人支配となし、嘉永元年二月洋書中當時に緊要なるものを翻譯して差出すべきの命あり、因りて「乍川記事詩」二冊を鈔錄校刊す、尋いで「表忠詩鈔」三冊を刊行す、皆清國を以て殷鑑となし、時事を諷するの意なり、後サルモンスの「日本篇」一冊「遠西硝石考」四冊を譯述して、遂次之を藩主に獻す、嘉永五年外艦來襲の風說ありて上下狼狽す、圭介乃ち三百目加農砲を鑄造し、自ら毫を揮ひ銘して丹心報國といひ、之を藩主に獻す同年五月、種痘法を創むるに方り、藩圭介に命じて調査せしむ、始めて種痘

所を開く、是より前天保十二年、圭介嘆咭唎國種痘奇書を校刊す、而して種痘を創むるに方り、一人の其術を乞ふ者なし、依りて先づ己の次女及び一貧民の女兒に施し、後貧家に就きて錢を與へて施術し、又近村に人を派して幼兒を求め、百方勸說して漸くに信を得、遂に施術を乞ふ者日に多きを加ふるに至る、同年八月藩主圭介が蘭學に志厚く、又廣く治療を施すの功を賞して俸三口を賜ふ、安政六年六月、寄合醫師となり、俸七口を賜ふ、文久元年九月幕府の令によりて江戸に出で、蕃書調所物產學出役を命ぜられ、俸二十口、支金十五兩、及び藩主より支金十兩を賜ひ、十月物產局教員となる、三年十二月に至りて辭して名古屋に歸る、時に虎列拉病諸國に流行す、乃ち「暴瀉病手當素人心得書」の小冊子を上本して世に行ふ、慶應元年奥醫師見習となり、廩米二十五石、俸五口を賜ひ、明治二年十八石を加賜す、三年閏十月種痘所頭取となり、病院開業掛を勤め、手當として現米拾石宛を賜ふ、同月政府の召命あり、乃ち東京に出で、十二月大學出仕を命ぜられ、少博士准席となり、四年七月文部省出仕となり、尋いで文部省教授、編輯權助、文部省七等出仕博物專務となり、六年四月編書課に入りて「日本產物志」の編輯に從ふ、十年九月東京大學理學部員外教授に任じ、植物園に於ける植物取調掌當を命ぜられ、傍ら教育博物館出勤を命ぜらる、十年內國勸業博覽會の開かるゝや、其審査官に任じ、後十四年第二回博覽會の時、亦審査官に任ず、十二年三月東京學士會院會員に推選せられ、十三年十一月小石川植物園掌任を命ぜられ、十四年七月東京大學教授に任ず、九月正六位に叙し、翌年六月勳五等に叙せらる、十五年從五位に進み、二十年勳四等に陞叙し、二十一年理學博士を授けらる、二十五年九十歲賀壽の博物會を名古屋博物館內に開く、二十六年從四位に陞叙し、三十四年一月廿一日特旨華族に列し、男爵を授けられ、勳三等に陞叙し、東京大學名譽教授に推さる、此日卒す、享年九十九、谷中墓地に葬る、

圭介、人と爲り精勵、其好む所は讀書に在り、少壯より未明に起き、燈に對して書を讀み、三食の間と雖も亦倦に書冊を離さず、平居書齋中前後左右書帙を堆うし、其間に在りて意に隨ひて抽出して讀む、又瓦癖ありて古瓦を蒐集し、頗る貯藏に富む、後悉く之を名古屋博物館に納る、嘗て上田桃逸に畵法を問ひ、好みて墨梅墨竹を作り、又好みて詩を詠ず、往年シーボルトに贈るに日本植物腊葉十餘冊を以てす、シーボルト之を貴重し、携へて歐洲に歸り、今之を和蘭ライデン府博物館に藏す、蘭人ゲールツ其著書中に圭介を稱揚し、又同國の植物學者ホフマン、シュルツ、ミケル等、並に此腊葉に付きて研究報告し、ミケル亦其著書中に精密なる解說目錄を載す、之を以て圭介の名夙に西洋學者の間に尊重せられ、明治七年其多年刻苦して編纂せる日本植物圖說草部第一冊を出版するや、好評嘖々たり、同年獨逸政府派遣せる所の、プランクフルト工藝學校教頭博士ライン、圭介に就きて其知らざる所の植物の羅甸名を問ひしに、應答流るゝが如く、一の知らざる所なかりしを以て、欣喜措かず、其博識に服し、歸りて後其著「日本」に其人と爲りを稱す、我國の植物にして圭介の發見せる

物頗る多し、故に歐米の學者、命ずるにケイスケの名を以てするもの少からず、而して我國に渡來せる歐米の植物學者は圭介を訪はざる者なく、或は政府に紹介を求めて、通信を依賴する者あり、瑞典ストツクホルム府王立學士會院は銀牌を寄贈し、伊太利ウエニチア府に開會せる萬國地學公會は、我政府の出品せる日本產物志に對し、圭介に第二等賞牌を贈り、而して又英國皇立亞細亞協會北支那支部の通信員に擧げらる、其著譯せる所は、前に記せる泰西本草名疏、日本產物志（山城、武藏、近江、美濃、信濃の各部）日本植物圖說草部第一冊等の外、小石川植物園草木目錄前後編、小石川植物園草木圖說（賀來飛霞と共編）本邦博物學起原沿革說、花史雜記、救荒植物集說、有毒植物集說、輿地紀略、硝石篇（遠西硝石考を改訂せるもの）及び洋洋社談に載する所の短篇數十編あり。（藩士名寄、明治十二傑、汲古）

六二　平出順益

平出順益、名は延齡（ながよし）、字は修甫、鈍阿と號す、順益は醫の通稱にして、別に古今園龜壽、又蓬廬屋と號す、熱田杉江某の長子にして文化六年四月二十日生る、幼にして俊才あり、父淨琉璃を好み、順益をして之を學ばしめんとす、順益肯かずして醫を山崎榮茹に學び、後淺井貞庵に就く、其學を攻むる勤勉にして、日に熱田より名古屋に出で、風雨寒暑未だ一日も業を廢せず、時に名古屋の醫平出順益、其師柴田龍溪の女を養ひ、之が配偶を求む、杉江氏の子の俊秀なるを聞き、强ひて請ひて己が嗣となす、依りて平出氏を冒す、時に年二十一なり、天保二年十一月八日、父順益歿す、乃ち家を繼ぎ、其稱を襲ふ、十四年藩主謁を賜ひ、班一級を加ふ、安政三年用懸締方となり、五年用人支配に進む、順益他の嗜好なし、唯讀書を好み、其業盛に行はれ、身繁劇を極むと雖も、寸暇を得れば、必ず書を引きて之を讀み、其病家に至る、輿中常に書を携ふ、之を以て能く和漢の學の大意に通じ、當時永坂周二、小寺玉晁、松尾屋千瑜、天竺花老人、松井蒼龍、水野睡蹇、中西金陵と耽古連八天狗と稱し、順益其棟梁たり、曾て曰く田宅を買ひて子孫に遺せば、子孫安逸に長じ暗愚に陷る、如かず書を贖ひて貽さんにはと、是を以て金を得るに隨ひて書を買ひ、吏子百家より、國籍舶來の書、小說野乘に及ぶ迄、世間希有なる所の物、併せ蓄へて遺さず、實に棟に充つ、皆順益の畢生拮据して索めし所なり、文久元年十月三日歿す、享年五十三、光蓮寺に葬り、無垢庵白瑛居士と法諡す、子順良家を嗣ぐ。（碑叢、人物圖會、墓碑）

六三　平出順良

平出順良、名は延基（ながもと）、字は子宥、琴籟と號す、順良は醫稱なり、父は順益、母は柴田氏、箕裘相繼ぎて三世醫を業とす、植松茂岳に從ひて國典を學び、興到れば時に畫を作る、明治の初め轉じて西洋醫術を修め、後名古屋醫務取締に擧げらる、明治二十二年十二月二十一日歿す、享

年五十五、光蓮寺（東區駿河町）に葬り、酒落齋光風霽月と法諡す、加藤琵琶彦の女を娶りて數子を生む、長子謙吉業を繼ぎ、次子鏗二郎は史學を以て名あり。（墓碑、家蔵、光蓮寺過去帳）

六四　石井隆莽

石井隆莽、名は絢（初名超）、字は廷禮、澹翁、又澹雅樓と號す、初め見龍と稱し、後隆庵と改め、又隆莽に更む、山田梁山の第三子にして、文化八年四月五日生る、年十九、出でて石井恕庵の嗣となり、依りて石井氏を冒す、幼にして父梁山、兄貞石に從ひて醫を學び、又淺井貞庵、榮山父子に從學す、石井氏の祖隆庵、父恕庵並びに尾張侯の奥醫師たり、隆莽天保二年家を繼ぎて寄合醫師となり、五年奥醫師格となりて前藩主齋朝の侍醫に擢でらる、時に年二十四なり、少壯にして此命を受く人咸な之を榮とす、天保八年維學心院付となりて京都に在ること十年、奥醫師に進み、歸りて後常に藩主に侍して、東西に扈從し、又諸公女の療養を掌る、石井氏初め世祿三十俵たり、隆莽に至りて百俵を賜ひ、加俸を合せて三百俵に至る、隆莽人となり英邁にして學を好む、夙に西洋醫法を吉雄常庵に學び、京師に在るの間、又日野昴哉の教を受く、而して又詩文を貫名海屋に學び、都下の名流に交る、慶應三年命を受けて藩内町村醫師の業を監督し、後明治三年に至る迄之に從ふ、明治三年藩廳名古屋病院を創設するに方り、病院開業掛りとなり、又伊藤圭介と共に種痘所頭取を命ぜらる、是より前十九年隆莽等種痘法を創めんことを請ふ、漢醫の徒擧りて之を排斥し、淺井榮山の如き、種痘を以て人を獸に陷るゝものとなし、隆莽を罵りて國賊となし、其頭を歐打するに至る、隆莽屈せず、益々其事に務む、藩遂に嘉永五年八月を以て種痘所を設け、隆莽及び大河内存眞、伊藤圭介の三人に命じて之が取締たらしむ、藩中種痘を行ふ、實に隆莽等に始まる、維新の後尚ほ舊主德川氏の醫となり、明治十七年三月四日歿す、享年七十四、阿彌陀寺（中區門前町）に葬り、順興院豐譽隆莽居士と法諡す、子梧岡詩を以て名あり。（藩士名寄、名古屋人物史料、淺井氏家譜大成、種痘所用留、阿彌陀寺過去帳）

六五　鈴木常明

鈴木常明、名は保、小字鍋介、通稱は容藏、後節齋と稱す、快然堂、清高軒等の號あり、文化八年四月、本府玉屋町に生る、鏡屋正七（由之）の長子なり、性學を好み、鈴木雛屋の門に入つて國學を修む、天保四年、京師に出てゝ香川景樹を訪ひ、城戸千楯、植松茂岳等と交遊す、常に醫に志し、文政十二年、奥詰醫師淺井氏の門に入り、本道醫術を修む、天保二年、奥詰醫小笠原定菊に就いて外術を修む、五年京師に上り、小石元瑞の門に遊び、蘭法醫術を修め、小森宗二に就き、蘭學を學ぶ、在學九年にして、天保十四年、名古屋に歸り、業を開く、十五年五月、藩醫三段席を拜命し、帶刀を許さる、弘化二年二段席に進み、嘉永二年一段席に陞る、四年十二月、御目見仰付

けらる、是より先き嘉永三年正月、京都の醫長柄春龍より種痘法の傳授を受け、奥詰醫伊藤圭介等と計り、種痘所を設置し、廣く種痘を施行す、是れ實に名古屋に於ける種痘の嚆矢なり、五年十一月、種痘締方を命ぜらる、安政二年、外科醫免許を受け、五年、本道御用掛を命ぜらる、元治元年、本業を以て尾藩の長州征伐に隨行し、無事任を全うす、開業以來來り學ぶもの數十人に至る、明治三年十月四日、病んで桑名町の家に歿す、年六十、大法寺（東區小川町）に葬る、養嗣客庵故ありて離緣し、竹居津奈女養はれて戸主となる、常明性、酒を嗜み、徹宵痛飲、時事を談ず、其京に在るや、浮田一蕙齋と友とし善し、其國に歸るや、喜田華堂、渡邊清等と雅遊す、常に天下の大勢に著眼し、家人、門弟を誡む、又地理製圖等に於て頗る精を極むと云ふ。（鈴木常明履歷摘要）

六六　永坂周二

永坂周二、名は德彰、一桂堂と號す、用人支配の目見醫師にして、最も外科に長ぜり、慶應元年藩其醫業に精勵し、治療の及ぶ所廣きを賞し、俸三口を賜ふ、周二人となり鴻才、古書古物を愛し、收藏する所極めて多し、狂歌を柴田海城に學びて龍風園平器と號し、又平出順益、小寺玉晁等と交り耽古連中と號す、所謂八天狗と稱するものゝ一なり、慶應三年十月五日歿す、享年六十、照遠寺（東區小川町）に葬り、永山院臥雲日深居士と法諡す。（藩士名寄、人物圖會、墓碑）

六七　松井雨白

松井雨白、名は吉滅、字は益江、雨白は其號にして、別に泉壽亭、躑躅園、胡桃園等の號あり、通稱は丹右衛門、老後白翁と稱し、又朝寐齋醉兮と戲稱す、尾張の世臣にして祿二百石を食む、天保十一年家を繼ぎ、後大番に列し、萬延元年西洋銃陣調練に付火藥締方を命ぜられ、年々雜用銀二枚を賜ふ、元治元年書院番に轉じ、明治元年軍事調方、軍事奉行助役となる、尋いで書院番に復し、二年十月退隱す、雨白本草を好み、嘗百社に入りて水谷豐文の教を受け、後伊藤圭介に從ふ、又歌を中尾義稻に、俳諧を小澤さゝをに學び、畫圖を高力種信に學ぶ、是を以て其植物の寫生頗る密を極む、明治十七年八月二十四日歿す、享年七十一、大光院（中區門前町）に葬り、法雨潤白居士と法諡す、子鶴羨俳諧に名あり。（藩士名寄、名古屋人物史料）

六八　小鹽五郎

小塩五郎、名は芳賢、幼字は三千五郎、人呼んでミイスといふ、依りて自ら亦ミイスと稱し、後三居巢の文字を充てゝ雅號となす、藩士小塩新左衛門親賢の第五子なり、少壯朝倉氏の門に入りて射術を修め、又本草を吉田平九郎の門に學ぶ、而して一旦其養子となりしも、後平九郎の子を生むに至り、自ら辭して家に歸る、凡採藥の地、孤野、伊吹、惠那の諸山、數々登攀

を經、又御嶽、駒ケ嶽、富士等の高山皆其採集を經ざるなし、最も識名に長じ、且つ鳥獸、魚介、昆虫の類其寫生の巧妙、實に天性に出づ、伊藤圭介、常に推重して交情極めて厚し、人と爲り恬淡寡欲、貧に處して晏如たり、人の乞ふ者あれば奇草異花も惜まずして之を與へ、偶々報ゆるに錢を以てする者あれば、直に酒を沽ひて其人と對酌し、陶然一醉以て娛とす、明治二十七年七月二日歿す、享年六十五、本要寺（東區小川町）に葬り、總持院藥草日採居士と法諡す。（墓碑、汲古草稿）

六九　服部培園

服部培園、名は惟馨、梅園と號す、初め培玄と稱し、後培園に改む、尾張の士成田氏の子にして、出でて醫服部有慶の嗣となる、學を好みて澤田眉山、阿部松園の二家に從遊し、又醫を父有慶、及び大河內存眞の門に學ぶ、曾て淺井篤太郎を助けて、漢醫復興の爲に力を致す、人と爲り文雅にして詩を能くす、大正元年一月八日、年八十にして歿す、法輪寺（東區小川町）に葬り、霍春院梅園日馨居士と法諡す、子富三郎、悔庵と號す、佐藤牧山に學びて、儒を以て名あり。

七〇　司馬盈之

司馬盈之、字は子虧、損軒と號す、別に無影、樹下、船樓等の號あり、初め凌海と稱し、後に諱を以て稱となす、本氏は島倉、父は榮助、母は山本氏、天保十年十一月二十八日生る、世々佐渡に居り農を以て業となす、盈之に至りて始めて醫を學び、家を弟某に讓り、氏を司馬と改む、蓋し島と司馬と邦音相近きを以てなり。

盈之、天資聰敏、博聞强記、其書を讀むや、一見して誦を成し、年を經るも一字を誤らず、九歲にして能く詩を賦す、十二歲の時祖父伊右衛門に從ひて江戸に出で、唐津藩儒山田寛に就きて漢籍を學ぶ、學日に進み人皆神童と稱せり、尋いで幕府の侍醫松本良順の門に入りて、始めて蘭學を攻む、又佐倉藩佐藤泰然に就きて醫術を修め、留ること六年にして鄉に歸る、後再び江戸に遊び、良順に隨ひて長崎に至り、蘭人ボムベを師として益々醫術を研く、居ること三年業既に成る、乃ち漫遊して平戸に至り、遂に留りて業を開く。

盈之ボムベの說により、七種の新藥を擧げて、其健康作用と、醫治效用とを論じ、七新藥二卷を著し、之を刊行す、時に文久二年なり、所謂七種の新藥とは、沃顚（文化八年發見）硝酸銀、酒石酸鹽鉛、（吐酒石）規尼、珊篤尼、莫、非（文化元年發見）肝油を指し、其方藥の名稱の如き、一に化學的の名稱を用ひて、世の耳目を一新せり、是に於て名聲始めて海內に聞ゆ。

平戸に寄寓すること二年にして鄉に歸るや、佐渡奉行の拔擢に遇ひ、醫官兼洋學師範役となる、幾も無くして辭して又江戸に遊び、專ら英學を攻む、時に朝廷新政を布き四方の俊才を拔くや盈之擧けられて徵士となる、明治元年三月、始めて三等醫學教授となり、專ら演

譯講述を掌り、善く學生を誘導して、大に我が醫學開進の基を立つ、五月二等教授に進み、二年七月大學大助教に任じ、從七位に叙せらる、三年三月少博士に轉じ正七位に昇叙し、四年四月本官を以て兵部省病院出仕を兼ぬ、七月更に文部少教授に任じ、尋いで中教授に進み、從六位に叙せらる、五年正月東校教場の事を管理し、遂に大教授に進み正六位に叙せらる、九月文部省五等出仕に補し、六年十二月兼ねて宮内省五等出仕に補せらる、七年十月兩省の出仕を免じ位記を奉還す、八年五月元老院少書記官に任じ、再び從六位に叙せられしも十二月本官を免ぜられき。

明治九年五月、愛知縣病院醫學校教師に聘せられ、居ること一年期滿ちて職を解く、是に於て業を名古屋に開く、遠近治を乞ふ者殆常に戸外に盈つ、沈痾痼疾を救療して其功を著す者枚擧に遑あらず、而して業餘徒を會して講授し、諄々として倦まず、嘗て病院、醫學校を私設するの志ありしが、偶々肺患に罹り、荏苒愈えず、因りて伊豆の熱海に轉地し療養を加へしも病益々重きを加へ、將さに東京に歸らんとして、相摸戸塚に到りて終に歿す、享年四十一、實に明治十二年三月十一日なり、遺體を東京に送り、駒込千駄木町總禪寺に葬る。

盈之、才力俊邁、六國の語に通じ、殊に獨、英、蘭の學に精し、獨逸の醫ミルレルの聘に應じて來朝するや、我が國未だ彼の國語を以て應接する者なきを以て盈之獨逸語を學ぶこと僅かに五個月、乃ち出でて之に接す、言辭爽快、毫も澁滯する所なし、ミルレル以て獨逸に留學せりと思惟し、問ふに在留の年數を以てせりと、其鋭敏概ね之に類す、其東京に在りしや、私塾春風社を創開し、專ら獨逸學を教授す、教を受くる者、一千有餘人の多きに達す、又獨和對譯字書を著して、之を刊行し、首として獨逸學を我が邦に行ひしは、盈之の功實に多きに居る。

明治十五年三月、門人後藤新平、瀧浪圖南等一百餘人相謀りて碑を大光院（中區門前町）に樹て、其事蹟を不朽に傳ふ。（碑文、本朝醫人傳、日本醫學史）

七一　横井信之

横井信之、一の名は駿、字は玄黄、晩翠と號す、幼名信作、後退藏と改む、祖父忠右衛門犬山成瀬氏に仕へて用人たり、其次子貞治、幼にして醫に志し、名古屋に來りて永坂養二に從學すること八年、業成りて門を開かんとす、時に文政五年なり、會々三河安城の醫中根幸七歿して子無し、貞治依りて中根氏を冒し、業を安城に繼ぎ、大に民間の信を博す、貞治數子あり、貞藏、順造、貞毅、玄山、信之、俊造等なり、貞藏、横井氏に復し、醫を西端に開き、順造は伊藤兩村に養はれ、貞毅は福釜の農佐藤重造の嗣となりて、共に醫を業とす、玄山中根氏を繼ぎ、後父の名を襲ふ、信之弘化四年七月二十六日を以て生れ、後領主板倉侯の許を得て横井氏を稱す、年十一伊藤兩村に從ひて儒を學ぶこと三年、萬延元年名古屋に來り中野春載の門に入りて

醫を修め、兼ねて松本奎堂、村瀨太乙に從學すること二年に及ぶ、文久二年伊勢に遊び、土井聱牙の門に在ること一年、翌年正月下總佐倉に如き、佐藤尙中に從ひて蘭學及び醫術を修むること四年に亘る、慶應二年の末、東京に出でて松本順に從遊すること又一年餘、會々戊辰兵亂に際し、鄕に歸りて福釜に業を開く、明治三年三月徵されて大學少助敎に任じ、十一月大舍長准席となりて大阪に在勤す、四年四月中助敎に進み、大舍長を兼ぬ、八月大學東校を廢し、文部醫學校と改稱せらるゝに及び、文部中助敎に任じ、舍中監事を兼ね、尋いで權大助敎に陞る、五年二月大助敎に任じ、敎場監事を兼ね、十月大阪文部醫學校の廢せらるゝに及びて東京に歸る、尋いで陸軍一等軍醫に任じ、大阪鎭臺病院長となり、六年二月正七位に叙せらる、五月陸軍二等軍醫正に進み、七月從六位に陞叙す、七年二月佐賀の亂に際し、出張して勞あり、酒肴料を賜ふ、八月名古屋鎭臺病院長に轉ず、十年西南の亂に會し、大阪に出張し、四月大阪陸軍臨時病院副長を兼ね、六月當分大阪鎭臺病院長兼勤の命を受く、七月一等軍醫正に陞り、十一年六月佐賀及び西南の役の功を以て、勳四等に叙し、旭日小綬章を賜ふ、十二年三月愛知縣、委するに公立愛知病院並に醫學校長の職務を以てす、十三年五月に至りて之を辭す、十二年十二月正六位に叙し、十八年六月名古屋鎭臺軍醫長に補せられ、十九年四月陸軍軍醫監に任ず、五月東京鎭臺軍醫長に轉じ、勳三等に叙し、尋いで從五位に叙せらる、二十一年十一月第三師團軍醫長に補せられ、二十四年五月特旨正五位に陞叙す、同月二十一日腦卒中に罹りて卒す、享年四十五、淸安寺（東區東袋町）に葬り、法諡して貞信院釋仙窟大居士といふ、信之名古屋に好生館を開き、多く醫生を養成し、廣く病者を治療す、又地方の衛生、醫術の爲に貢獻する所頗る多し。（名古屋人物史料）

七二　佐藤勤也

佐藤勤也、碧海、又玉壺冰齋主人と號す、三河碧海郡福釜の醫佐藤貞毅の長子にして、元治元年八月六日を以て生る、幼にして其父を喪ひ、叔父横井信之に敎養せらる、明治二十三年東京醫科大學を卒業するや、直に大學助手の命を拜す、翌年信之の卒するに及び、名古屋に歸りて好生館副院長となり、專ら內科及び產婦人科を擔任す、四十年主論文〔惡性脈絡膜上皮腫殊ニ其組織的發生ニ就テ〕及び參考論文〔胎兒ノ膀窒扶斯感染及窒扶斯菌尿〕、「日本ニ於ケル膀胱及尿道結石殊ニ其理學的性狀ニ就テノ豫報（獨文）〕、「化膿性筋炎研究追加〕、「日本ニ於ケル卵巢囊腫瘍三百五十六個ニ就テノ病理解剖的及組織的知見補遺〕を提出して醫學博士の學位を授けらる、勤也人となり謹嚴寡默にして、極めて篤學なり、業餘書畫を愛し、詩を作るを以て娛とす、明治二十七八年戰役に際し、篤志醫員として診療に從へるの功を以て勳六等に叙せられ、又名古屋市傳染病院醫長、愛知縣防疫委員、愛知結核豫防會理事長、日本赤十字社愛知支部八事療養所顧問醫等となりて、力を濟生の業に盡すこと多年、其

間論文數百篇を發表して醫學界に貢獻せるの功、實に尠少ならず、嘗て愛知縣產婆試驗委員として、產婆の養成に務め、著す所に實用產科學、實用婦人科學、簡易產婆學等あり、偶々胃癌に罹り、大正九年五月二十四日歿す、享年五十七、開安寺に葬る、遺稿碧海詩集二卷あり。

（好生館醫事研究會雜誌第二十七卷一、二號）

第十四　天文曆數

一　鳥居圓秋

鳥居圓秋、名は千之、喜源次と稱し、圓秋居士と號す、尾張侯の臣なり、吉通の時、內證詰となりて歲俸十石月俸二口を賜ふ、後寛保四年に至り、步行組に轉じ、二石一口俸を加賜す、幼より心を天文推步に潛め、大野伯友に從ひて學ぶこと年あり、伯友は井口先生の門下なり、圓秋其傳を受け、蘊奧を精究し、頗る先人未發の妙あり、世出藍を以て之を稱す、延享元年夏、江戸に祇役し、秋八月三日、病を以て東武の官舍に沒す、享年五十四、江戸牛込宗圓寺に葬り、月照秋圓居士と法諡し、又城南法應寺（中區白川町）に墓を建つ、著す所曆儀新解、諸曆通解等あり、門人に植田憲政、川邊信一、眞野義敦、山中忠義、伊藤邦親、水谷集征、山田重要、鷲崎正知、片岡守興、岡野文猷等あり。（碑叢、墓碑、鳥居氏系譜、清淨寺碑文）

二　鳥居貞之

鳥居貞之、字は君亨、小字は和吉、曾之右衛門と稱す、圓秋の子なり、父に從ひて天文曆數を學び頗る之に通ず、延享三年俸を賜ひ、寶曆三年藩主の女賴君（近衞內前の室、鷹司院）の步行となり、歲俸

八石月俸二口を賜ふ、賴君薨ずる後小普請組に入り、明和元年恭君九條道前の室、光相院の歩行となり、尋いで病を以て辭し、三年地方目付となりて五石一口を加賜す、六年藩主宗睦の生母英巖院の侍となり、八年再び恭君の侍目付となりて、歲俸二石を加賜す、後公子勝長の用役並となり、歩行頭を兼ね、百五十俵を賜ひ、文化六年長圍爐裏番となり、勤勞の久しきを以て白銀の賞あり、同年十二月八日歿す、享年七十九、法應寺に葬り、了諦院觀叟義察居士と法諡す。（張城人物志、鳥居氏系譜、法應寺過去帳）

三　伊藤天說

伊藤天說、名は充申、字は齊旭、一字、又、天說老人と號す、人と爲り溫和雅馴、天文推步を善くす、嘗て職を奉じ郡國の吏に歷任し、後老を告げ月俸を給ひ、優游歲を卒る。

天說、聲利を悅ばず、常に酒を嗜み、陶然として醉ふ、醉へば亦世故に屑々たらず、安永三年七月二十日歿す、享年八十二、城南久遠寺中區南小川町に葬る。（墓碑、弊帚集）

四　葛谷子和

葛谷子和、名は實順、字は子和、美濃金華の人なり、人となり高明遠識、心を數學に潛め、事に丈量に從ひ、先人未發の理を發く處多し、名古屋に出でて敎授し、門下頗る多し、寶曆二年三月十日歿す、享年四十五、城南長福寺中區門前町五丁目俗七ツ寺に葬る。（碑叢、墓碑）

五　川邊百野

川邊百野、名は信弋、字は以淸、南辰と號す、天文暦數を鳥居圓秋に學びて頗る之を善くし、安永の頃富士見原に住して時に名あり、著す所周髀算經闡解五卷あり、天明五年梓して世に行はる。（張城人物誌、金鱗九十九之塵、鳥居圓秋碑文、國書解題）

六　武藤加六

武藤加六、一に嘉六、名は直達、字は大擧、白羅居と號す、天文暦數に通じ時に名あり、安永の頃、杉之町藤塚町角に住す。（張城人物志、金鱗九十九之塵）

七　朝比奈如有子

朝比奈一に朝夷に作る如有子、名は厚生、字は君和、通稱は茜三郎、如有子と號す、別に煙霞樓の號あり、尾張侯の臣にして祿二百五十石を食む、父を井上貞右衛門信豐といふ、如有子は其次子なり、出でて朝比奈與兵衛正明の義子となる、因て其氏を冒す。

如有子、天資英邁、才氣群ならず、少うして學を好み、而も常師なし、長じて九流百家の書より、浮圖外國の說に至る迄、窮めざる所なし、最も佛書に精通し、山經地誌を詳にす、平田篤胤其佛學上の說に推服し、書を贈りて之を激賞し、其相見るを得ざるを憾む、其一書を著すや、時人卓見に服し、爭ひて之を傳寫す、晩年耳聾を患ひ、遂に他の嗜好を絕ち、唯文史の娛に耽る、歲八十に及ぶも、嘗て手に卷を釋かず、文政十一年十二月七日病んで歿す、享年八十一、城南照遠寺（東區小川町）に葬り、至德院要道日悟居士と法諡す、著す所天竺眞圖佛國考證、佛國圖考、佛國蘭說考、崑崙考、釋氏古學考、法華獨悟考、釋迦一代實錄、摩訶衍不審十條、蒙古賊船備考、赤夷談、歲時本據等あり。（墓碑・尾張名家誌二編、汲古草稿　照遠寺過去帳）

八　水野鳧山

水野鳧山、名は政和、字は子禮、一の字は長湖、喬山、又、鳧山と號す、通稱は太郎左衞門、名古屋鍋屋町の鑄工なり、水野氏初め愛知郡上野に住し、世々鑄工の長となり、鍋屋を以て知らる、鳧山は實に其十代の主なり。

鳧山、河村乾堂に從學し、又天文律曆を好み、頗る其學に達す、花山院愛德、爲めに精故堂の號を書して之を賜ふ、普門律師（名珂月）の京師より來りて、佛曆を府下に說くや、之を信ずるもの多く、大に渾天說を駁す、鳧山之を惡み、其友朝夷如有子と與に往て之を詰る、普門答ふること能はず、夜に乘じて逃れ去る、文政三年三月廿八日歿す、享年五十二、城南寶泉院（中區裏門前町）に葬り、大翁良雄居士と法諡す。（尾張名家誌二編、社盟詩戲、汲古草稿）

九　北川猛虎

北川猛虎、禮左衞門と稱し、曦山と號す、尾州侯に仕ふ、初め西尾喜貞に從ひて學び、後丸山良玄の門人となりぬ、文化十二年算法發隱を著す、算法發隱は勾股整數、自約法、別約法、極數術の四術に過ぎず、其別約法は約術に似て而して一の興味を備ふ。

一〇　御粥安本

御粥安本、字は君修、箸隻と號す、通稱は猪之助、初め菊間直之（稱庄藏）の門人なりしが、日下誠の門に入りて頗る數理に通ず、晩に和田氏の圓理を白石長忠に受け、是より圓理に通ぜり、尾州侯に仕へて其名高し。

安本、天保十一年算法淺問抄を編す、此書點竄術の撰題頗る善く、而して卷末に追加せる所の方陣列布法は、前人の法に依りたるが如しと雖も、從來未だ之が解法を示して印行せるものなく、大に算家の稱贊する所となりぬ、文久二年二月四日歿す、享年六十九、門下に平野喜房、日江井政孝、山本貞篤、小川定澄、三輪恒德、寺島全利、川北朝隣、梅田政裕、竹內光久、中里

則高、大月義啓、野崎貞晴、廣瀬邦教等あり。（大日本數學史、算法淺間抄）

二　竹内修敬

竹内修敬、字は子準、思齋と號す、幼名は安七、長じて藤左衛門と稱す、尾藩の小吏にして、上宿柳町今江川橋町に住せり、幼より數學を好む、然れども鄉に良師友なし、時に江戸に內田五觀あるを聞き、書を通じて其門に入り、疑議を質し、勵精刻苦すること數年、深く其法を窮め、遂に關流七傳の印可を受く、嘉永四年其多年の蘊蓄を傾けて算法圓理括發を著す、此書一たび出でて、修敬の名遠近に振ふ、修敬、藩の器械長小長格小吏より、明治二年明倫堂謁者に擧げられ、堂中の算學教授役を命ぜられ、廩米七石俸二口を給ふ、後小學校算術師となり、明治七年六月十日歿す、享年六十、誓願寺東區久屋町に葬り、圓覺明頓居士と法諡す、著す所に尙ほ日用算法あり、好著の評ありて、最も廣く世に行はれたり。（算法圓理括發、大日本數學史、藩士名寄、顯隱伏三題之卷、誓願寺過去帳）

第十五　釋　氏

一　定　尊

定尊は、信濃善光寺の僧にして、尾張熱田の人なり、生れて六歲法華經を習はんことを請ふ、父母驚き異みて郡の某寺に托す、九歲にして八軸を暗記す、出家の後讀誦を業となし、三十二年の間に四萬八千九百二十部を讀誦す、其後每字に阿彌陀の號を唱へて一千部を課す、建久五年每字に念佛して阿彌陀經一千部を課す、夢に一沙門あり、團扇を持し告げて曰く、我は善光寺如來の使なり、汝當さに來り詣すべしと、定尊即ち善光寺に到り、九十日の間堂上に坐して讃禮念佛す、十月十五日夢覺め、恍として繡帳開けて三尊並現し靈告あり、後同五年四月廿一日の夜寺僧燈阿俊圓、如來の靈告により定尊を召す、乃ち繡帳自ら開け妙相を現す、定尊靈告により三尊を圖す、同年六月勸化して金像を鑄造す。（本朝高僧傳）

二　良　敏

良敏、字は寂忍、尾張熱田大宮司の子なり、性和順にして學識深廣、同國の淨心、美濃の照寂に隨ひて天臺宗を修め、後觀勝寺の大圓に從ひて眞言教を受く、又東大寺に往き圓照の室

を敲きて戒を受け律を學ぶ、弘長の末年八幡の善法寺に居り、戒壇院の凝然を招きて四分戒本定賓の略疏を講ぜしむ、又圓照に從ひて洛の鷲峰山に在りて表無表章大日經を聽く、圓照亦良敏をして天臺の疏籍、眞言の秘典を講ぜしむ、衆其資深に服す、鄉の大塚縣に性海寺、及び池鈴山（蜂須賀村）薬華寺を開き宗義を演ぶ、密教を尾張に唱ふるは良敏を以て始となす、後洛東吉水に庵を結びて幽栖す、門下に禪心、光遍、觀海、定祐、證圓、良範等あり、師統を繼ぎて顯密の教を唱ふ。（本朝高僧傳）

三　融　傳

融傳、名は永乘、淨土宗の僧にして、熱田正覺寺開山なり、應永二十一年愛知郡祐福寺に住し、同寺第四世たり、學德の高きを以て稱せらる、曾て加賀白山に登りて神異あり、常に熱田の宮に詣す、途鳴海山を過ぐる時、狼の林中より出で、口を張りて向ひ來るあり、融傳怪みて之を見れば、咽喉に物あり、乃ち手を以て之を拔き去るに骨節なり、狼俯して謝するもの、如く、尾を搖かして前導し、人家に近きて去る、又夏日此地を過ぐるに頻りに渴す、乃ち神に祈り、杖を以て地を穿つに、清泉忽ち湧出す、是より行旅の人喜びて之を掬し、名けて融傳の泉といふ、永享六年二月正覺寺を開き、同年九月後花園天皇勅願寺の綸旨を賜ひ、又宸翰三尊の圖像を下し賜ふ、永享九年四月十二日寂す。（名古屋寺社記錄集、尾張誌）

四　南　溟

南溟、名は紹化、臨濟宗の僧にして、熱田龍珠寺の開山なり、其俗姓鄉里を詳にせず、玉浦宗珉に參し、歲三十二にして嗣法す、永正元年玉浦美濃瑞龍寺の席を董す、南溟隨ひて參究すること九旬、淨頭の職を司る、後江南珠榮と共に行脚し、偶織田氏の士卒の狼籍するに遇ひて捕はる、南溟曰く、我一物の汝等に與ふるなし、但だ博識を要せば或は用ふる所あらんかと、士卒依りて南溟を拉して尾張に來り、行く〳〵叫びて物知りを賞らんといふ、熱田に至りて人の惟みて問ふ者あり、南溟對ふること初の如し、加藤延隆聞きて之を奇とし、卒に錢一貫文を與へ、自ら南溟の縛を解き、榻を掃ひて之を延き、就いて法を問ふ、南溟法を說き諭導す、擧家共學德に驚歎し、日に歸敬を加へ、遂に龍珠庵を創し、請じて開山とす、天文元年に至り官の許を得て臨濟山龍珠寺と號す、津田豊後守、南溟の道風を聞き、參禪して歸崇し、同國稻葉地村凌雲寺の廢寺に歸せるを開き、南溟を請じて開祖とす、南溟後に綸命を奉じて妙心寺に出世し、永祿五年五月十二日、龍珠寺に寂す、世壽九十、附法の弟子六人、大林、設三、雲峰、器哉、雪庭、弱巷等なり、一脈分派して其流盡きず、延いて

三餘刹に及ぶ。寛保元年三月二十七日眞光圓智禪師の諡號を賜ふ。（延寳傳燈錄、名古屋寺社記錄集、厚見草）

五　大　雲

大雲、名は永瑞、曹洞宗の僧にして、萬松寺開山なり、俗姓は織田、尾張の人にして、備後守信秀の伯父なり、資性高潔、幼にして州の雲興寺に入り、祥巖秀麟を師として、祝髮受具す、爾後沈默自ら究め一日正法眼藏を閱し、風の紙葉を吹くを見て、省する所あり、方丈に入りて所見を伸ぶ、祥巖玄沙未徹の話を擧げて之を詰るに滯る所なし、巖笑て曰く得る事は則ち得たり、終に第二義に居ると之を久うして玄旨に契ふ、後諸方に遊びて、徧く知識に參し、雲興に歸りて同寺七世の法席を繼ぐ。居ること十三年、大に化風を振ふ、一日忽然偈を作りて曰く、一十三年住此山、松風耳熟寸心閑、這回却羞嶺猿笑、不到孤峯問里還、と乃ち春岡東榮をして席を繼がしめ、直に郡の大森に退き、正法の廢寺を復興して之に居る。（正法寺普香山と號す後安永三年佛日山法輪寺と改む）偶々雲興寺火災に遭ひ、諸堂一時に烏有に歸す、春岡之を再興すること能はずして退く。大雲仍りて信秀に請ひて堂宇を再造し、其結構舊に倍す、而して春岡を招還して住せしむ、因りて大雲を以て雲興中興の祖とす。

時に信秀末森城にあり、日として大雲と會せざるはなし、一夜黃金を布ける地を選びて大伽藍を建て、大雲を請ひて開山となすと、夢みる、覺めて後、大雲と偕に名護屋城南の地をトし、三千餘頃の地を劃して以て基址となす、時に靈龜の甚中より出るを見て、即ち龜嶽山と號し、大に工を興して、伽藍を創建す役天文七年に始まり、同九年に至りて成る、名けて萬松寺といふ、遂に大雲を請ひて開祖とし、巾下五百六十餘石の田を喜捨して常住梵修の費に充つ、大雲時に年五十九、信秀は三十三なり、人皆二人の際會其處を得たるを稱す、大雲萬松の席に主たること十年、天文十八年信秀卒す、乃ち萬松寺に葬り、信長佛事を修し、諸事了るの後、大雲席を寛室東廊に讓り、萬年寺に退隱して終焉の計を成す、東廊善く懇誠を盡して之を看、大雲亦禮を以て之に對す、人其師弟の情の美なるを稱道す、永祿五年四月二十二日、偈を書し、訣を告げ、筆を投じて、化す、世壽八十一。全身を奉じて、塔を本山の北丘に建つ。法嗣に春岡東榮、寛室東廊、愚庵道黠、大宗永播を出す、大雲嘗て雲興に在るの日、洛の南禪寺月洲、其道譽の高きを聞き、大雲の設を爲りて、以て德を頌す、大雲の述作せる所は、散じて故紙堆中に在りしが、後年逸堂編して一卷となし、萬松寺に藏す。（龜山志、日本佛家人名辭書、雲興寺記錄）

六　忠獄

忠獄、名は瑞恕、別に漁巣子と號す、臨濟宗の僧にして總見寺開山なり、俗姓は牧氏、牧氏は世々小林鄉を領し、人呼びて小林殿といふ、幼にして海國寺叔榮宗茂を拜して出家す、才學群を拔き、最も詩を能くす、遊方の間、嘗て錫を足利學校に駐め、儒典を讀破し、鴻才世に鳴る、一日歸りて茂和尚に問ひて曰く、如何是道と、茂曰く、金關鐵壁、忠獄曰く、南天台、北五臺、茂曰く一句合頭語、萬劫繫驢橛、忠獄曰く、白日青天莫寐語好、茂乃ち喝一喝す、忠獄も亦喝す、乃ち偈を作りて曰く、萬里關鎖一鍵開、圓智長超乎古來、不管從前諸佛祖、當機也底嘆奇哉と、茂和尚後に法を附して曰く、這法言語道斷、心行所滅、這隨坐衣古喚鐘、一口一領、自從實性禪師、直到柏庭和尚及山僧、佛法相傳之信器信衣也、即今附屬于汝、長傳莫令放失焉と、忠獄乃ち法山に上りて分坐し、歸りて寶泉寺に住す、編素欽崇する者甚だ多し、織田信雄時に清洲城に居る、曾て忠獄が道譽を聞き、之を請し、伊勢の景陽山を移して、改めて總見寺となし、膏油の地を割きて付し、忠獄をして之が開祖たらしめ、以て信長の冥福を祈らんとす、忠獄曰く、此寺舊虎關の洪基なり、宜しく虎關を以て開山となすべしと、乃ち自ら第二世に居る、後慶長十六年寺を名古屋に移すに及びて、改めて忠獄を以て開山となす、信雄又神官寺の鐘を採りて、之を總見寺に掛け、景仰日に渥し、而して信長の追諱に遇ふ毎に寺秩を增加す、是を以て一山日に富み、參謁する者踵を接す、忠獄之に處して鉗鎚手を空うせず、門下に四哲を出す、大元周仙、梁南禪棟、心傳惠安、別宗惠了是なり、慶長二年再び法山の命あり、秋に至りて妙心寺に入り、十二月六日、見摩軒に於て瞿然として化す、世壽六十三、法臘五十二、全身を木菴大龜塔の傍に葬る、後遺骨を總見寺に移し、方丈の西に塔し、號して獅巖といふ。（景陽五祖傳）

七　梁南

梁南、名は禪棟、別に中有道人と號す、臨濟宗の僧にして總見寺第二世なり、俗姓は後藤氏、父を不干齋といひ、伊勢桑名の人にして勇士の稱あり、曾て希庵の爲に郡の少林寺を創建す、上棟の日其愛子を捨てゝ以て弟子となす、希庵名くるに禪棟を以てす、其禪門の棟梁たらんことを欲してなり、歲甫めて十五、陽南禪梁と共に同じく美濃の濟山南晚に參す、晚二子の俊邁なるを見て、即ち標句して曰く、二僧題一句、槐綠

樹重陰、二子拜戴して出で去る、梁棟に謂ひて曰く何に緣りてか之に對せんと、棟曰く、我祖師回向文を以て之に對せんと、曰く、初祖加三拜、桂花木少林、晩看て賞して曰く、己に棟梁の我家を作すを知ると、後果して尾濃の二龍門となる、參禪の暇、詩を錬り、句を磨く、後忠獄の會裏に來り、一語相投じ、終に其心印を承け、轉位して梁南と號す、初め總見寺の子院陽岩院に住し、後忠獄に妙心寺に隨ふ、法兄大元總見寺の法席を嗣ぎ、幾もなくして化す、其寂するに臨みて曰く、此山は惟れ重し、賜紫の人に非ざれば住すべからずと、三法弟に附せずして海國寺潔堂に囑す、後梁南及び心傳の瑞世するに逮びて三人輪次住持し、既にして心傳早世す、依りて潔堂と隔年に住す、梁南三住の後、慶長十六年清洲城を名古屋に移さるゝや、潔堂梁南に謂ひて曰く、獨力總見寺を移轉し、以後永く獨住せよと、梁南依りて檀越と力を勠せて寺を移し、これより獨住す、乃ち梁南を以て中興と稱す、又美濃加納城主松平甕津守忠政の請に依り、城外に光國寺を創し、之が開山となる、時に又妙心再住の命あり、元和中接州英公の爲に妙心寺中に光國院を創し、總見寺を退きて之が開基となる、又加納侯の爲に盛德院を本山に創して之が開山となる、梁南五刹を創始し、嗣法の者頗る多し、就中阪哲二長老の兒孫繩々として甚だ昌なり、稱して梁南派といふ、寛永十五年二月十日、本山光國院に寂す、世壽八十七、法臘七十三、方丈の後に塔して靈霧といふ。（景陽五祖傳）

八　海巖

海巖、名は宗突、曹洞宗の僧にして萬松寺七世なり、俗姓は佐々氏、成政の孫なり、雄山玄英を師として剃髪受具す、遂に其法を嗣ぎ、且つ萬松の席を繼ぐ、學德一世に高く、大に洞上の風を振ふ、德川家康其名家の出なるを知り、屢々之に還俗を勸むれども肯ぜず、後永平寺に住して第二十一世となるに及び、家康其由來を以て帝に奏す、帝召して紫宸殿に見、勅して智光大通禪師の號及び紫衣を賜ふ、永平の住持禁内に入りて謁を賜ひ徽號紫衣を賜ふは海嶽を始めとす、後全隆寺を熱田に創し、開山の位に居る。元和七年三月二十三日寂す。

九　閩山

釋氏　海巖、閩山

閩山、名は永阡、別に布衲子と號す、臨濟宗の僧にして總見寺第三世なり、俗姓は中島氏、伊勢桑名に生る、母後藤氏は梁南の姉なり、閩山、小字を龜といひ、六歳にして叔父梁南に師とし仕ふ、幼にして己に成童の操あり、恒に好みて書を讀む、八歳痘染して宗龜と名く、十三歳始めて參禪し、十七歳に及びて往きて清見寺鉄山に參す、

時に海衆七十餘人、鉄山、閑山をして第一座に居らしむ、衆爭ひて詩を闘はすに、閑山の右に出る者なし、二十五妙心に瑞世し、梁南の後を嗣ぎて總見寺に住す、寛永七年暮春、總見寺一夜火災に罹り、方丈短廊一時に燒失す、時に風雨俄に起り、厨庫寢室免かるゝを得たり、火焔上る時、閑山偈を作りて曰く、天示火災三四更、忽然行脚可憐生、惟時懶似把茅漏、烈焔堆中夜雨聲、時に梁南京に在り、人の閑山の火災偈を喧傳するを聞き、人に謂つて曰く、若かず、破砂盆一箇半箇を取出すの勝れるにはと、後八年寛永十四年の秋國侯義直枉駕して再建せしめ、翌年冬再び到りて新方丈を覽る、正保元年閑山歳六十に上り、將さに退院せんとし、豫め侯に告辭す、侯退隱の地を問ふ、閑山答ふるに去る所なきを以てす、侯清洲總見寺の舊地、并に興聖山總見院の號を賜ふ、其興聖の額は世子光義の書する所なり、閑山寵恩の辱なきを喜び、尋いで草庵を結びて退居す、承應三年季夏老癖日に薄り、秋八月晦日に至り、偈を述べて曰く、空手而去、空手而來、咄咄咄、無去無來、と如然として化す、世壽六十九、法臘六十二、闍維して五色の舍利無數を得、以て方丈南西の地に塔し、號して慈忍といふ、閑山平生誦經三昧に入り、曾て矗言を吐きて弟子を呵責せず、其慈忍なる檜雀來りて食を掌上に啄むを恒とす、最も詩に長じ、嘗て雪に題して曰く、

雨耶非雨灑窓紗、寒氣無風次第加、日午初知松竹綠、今朝一樣白梅花、

後石川丈山見て唐詩の趣ありとなして之を稱す、嗣法の者七人、實法宗眞、北禪禪秀、密旨知三、癡堂永瓦、南州祖能、清絶清潤、通應禪二なり。（景陽五祖傳、睡餘操筆）

一〇　廓　呑

廓呑、字は龍高、業蓮社成譽と稱す、淨土宗の僧にして建中寺開山なり、俗姓は夏目氏、肥後に生る、幼にして出家し、傳通院聞悅に師事して宗乘を究め、傳通院增上寺の學頭となる、幕府の命に依りて結城弘經寺に住し、盛んに法化を布く、慶安三年尾張侯光友の請に應じて、建中寺に住し、勅賜紫衣の永宣旨を拜し、專念の宗風大に振ふ、承應三年九月十八日寂す、壽缺く、同寺に葬る、嗣法の弟子頗る多し、中に廓春は全順院の開山となり、圓智は平田院、存慶は三河昌福寺、善榮は同國誓滿寺、誓達は知多郡善住寺、凉逝は同郡正行寺、廓翁は同郡光照寺の開山となり、各々能く師風を擧揚し、蓮化を彌布せり。（日本佛家人名辭書、名古屋寺院誌、尾陽往生傳）

一一　呑　屋

呑屋、名は眞阿、本蓮社眼譽と號す、淨土宗の僧にして相應寺開山なり、甲斐の人、其俗姓を詳にせず、高岳院開山照蓮社寂譽呑宿の室に入りて得度し、鋳倉光明寺深譽傳察に師事して法を受く、既にして歸りて高岳院第三世となり、同寺中興の祖となる、寛永十九年藩主德

川義直、生母相應院の爲に一寺を創建し、名けて寶龜山相應寺といひ、寛永廿年八月、春屋を請ひて開山となす、住する事四年、正保三年三月廿一日、台命に依りて、京都黑谷金戒光明寺に轉住し、同寺三十世の法席を繼ぐ、承應元年名古屋布池の邊に閑居の地をトし、自然院を開きて退隱し、爾後閑居念佛し、寛文八年四月二日を以て寂す、世壽八十二、相應寺に葬る、（尾張往生傳、日本佛家人名辭書、名古屋寺院誌）

一三　北禪

北禪、名は禪秀、別に幽蘭と號す、臨濟宗の僧にして總見寺第四世なり、俗姓は市川氏、慶長十年五月伊勢長島に生る、幼にして穎敏、十一歳總見寺の子院陽岩院に投じて、繁室の弟子となる、後繁室の美濃光國寺に移るに及びて又之に隨ふ、十六歳にして髮を剃り、關山を師とす、祖翁梁南甚だ之を器重す、歳十九美濃に往きて陽南に參す、歳二十四本州開善寺に掛錫して外典の講を聞き、性と心との別に疑あり、一夜夢に一丈夫來りて斧を以て我が頭を破る、痛楚禁じ難し、覺むれば則ち流汗醬の如し、時に凉風窓より入る、是に於て心性の義を辨じ得たり、然れども古則を拈弄するに、通じ難く徹し難きを以て、益々發憤して研鑽して止まず、歳二十五、紀の禪林碧巖會に屬し、首座二十八人の隨一たり、其垂示の日に方りて、日來痢を病みて床に在り、強ひて起きて水に浴し、百衆の問答に應ぜんが爲に快愈を神佛に祈る、衆皆狂といふ、而して病隨つて愈ゆ、人之を奇とす、後光國寺に在るの日、殿前の木葉風無くして悉く落つ、頓に世尊拈華の手段を見得し、是より話々則々、恰も雪の解け氷の消ゆるが如きを致し、諸師の毒手に觸るゝと雖も、撓まずして縱横自在なり、歳三十終に關山に嗣法し、妙心に分坐して、光國寺に住す、歳四十一、本山の子院實相院に移る、縮素の渴仰、光國に在りしに異らず、正保二年冬總見寺に住するの命を受く、時に歳四十二なり、歸りて關山に隨ひて城に登る、國侯義直問ひて曰く、北禪甚だ弱齡なり、年齒幾何ぞと、關山側より答へて曰く、幾んど五十に近しと、侯肯かずして急に責め問ふに支干の如何を以てす、北禪伏して關山を顧みて、微笑して言はず、侯も亦笑ふ、北禪退いて語りて曰く、國侯大機を頓發して當るべからずと、當時毎月各宗の僧城に登り、必ず饗應ありて薄暮退出す、慶安二年の春北禪、例に隨ひて諸長老と共に登城す、侯垂問して曰く、宗門に死活の句あり、未だ意旨を審にせず如何と、諸僧相顧みて未だ輙く答へず、侯北禪の名を呼ぶ、北禪坐の最末にあり、少しく進みて答へて曰く、謂ふ所の死活は、師家分上に於ては、更に間無きも、學人分上に於ては且らく異有り、死句は句中に意有り、活句は句中に意無し、乃ち趙州栢樹子、青峯丙丁童、請ふ細かに參詳せよと、侯曰く、積年の疑滯今日開決すと、甚だ儘べる色あり、頻りに總見寺と呼び、謂ひて曰く、齡盛に氣全し、宜しく祖錄を擧揚し、徒衆を接引して可なりと、北禪低頭して命に服す、是に因りて三年春、十刹錄を評唱す、承應元年秋、本山に住するの命あり、諸徒勅を奉ぜんことを勸むれども辭して就かず、且らく關山の例に隨ひて瑞世す、三年秋臨濟錄を評

唱して鈔あり、明暦元年春夾山錄を評唱す、聽徒内堂に掛搭する者二百四十、外衆は其數を知らず、曹洞の參徒凡そ八十、許了る後華嚴經一部を獻謝す、宗門の古老賀頌を贈る者多し、雲水記を點檢するに、六十六州中、唯二國を除き、他は皆一二人來集す、萬治元年尾の小淵に大慈寺を創し、寛文元年濃の各務に大樹寺を建つ、三年春熱田に自休庵を開きて、龍泉の末寺となし、長く恬退の地となす、四月俄に法山再住の命あり、八月朔入寺す、五年總見寺を退きて自休庵に隱棲す、延寶五年十月、一夜梁南を夢みる、句有り曰く、今夜杜鵑雨、懶催還故鄕、翌朝諸子に語りて曰く、老僧鄕に還る來歲に在りと、六年夏初疾あり、藥を服して日ならずして愈えしも、是より體稍々常を缺く、五月二十三日の朝に至りて、老醫來りて藥を薦む、北禪辭して曰く、色身限り有り、藥寧ぞ人を留めんや、況や老僧曾て檀夢あり、遷化近きにありと、受けず、諸徒豫め遺偈を請ふ、北禪聽かず、諸子の曰く、佛々祖々咸なこれ有り、師豈に之れ無からんやと、此日に至り北禪起坐して高く唱へて曰く、度生設法、七十四年、要知端的、眞照無邊、喝一喝して音無く眠るが如くして化す、世壽七十四、法臘五十八、遺命に依りて全身を庵の巽隅に塔し、號して眞照といふ、（自休寺、後總持院と換地せるを以て、北禪の墓は、今南區熱田旗屋町の同院内にあり、）北禪初め光國に住し、自休に至る迄八刹に歷住し、緇素瞻仰して咸な謂へらく、禪風茲に震起すと、授業子十九人、中に法山第一座たる者九人、集三卷あり、延寶七年五月二日、勅して聖諦廓然禪師の諡號を賜ふ。（景陽五祖傳）

一三　桐峰

桐峰、名は智抱、別に睡虎と號す、臨濟宗の僧にして總見寺第五世なり、俗姓は加藤、父忠久、加納の城主松平攝津守に仕へ、圓城寺邑に居る、元和四年三月十二日桐峰を同地に生む、生れて百餘日にして、事ありて父死す、依りて迎へられて豊の臼杵に往き、祖母の許に養はる、九歲鄕校に入り、群童と鬪き、硯を擲ちて人の一眼を傷く、是に依りて鄕に還さる、叔父某携へて光國寺繁室に投じ、出家たらしめんことを乞ふ、歲十六に及びて繁室、北禪の弟子たらしむ、北禪深く之を愛撫す、二十二歲豊後月桂寺に掛錫し、二十七歲光國寺を看す、一日驢井の語に於て省するあり、頌を作りて行きて北禪に呈す、北禪之を詰るに趙州三佛公案を以てす、桐峰待問鐘を撞くが如し、聖朝辭して回るや、北禪俄かに問ひて曰く、眞佛坐屋裡、又作麼生、桐峰曰く、即今在膝下、北禪振威一喝す、桐峰同聲相應す、北禪印可す、慶安三年春、妙心寺に分坐し、光國第四世の席を嗣ぐ、寛文七年冬、國城寺村に西明寺を開き、以て終焉の地となす、曰く、我茲に生れ、茲に死す、老後の懷なりと、翌年寺成りて記を作る、九年春總見席を嗣ぐ、北禪、桐峰をして之を繼がしむ、辭することを得ずして移り住す、既にして數々木山の命あり、辭するに老窮を以てして、肯て就かず、徒弟勸めて曰く、願はくば兒孫の爲に、枉げて一

たび之を諸せよと、延寶四年秋、歳五十九にして、紫を賜ひ、靈山七三の正傳、陽山第五世の的孫と稱す、七年八月二十四日諸徒と總見の室内に夜話し、忽ち中風を發し、晦日に至りて寂す、世壽六十二、法臘四十六、遺體を西明に移し、闍維して塔を作り、號して維桑といふ、一に遺命に依るといふ。（景陽五祖傳）

一四　月畊

月畊名は道稔、龜毛子と號す、俗姓は太田氏、寛永五年九月一日、尾張名古屋に生る、天資穎異幼にして父を喪ひ、慨然佛に歸す、陸奥瑞巖寺雲居希膺の、美濃瑞龍寺より歸るに逢ひ、相與に松島に往きて修道す、歳二十五、江戸目黒不動に祈りて靈應あり、再び松島に歸る、雲居の寂するに及び、遺命に依り乾德山永安寺に住す、伊達綱宗之を聞き、擧げて妙心寺第一座とす、曾て黄檗山に登りて木菴に法を問ふ、延寶中仙臺に到り、延壽山安養寺の舊址に茅蘆を結びて住す、時に伊達綱村佛を信ず、月畊を延きて法を聞き、城中に禪堂を設けて之に居らしめ政暇を以て參禪す、後に城東に於て一寺を創建し、月畊を請ひて開山とす、開元山萬壽寺是なり、元祿十四年正月元日寂す、壽七十四、僧元昭禪機を會し奇行あり、弱冠法を月畊に問ひ萬壽寺にあり、後高遊外と稱し茶を賣る、賣茶翁是れなり。（仙臺史傳）

一五　鑑譽

鑑譽、名は知白、一志と號し、照蓮社と號す、淨土宗の僧にして建中寺五世なり、俗姓は長谷川氏、江戸に生る、幼より讀書を好み、六歳の時適々增上寺知童に謁す、知童試に大學を敎ふるに、速に諳誦して傍人を驚かす、遂に其弟子となりて慧業を勵み、粗々三藏を研窮す、後南都に至りて具舍唯識を相承し、祐察に依りて智性を增益し、宗智に從ひて楞嚴及び諸錄を研尋し、敎内敎外大概通ぜざる所なし、且つ詩歌の才に富み、論辯諸檀林に秀づ、之を以て適々論場を開けば、大衆雲集す、紀伊大納言、酒井雅樂頭、禮遇甚だ渥し、嘗て幕府の命を奉じて館林善導寺の貫首となる、幾ならずして尾張侯綱誠請じて建中寺に住せしむ、天和三年二月五日寂す、同寺に葬る。（尾陽往生傳）

一六　白翁

白翁、名は禪璁、別に寓幻子と號す、臨濟宗の僧にして總見寺第六世なり、俗姓は河合、西濃今川の人なり、幼にして父を喪ひ、叔父に鞠育せらる、稍長じて光國寺桐峰に投じて薙染受具し、名を慧超といふ、賦性剛直、膚少しも撓まずして、行脚參禪す、諸老宿甚だ之を器重す、曾て江戸東禪の輪下に在るや、堂頭默水、其機鋒穎利なるを見て、嗣法たらしめんとす、白翁固

く之を辭す。既にして光國に歸り、桐峰に執侍すること甚だ嚴なり。春粟炊飯、單身之を辨じ、日に賤役を事として、而かも禪誦苦學少しも懈る所なし。人皆畏服す。時に祖翁北禪熱田自休庵に隱棲す。白翁、桐峰に侍して數々往く。北禪示すに雲門關の字を以てし、因りて本參たらしむ。密究精錬すること茲に年あり。一日桐峰の命に依りて自休庵に使す。熟々念ふに北祖鉗鎚妙密なり。若し辣手に遇はゞ、恐くは屈辱を受けんと。途中切に工夫を下す。路下津を經、包を卸して街道の松下に憩ふ。ことゝ少時、漸く村舍を過ぐ。忽ち一陣の清風起りて翠竹を動かすに會ひ、圖らず演祖投機頌に憶着して省するあり。爾來疑ふ所の話題、透徹明々たり。歡喜の餘疾走して自休庵に至り、使命を通ずるに及ばずして、先づ告ぐるに此事を以てす。北禪徵詰すること數回、應答響の如し。既にして歸りて具さに所見を桐峰に呈す。桐峰欣然印可し、遂に其法を嗣ぐ。而して去りて尾の奥村觀音寺に寓すること三年、世に意なきものゝ如し。時に桐峰總見寺を嗣ぎ、白翁をして光國に住せしめんとす。白翁固辭すること再四、而して桐峰三顧頻繁なり。乃ち已むことを得ずして出でて光國に住す。是に於て妙心第一座となり、分座開演して栢翁と號し、名を禪操と稱ふ。後今の字に改む。一住十餘年、力めて古風を揚げ、痛く華耀を抑ふ。雲衲至る者雲の如し。禪餘祖錄を評唱し、編衆常に席に滿つ。講筵若し喧噪することあれば、激勵呵罵して敢て顧慮せず。延寶七年桐峰疾に罹り、復た招きて席を讓り、付するに後事を以てす。國命辭し難く、來りて總見の席を嗣ぐ。四方の學者來り聚り、僧房動もすれば狹隘を告ぐ。禪餘力を奮繕に盡し、鐘樓、衆寮、祠堂を再建す。貞享二年冬勅を奉じて妙心寺に瑞世す。時に歳五十三なり。元祿中上野永弘院を興復し、同寺中興の祖となり、又美濃西明寺を再建し、藥師寺を開く。元祿六年衣鉢を大龍に傳へて總見を退き、即日西明寺に入り、深く自ら韜晦す。八年妙心寺席を嗣ぐ。山門特に白翁を請して其席を董さしめんとし、懇諭頻りに至る。是に於て法山に三住す。寶永五年六月二十二日寂す。闍維して骨を收め、塔を建てゝ渾圓といふ。著す所語錄二卷、竺華桑聯芳採摘記一卷あり。（景陽續列祖傳、○社寺編五三七頁總見寺の條參照）

一七　關空

「關空、字は善廓、淨土宗の僧なり。俗姓は岡崎氏、尾張熱田に生る。七歳父母を喪ひ、郡の大寶禪寺に投じて沙彌となり、內外の諸典を讀む。歳十八自ら歎じて曰く、內外の諸典を究むるも、未だ出離の要門を知らず。生死岸頭差路多しと。乃ち奈良に抵り、二月堂觀世音に禱祈すること七晝夜、其靈告に依り、京都東山に登り、禪林寺積峰和尚を問ひ、淨土の宗要を習練す。解行共に進む。越前安養寺に住し、次で紀伊總持寺に住す。延寶二年二月、法席を退き、隣村の茅屋に幽棲し、麻衣藜食し、淨土の三部經、法華四要品、往生禮懺を誦す。村民漁獵を以て業となし、因果を信ぜず。關空深く之を哀憐し、化導最も力む。幾もなく村中の男女皆法澤を蒙る、

天和元年六月十三日終朝至れりとて弟子に告げ、佛前に端坐し、佛名を稱すること一百餘遍、乃ち別室に入り、盧舍那佛像に對し、燒香禮拜し、後結跏趺坐して寂す、壽四十九なり。（續日本高僧傳）

一八　快　玄

快玄、名は則甲、定蓮社禪譽と號す、淨土宗の僧にして相應寺六世なり、阿波の人にして、江戸傳通院に學び、慧學秀逸、尤も會下の大衆に欽望せらる、常に起信論を愛讀して微旨を發明し、大衆の爲めに講說すること數百回なり、故に人共寮を呼んで起信庵と稱す、延寶三年四月學徒の請に因りて、起信論文を科解して二卷となす、別に起信義一卷を述作す、六年七月宋柯山倫師の法華科注一帙を得て評點を付し、已に墜ちたるを中興して世に行はる、八年秋略敎誡經を註釋す、天和二年秋冬の間、無量山東谷に於て法華經を講ず、乃ち倫公の科註に據る、諸宗の學者翕然として集り、聽徒千を以て數ふ、三年四月二十七日尾張侯光友の請に依り、來りて相應寺に住し、住山五年、爾來專ら宗風を宣揚す、貞享四年二月二日退隱し、元祿二年黑谷上人法話一冊を印行す、元祿八年四月十九日寂す。（鎭流祖傳、尾陽往生傳、名古屋寺院誌）

一九　慈　空

慈空、名は顯慧、淨土宗の僧にして熱田正覺寺第二十三世なり、元祿十四年京都西山光明寺第一座より來り住し、十六年十二月美濃立政寺に移る、顯慧性相の學に通じ、松尾大華嚴寺鳳潭に抗敵して書を作る、著す所起信論幻虎錄辨僞三卷、破邪決二卷あり。（日本佛家人名辭書、正覺寺當山代世進退年月考）

二〇　太　龍

太龍、名は禪驪、別に徑珠と號す、臨濟宗の僧にして總見寺第七世なり、俗姓は松原、美濃加納の人なり、寛文元年正月十五日生る、幼にして聰慧、好みて書を讀む、十二歲光國寺白翁を禮して薙髮受戒し、名を智梵と呼ぶ、十八歲にして行脚し、濃の慈溪の法席熾盛なるを聞き、直に往きて掛塔す、春和尙其超邁なるを知り、雲堂に首たらしむ、夫より徧く諸方に遊び、虎林を紀の禪林に訪ひ、高泉を城の佛國に問ふ、貞享元年冬阿波の山中に入り、小庵を借りて日夜趺坐す、獵鹿の外絕えて人の到るなし、一夕豁然として凝滯頓に解く、莞爾として偈を設て云く、大圓那一鏡、撲破黑漫々、佛祖不曾會、松風入戶寒、二年春洛の義山に登り、獨照に謁して偈を呈す、照之を稱す、後故寺に歸りて、擧げて白翁に似す、白翁一微一詰、而して後之を

證す、元祿元年春、妙心寺に轉版し、分座して開法す、白翁に總見寺に執侍すること六年、元祿六年白翁の總見寺を退くや、其席を繼ぐ、十六年夏勅を奉じて妙心寺に住し、正德元年總見寺南門を再建す、三年夏臨濟錄を評唱するや、聽徒堂に滿つ、享保元年請疏特に來り、三たび妙心寺に住す、二年二月將軍吉宗、改めて朱印を賜ふ、依りて江戸に赴き、四月二十九日家纐の小祥忌に丁り、增上寺に登り納經焚香す、五月京に歸り、七月妙心寺を退きて總見寺に歸る、三年春高塀を建造し、五年春東門に建立す、六年閏七月二十九日寂す、世壽六十二、僧臘五十、同寺に葬り、塔して興雲といふ、太龍總見寺に住する二十九年、大に爐鞴を開き、學徒を陶鑄し、年として一日の休暇あるなし、撥艸の士景陽に到らざれば以て秀僧とせず、稱して一代の龍門となす、太龍住山の初、寺に書の乏しきを患へ、年々衣鉢の分を減じて、內外の典籍を購ふ、總見寺藏する所の書、十中の九は太龍の置く所なりといふ、著す所語錄六卷、詩集二卷あり。（景陽續列祖傳）

二一　是湛

是湛、字は靈空、淨土宗の僧なり、父は佐久間義道、母は加藤氏、尾張熱田に生る、九歲家塾に入りて四書等を素讀し、十三歲伊勢大井寺に至り、鑒空上人に就きて得度し、內外の典を學ぶ、十七歲尾張正覺寺に入りて學に力め、二十一歲炬範上人より法を傳へ、二十四歲洛西報山に至り、絕道上人に師事し、二十七歲聖來山に遷り、普及上人に依り大小性相の學を受く、三十九歲大井寺に入り鑒空に師事し、五十一歲請に應じて桑名淨土寺に住す、享保八年五穀登らず、靈空米三百餘石、銅錢二千貫文を救與し、大施主と稱せらる、五十八歲請に應じて東山禪林寺に住し、紫衣を賜はり、宮中に參候して天顏を拜す、同年東下將軍に謁す、六十八歲信行庵に退隱す、後京極佛光寺に入り、寬延二年八十四歲にして寂す、著す所西山上人傳報恩鈔七卷あり。（日本佛家人名辭書）

二二　霖翁

霖翁、名は禪霖、別に傳儉と稱す、臨濟宗の僧にして、總見寺第八世なり、俗姓は野瀨氏、美濃本巢郡神海の人なり、幼にして聰敏常に異なり、異僧來りて其風貌を見て曰く、此兒凡ならず、宜しく名師に依りて出世の法を求むべしと、父其言に從ひて携へて總見寺太龍に投ず、太龍一見して之を器とし、常に左右に置く、歲十一落髮受具し、名を禪倡と呼ぶ、性閑靖にして妄りに言を發せず、言へば則ち必ず當る、志を勵まして業を習ひ、晝夜を舍てず、蚊子聚り來りて血に飽くも、以て意とせず、孳々として及ばざるが如くす、或人勸むるに帳裏に於てするを以てす、霖翁曰く、蚊子は善友なり、吾が懶睡を戒むと、太龍之を聞き、莞爾として曰く、誠に是吾が家の千里駒なりと、元祿十五年太龍の靈泉錄を評唱するに方り、歲十九にして

選ばれて翰墨に從事す、天性書を善くし、會中三百の者能く及ぶなし、是より名遐方に轟く、遊方して諸老の門を叩き更に脈足する無し、一時の耆宿皆之を推擧す、歳二十四、京師實相院を守り、枯澹に處すること六年、禪坐の暇、儀の雜波に遊び、觀光律師に追逐して廣く毘尼を習ひ、深く内外の典を究む、初め法山の書記に選拔せられしが、正德元年に至り前板を司職とし、太龍に嗣法し、享保六年法山の選に依りて美濃正眼寺の席を董す、未だ半年ならずして太龍寂し、總見の席を嗣ぐ、享保十二年春、衆の請に應じて佛祖三經を講ず、無礙の辯を以て大に時聽を驚かす、日向の古月禪師、其勝會を聞きて來り訪ひ、偈を作りて之を賀す、其散場の日、會裏の龍象、圓覺經を講ぜんことを請ふ、是に由りて圓覺經略疏辨釋十七卷を著す、十四年信雄の一百年遠忌を修し、十五年春歳四十八にして綸命を奉じて妙心寺に住す、十六年信長一百五十年の遠忌に當り、諸老宿及び衆僧を請して大に佛事を行ふ、元文二年夏妙心再董の請を受け、八月朔入寺す、四年春總見寺寶藏を經始し、尋いで大般若經を備ふ、寛保元年四月七日寂す、世壽五十九、法臘四十九、寂するに臨み自ら觚を操りて書して曰く、法身本無相、諸相亦非相、何物最可似、無相是眞相と、總見寺に葬り、塔して無相といふ、著す所語錄數卷あり。（景陽續列祖傳）

二三　關通

關通、初名は元教、字は無礙、一蓮社向譽と號し、別に自ら雲介子と號す、淨土宗の僧にして、名古屋圓輪寺の開山なり、尾張海西郡大成村の人にして、俗姓は横井氏、元祿九年四月八日生る、六歳の頃自ら佛門に入るの心を發す、父母依りて郡の專德寺吳峯に從はしむ、吳峯見て凡兒に非ずとなし、九歳の時神明津壽仙院に入らしむ、院は眞言宗にして、住職某法師は、高德の聞えある者なればなり、居ること一年許、關通、吳峯の許に還りて曰はく、余他宗を望まず、願はくば早く淨土宗に入り、出家の本懷を遂げしめよと、是に於て吳峯、關通を伴ひて海東郡中一色村西方寺に至り、靈徹に見えて其祈願を述ぶ、靈徹喜びて之を坐下に留め、十三歳に至りて、剃染せしめ、名を與へて元教といふ、翌年精を增上寺に掛く、正德元年歳十六、春東遊して同寺山下谷玄達の室に入り、日夜研學して怠らず、二年貫主祐天大僧正の輪下に、五重を受得す、二十一歳宗戒兩脈を受け、又瓔珞庵敬首に參して菩薩戒を重受し、律儀を咨詢す、一日元亨釋書を讀み、源空の傳に至りて大に感發する所あり、即ち佛前に詣りて日課唱號二萬聲を誓ふ、後鎌倉光明寺觀徹に謁して、專修兼

戒の要義を問ひ、更に一萬聲を增受す、是より後益々寸陰を惜み、宗書を學び、傍ら他宗の書に及ぶ、關通緣山に寓すること十三年にして、享保八年西方寺に歸る、而して京師華頂山に登り、宗例に依りて賜香の天章を受く、時に自ら謂へらく、余嘗て宗祖の傳を讀み、感激する所ありて、永く世累を遁れ、二利を成就せんことを願へり、是より跡を一所に定めずして遊方せんと、直に畿內近國を行脚して行業を勵む、一日洛東照臨庵に靈潭に謁して菩薩戒を重受す、秋大和に赴き、常念寺に講說すること四十八日、去るに臨みて古笈一個を受けて出づ、又南都に至り春日神社に詣し、安倍の文珠に參籠すること一七日、紀伊を經て九州に至り、日向を經歷して古月禪師に會す、其訓誡に依り遠遊を止めて故鄉に還る、享保十年伊勢長島光岳寺に住し、翌年辭して山田に至り、總迦寺に寓して、徒跣兩宮に一百日の參拜をなす、尋いで同地總持寺に獨住菴居し、晝夜聲を勵まして稱號す、三日に一度粥を喫し、七日に一度飯を喫す、七日七夜睡眠を除き、百萬遍を成滿すること兩度に及ぶ、此時に當り深重の誓願を建て、自利利他の志操を堅くし、願文及び感得の事を自記し、一生固く之を秘せり、十二年三月西方寺に住し、十七年不斷念佛を開始す、二十年の冬、新に丈六の彌陀像を造立して本尊となし、佛殿、僧房、經堂、寮舍を經始す、十八年西方寺を以て專修兼戒の律場となさんと欲し、國廳及び本山に請ふ所あり、其國廳に稟請すること七十二回、本山に往返すること三十六回、元文元年に至りて其志を達す、乃ち西方寺を轉じて、圓成律寺と名け、敬首を開祖となし、三河崇福寺の義燈を移り住せしめ、寺務を遁れて益々自行に精勤す、三年津島伴氏の請に應じて貞壽寺を開き、五年江戸に至りて今戸に獅子吼庵を建つ、延享二年山田圓輪の請に依りて、名古屋に圓輪寺を起し、尋いで藏閣を建てゝ、黃檗板の一切經を藏す、寬延元年圓通寺を京都三本木に建て、又轉輪寺を洛北瀧鼻に營み、寶曆八年に至りて殿宇悉く成る、以て櫻町天皇追薦道場となす、明和元年獅子吼庵を下谷に移し安樂寺と號す、七年圓成、圓輪、轉輪、安樂、貞壽五寺の淸規を作り、二月二日轉輪寺に寂す、壽七十五、臘六十三、蓮臺野に茶毘して、轉輪寺に葬り、圓成、圓輪、安樂、貞壽、圓通の五寺に分骨す、後櫻町天皇、其像を禁中黑戸に迎へて供養し給ふ事三日なりといふ、關通氣質溫和、聰明絕倫、道心堅確、慈忍專精なり、別行を修する每に、數旬の間毫も睡臥せず、其西方寺を辭してより、住持の羈絆を脫し、以て自行化他に勉む、遊化する所、道俗男女、歸信渴仰せざるはなし、說法すること一萬八千餘會、得度の僧尼千五百人、戒を受くる者三萬餘人と稱す、著す所燧囊、勸化本義、一枚起請文梗概聞書、後世のつと、客問安心、臨終用心、歸妙本願鈔加俚語、燧囊俚語、修進記、臨終節要集錄、夢之知識、同續、托事辨、勸孝章、隨聞往生記、宗要義等あり。（關通和尙行業記、續日本高僧傳、蕚門經籍錄、海部郡人物傳記）

二四　覺融

覺融、字は宏道、白雲居と號す、眞言宗の僧なり、尾張の人にして名古屋城中天王坊（龜尾山安養寺）の第二十五世なり、奈良の諸大寺に遊びて因明を學び、後豊山に入りて盛に性相學を講ず、後世豊山性相學の鼻祖と稱せらる、覺融又儒に通じ細井平洲に交る、安永十年三月內藤東甫九老尙齒會を城南長榮寺に開く、覺融時に年八十、亦之に與りて歌を詠じて曰く、

八十年をたゝいたつらに過きぬれと花みてくらすけふそ樂しき

天明八年八月五日寂す、壽八十七、天王坊墓地（中區橦町に在りしが今覺王山に移る）に葬る、著す所因明纂解講錄二卷あり。（新義眞言宗史料、嚶鳴館遺稿、張城尙齒會）

二五　日勇

日勇、字は存道、本義院と號す、法華宗妙滿寺派の僧にして、名古屋の人なり、幼にして常德寺十二代日貴周達に從ひて得度す、日貴は學德共に高く、門下四十人あり、殊に宮谷檀林の南谿に、尾州寮を興し、門下の弟子をして寄宿就學せしむ、日勇其中に參して頭角を見はす、初め常德寺中忠善院に住し、後東行して宮谷檀林に入り、天台三大部を講究す、當時日受立圓、宗乘を以て聞ゆ、日勇親しく教を受く、後江戸下谷蓮華寺第十一代となり、次で上總松岸山本松寺第十七代となる。

寶曆三年十一月、檀林玄義講師に進み、七年五月第七十七代講經主に昇る、此年大衆相謀りて、日乘乾寵の文句攬剛を上木す、日勇訂正の任に當る、八年八月松の鄕に法席を張る、十日の間に一百座に及ぶ、信徒雲集し、聽者嘆服せざるはなし、同年十月、本山妙滿寺第百九代の貫主となる、九年十一月任滿ちて東歸の途次、名古屋を過ぎて、父母の墓を拜し、常德寺に宿泊す、詩あり曰く、學錦功成向故鄕、峯松年積薜蘿長、龍門欲躋龍腮勁、虎谷將超虎尾强、驚風亂巖三江水、墜葉斜侵一片霜、弊衽發揮親里宿、恩謝何克廟下香、十年十二月廿二日、松岸山本松寺に寂す、壽詳ならず、著す所、二教合璧論五卷、易學原正三卷、儒佛心性論衡二卷、蒲鞭折疑論、塔山紀行各一卷あり、二教合璧論は主として新井白石の鬼神論を辨駁せるものなり。（日勇上人略傳）

二六　頑極

頑極、名は祖隆、曹洞宗の僧にして川名新豊寺の開山なり、又彦根清涼寺に住す、同時臨濟に白隱ありて盛名天下に鳴る、頑極之と氣格を同うし、相頡頏す、人あり等の畫を持して白隱の贊を需む、白隱書して曰く、之を持して天下の惡知識を拂へと、又來りて頑極に需む、頑極筆を操りて、先づ白隱を拂ふべしと書す、其高格これを以て知るべし、頑極傍ら畫を作り

妙境に至る、明和四年十二月十日寂す、墓は新豐寺（今廢寺となる、東山青兒院南山寮の地なり）にあり、門下より永平玄透を出だす。（墓碑、尾張人物志）

二七　百　非

百非、名は惠仁、字は太慈、默天、又百非道人と號す、眞宗（本願寺派）の僧にして、名古屋善龍寺第七世なり、學德頗る高く、本山學林代講師となる、詩及び書を善くし、修道の暇、文詩に遊戲す、其居に胡桃庵、玄々室、必强齋、葡萄關、櫻櫚林、南燭岡、紫陽洞、玉蟾窟、六花窓、安樂場あり、時々文詩の友を延きて、以て相驩す、松平君山、千村鷺湖、南宮大湫、堀田恒山、津金鷗洲、岡田新川、磯谷滄洲等相携へて其室を訪ひ、皆其高風を推重す、明和五年五月十一日寂す、同寺中に葬る、本山贈るに勸學を以てす。（善龍寺文書、弊帚集、自適園集初編）

二八　日　耕

日耕、恭壽院と號す、本門法華宗長榮寺第八世なり、尾藩の士竹內三左衛門の第二子にして、同寺六世日遵に從ひて學ぶ、後尼崎本興寺の塔頭一乘院に住し、寛延二年入りて長榮寺に住す、學力深遠、尤も宗乘に精通し、著す所に本迹境智論、本迹精確論、童蒙本迹易解抄、本迹研究抄、研究抄別記、法華賞善錄、經王奇驗論、當家略要抄、神佛冥應論講談、錄內祖書要文、錄外祖書要文等あり、安永二年九月二十日寂す、世壽六十二、本山歷代の次に塔す、（名古屋寺院志）

二九　祥　鳳

祥鳳、名は禪瑞、臨濟宗の僧にして、總見寺第九世なり、俗姓は野瀨、享保二年四月八日美濃に生る、性聰敏にして夙に出家の志あり、父母其の佛と同日の生なるを以て、其志を遂げしめ、十歲にして總見寺霖翁に從ひて剃染す、後行脚して丹の法常に至り大道に參して正眼を豁開し、後霖翁を歸省す、霖翁提誨殊に嚴にして、日に玄奧に臻る、霖翁寂するに臨み、後事を屬す、是に於て印證を承けて總見寺に住す、時に歲二十五なり、寛保三年妙心に轉版し、寶曆八年三月勅を奉じて妙心に出世す、爾來三たび華園に住し、四たび天子に謁す、九年總見寺廚堂を再建し、明和元年衆の請に依りて圓覺經を講ず、僧衆百餘人、叢規整齊、稍子之を敬畏す、住山三十七年にして、安永六年七月十二日寂す、世壽六十一なり。（景陽續列祖傳）

三〇　玄　透

玄透、字は即中、曹洞宗の僧にして、永平寺第五十世なり、享保十三年尾張名古屋に生る、出家して新豐寺頑極に師事し、頑極の彥根清涼寺に轉ずるに及び、之に隨ひて其法を嗣ぎ、尾張新豐寺（同寺三世）美濃善應寺（同寺十一世）武藏龍穩寺等に住し、寛政七年歲六十八にして永平寺四

十九世國元の後を承く、當時永平の宗風甚だ振はず、疲弊其極に達す、而して總持寺と軋轢し、總持寺は幕府に訴へて、峨山派下の徒は永平に出世すべからざることゝし、自ら別立せんとす、玄透幕府に出でて抗論し、遂に舊例に復するを得たり、其越山に住してより祖規を復古して新に正法眼藏七十五卷、及び大清規等の祖訓を補註校讐して開板し、又小清規を著述して、末派大小の寺院に流布し、大に一門の宗風を振ふ、初め玄透雲衲たる時、袈裟匣に拂子を蓄へ、時に出して之を振ふ、同輩咸な之を哂ふ、玄透曰く、野衲他日永平寺に住し、大に宗門の刷新を謀らんとす、故に今より大禪師たるの風度を習ふと、果して其言の如し、寛政八年五月十日勅して洞宗宏振禪師の號を賜ふ、玄透、朝廷に奏して勅願祈禱の實を擧げんとし、享和元年に至りて、其勅許を受く、二年高祖五百五十年の大遠忌を修し、後美濃善應寺に退隱して空華庵に居り、文化三年四月二十八日寂す、世壽七十九、同寺に葬る、玄透永平に在りて諸伽藍を再建し、大に曹洞一宗を改革して頽瀾を既倒に回へし、永平を中興せるの功實に偉大なりといふべし。（日本佛家人名辭書、善應寺文書、五十嵐絕聖師談話）

三一　大枝

大枝、字は梅嶺、曹洞宗の僧にして萬松寺第二十二世なり、享保十九年京都に生る、生涯固く鄉里氏族を語らず、或は云ふ、堂上縉紳の落胤なりと、幼にして出塵の志あり、密かに台家の律師に就きて教を受く、偶々禪の他宗に勝るを聞き、心潛かに之に歸せむとす、時に萬里虎關の丹波龍福寺に在るを聞き、徑ちに往きて薙髮を乞ふ、時に年十歲なり、虎關其志の切なるを見て、遂に之を許す、是より親しく業を受け、夙夜側に在りて仕ふること甚だ務む、後虎關の命に依り尾張に詣り大鈍底公に就く、隨從三年、一夜大鈍、禪修を激勵せんが爲に、自ら手燈を黙して視る、是に於て益々憤を發し、潛かに幽谷に入り、攝心定坐するもの凡一月有餘、一日物に感じて、忽然として省する所あり、方丈に詣り、其所感の旨を陳ぶ、大鈍屢々古人難透の話を詰問するに、應答流るゝが如く、都べて宗意に契ふ、大鈍仍りて一偈を附して證明す、是より頻りに撥草瞻風の志を發し、諸方耆德の門を敲かむと欲し、美濃全超寺に赴きて宋端を見る、時に宋端蓼拶して曰、如石霜七去の話汝畢竟作麼生領會すと、大枝曰、天共白雲曉、水和明月流、と是に於て宋端亦偈を以て證す、時に大枝二十三歲なり、後尾張新豐寺に頑極を、加賀の大乘寺に覺門を見、其餘時の碩德宗匠、組參謁して證明を取らざるはなし。

大枝、一僧と共に江戸に在ること數月、僧の曰く、此地は修行に適せずと、大枝其所以を問ふ、曰く此地の婦人盛粧して艶冶なり、頗る人心を動かす、永く此地に留るは害あり、大枝曰く注意甚だ可なり、我所思に合す、然らば此地を去らん、僧曰く何れの日にか去らん、曰く今日唯今を以て去らん、僧曰く甚だ急なり少らく待てと、曰修行に害ありと感ぜば一時も猶豫すべきにあらず、汝は兎もあれ我は今より去らんと、是に於て僧も亦共に俱にす、道箱提

を過ぎり、權現祠を拜す、大枝久しく祠前に祈り時を經て來らず、僧問て曰く、祈念する所何事ぞ甚だ時を移せり、大枝曰汝と共に江戸を去りしは色慾を絶たむが爲なり、我此神に誓ひ慾念を萠さば直に蹴殺し給へと祈れりと、僧大に其道心の堅きに服せりといふ。

大枝遊方多年にして尾に歸る、幾ならずして兒玉村觀音寺僧屋初めて江湖會を開き大枝を迎へて第一座とす、既にして了り、大鈍を省す、大鈍附するに法脈及信衣を以てし、更に囑して曰く大法を弘通して斷絶せしむるなかれと、時に歳三十六なり、明和三年九月美濃本覺寺洞天寂す、遺命して大枝を迎へて住せしむ、大枝初めて此に住し檀徒と力を戮せ本堂を再建す、翌年能登總持寺に瑞世す、時に尾張永安寺桃徹退隱し、大枝をして後住たらしむ、同年夏初めて法幢を建て、以後年々夏冬を簡ばず、諸寺の結制及び戒會の請に應ず、安永八年國主の命に依りて大光院に遷り、新に禪堂を建て、又庫裏山門を營み、巨鐘を造り、大般若經を具へ、且諸の什具を備ふ、且廳に請ひて隨會の格に準じ、屢々法幢を建て、住山十四年間、九回に及ぶ、藩主其勤勞を賞し時服の賜あり、後年大光院、大枝を以て中興の祖とす、寛政四年更に命ありて萬松寺に移る、是に於て永安の末寺正福寺を改創して法幢の地となす、仍て大枝を以て開山第一祖となす、又萬松の末寺靈岳、陽岳の二寺を法地となす、寛政六年春、會々微恙あり、衆大戒會を啓かんことを請ふ、病を以て辭すれども、固く請ひて止まず、曰く惟慧老師此會を開きしより以來久しく絶えて斯の舉なし、冀くは之を啓建せよと、是に於て勉强して之に從ふ、戒子凡三百五十餘人、大枝身に病ありと雖も、日々坐に陞りて委しく戒儀を說き、完戒に至りて暗に最後の敎誡を示す、既にして病益々重く、日々衰勞を見る、然も其諸弟子の爲に敎誡を垂るゝ、曾て平生に異ならず、六月十九日に至り、自ら其終の近きを知り、徒衆及び歸依の道俗を招きて、親ら遺誡をなし、一偈を示して曰く、時逢極熱難回避、熱殺閻梨蓽直還、記取鏘頭無冷處、各持大法勿弛肩、翌二十日禪牀に凭りて坐す、左右頻りに遺偈を請ふ、乃ち筆を操りて書して曰く、六十四年、瞎驢安禪、末後一句、烏龜上天、咄、筆を投じて恬然坐化す、世壽六十四、法臘五十一、弟子全軀を奉じて洞雲山正福寺に葬り、塔を厥龍頭に立つ。（龜山志、青窓漫筆）

三二　臥山

臥山、名は靜高、曹洞宗の僧にして、萬松寺第二十四世なり、尾張海東郡甚目寺村に生る、俗姓は東松、幼にして出世の志あり、乃ち龍源寺定保に從ひて薙髮す、定保の長榮寺に移るに及び、隨侍して能く仕ふ、後越中に往きて光禪寺道察に參し、其策勵を受け、日夜研究して止まず、明年の夏伊勢に往き、曹海の會を扶け、仍ほ參究を以て事とす、秋光禪に歸り道察に侍して五歳を經過す、後諸州の大德を訪ひ、法門の龍鳳を以て稱せらる、一年吉野に詣り、西行庵に居ること一歳、蒲團に兀坐して餘事を交へず、大に身心の大徹せるを覺ふ、乃ち長榮に